



棚田キャンプ



ししおどし



第29回

全国棚田 (千枚田) サミット in 上田

～カカワレル棚田「ずく」を集めて 未来につなぐ～

2024 年
10 月

17 木
日

18 金
日

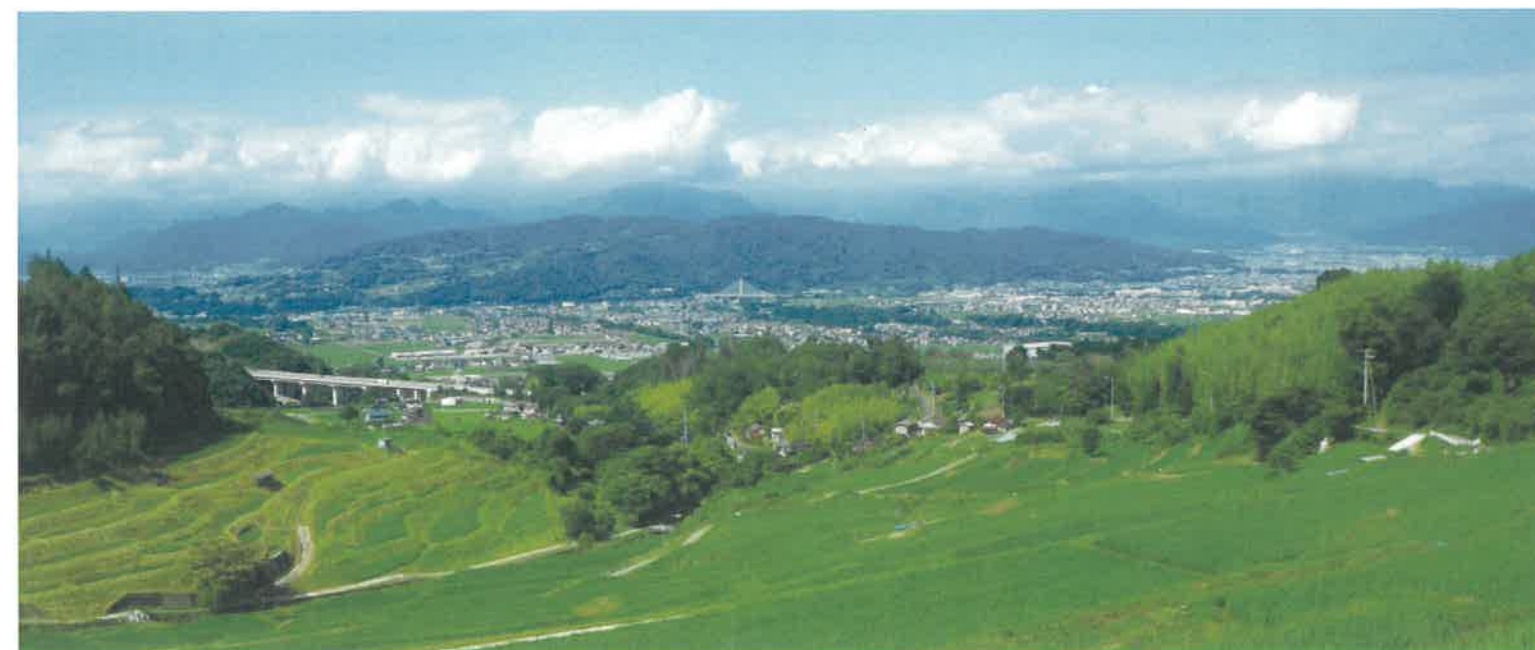
報告書

第29回

 全国棚田 (千枚田) サミット in 上田

第29回全国棚田 (千枚田) サミット実行委員会(上田市役所 農業政策課内)

〒386-8601 長野県上田市大手一丁目11番16号
TEL:0268-21-0053 FAX:0268-23-5982 E-mail:nosei@city.ueda.nagano.jp





第29回

全国棚田（千枚田）サミット in 上田

目次

共同宣言	1
大会概要・参加者数	2
大会日程	3
後援団体・来賓紹介	4
式典	5
第1分科会	11
第2分科会	27
第3分科会	37
第4分科会	49
現地からの報告（白米千枚田）	63
事例発表	65
閉会式典	73

第 29 回全国棚田(千枚田)サミット 共同宣言

私たち、棚田に生き、棚田を守る者は、長野県上田市で開催された「第 29 回全国棚田サミット」において、「カカワレル棚田『ずく』を集めて未来につなぐ」をテーマに、棚田が持つ多面的機能の発揮、持続的な保全等について事例を共有し、議論を行いました。

棚田は、先人たちが厳しい自然条件の中で努力を重ね、豊かな農村文化を築き上げてきた貴重な農業資産です。棚田がもたらす恵みは、食料生産のみならず、美しい景観や教育・研究の場の提供、生物多様性、国土の保全など、私たちが生きるうえでのあらゆる面にわたります。

しかし、人口減や有害鳥獣の被害、耕作放棄地の増加等により、棚田を含む中山間地域が荒廃の危機に直面しており、私たちは今こそ”ずく”（やる気・根気）を出し、多くの関係者のカカワリと共にこの困難に立ち向かい、次世代へ棚田がもたらす恵みをつないでいかなければなりません。

棚田地域振興法の成立から 5 年が経ち、法に基づく地域指定・計画認定、「つなぐ棚田遺産」の選定など国があらゆる角度から棚田の支援策を展開しています。国の支援と全国各地の棚田保全活動により、棚田の多面的機能や魅力を広く発信することで、国民共有の財産といえる棚田の保全機運がより一層高まる事を期待して、次のことを宣言します。

- 一 我々は、持続的な棚田保全活動に取り組みます。地域の棚田を未来へつなぐため、地域の住民や企業等と連携し、豊かな自然環境と水資源を守り、棚田の美しい景観と文化を後世に伝えていきます。
- 一 我々は、都市と農村の交流を促進します。農作業体験や観光を通じて、多くの人々が棚田と関わりを持ち、地域の活性化につながる新たな機会を創出します。
- 一 我々は、次世代に引き継ぐ交流や学びの場を提供します。棚田が育む伝統文化や生きものを大切に保全し、教育機関と連携し、子どもたちに棚田が持つ多面的機能を伝え、発信し、様々な立場の人々が棚田の保全活動に積極的にカカワレルように努めます。

令和 6 年 1 0 月 1 7 日
第 2 9 回全国棚田（千枚田）サミット参加者一同



開催日程	令和6年10月17日(木)～18日(金)
開催地	長野県上田市
主催	全国棚田(千枚田)連絡協議会
主管	第29回全国(千枚田)サミット実行委員会
テーマ	～カカワレル棚田「ずく」を集めて 未来へつなぐ～
開催趣旨	棚田は食料生産の場であるだけでなく、伝統・文化の保存、美しい景観、教育、国土保全といった様々な機能を持っています。棚田の保全活動を実施する多くの関係者が一堂に会し、中山間地域の様々な課題や先進事例を共有・発信することで、より多くの人々がカカワレル棚田を創出し、未来につなぐため、全国棚田(千枚田)サミットを開催します。
参加人数	461 人 一般参加者

参加者	分科会		16日宿泊	17日宿泊	現地研修	
一般参加者	第1	195	145	236	コース1(梶子)	83
461	第2	46			コース2(柳町①)	77
	第3	139			コース3(柳町②)	75
	第4	23			コース4(姨捨)	33
	ミニA	15			コース5(ため池)	25
	ミニB	21				
	ミニC	13				
461		452	145	236		293

来賓等関係者	87人
豊殿小学校児童	187人

令和6年10月17日（木）		
時 間	内 容	場 所
10:00～	開会	
10:20～	第1分科会 「棚田活用の取組み方とねらい」	東急 REI ホテル 3階 「信濃」
	第2分科会 「棚田と教育機関との連携」	上田高砂殿 2階 「瑞松」
	第3分科会 「企業も棚田も得するかかわり」	サントミュージゼ 小ホール
	第4分科会 「子どもたちが創る棚田のミライ」	サントミュージゼ 大スタジオ
	ミニ分科会A「地元愛を育む場所としての棚田へ」	サントミュージゼ 多目的ルーム
	ミニ分科会B「関わる人の多様化と可能性の拡大」	サントミュージゼ 第1会議室
	ミニ分科会C「10年後の棚田のあるべき姿」	サントミュージゼ 中スタジオ
14:00～	式典 活動発表 豊殿小学校 現地からの報告 白米千枚田愛耕会 事例発表 稲倉の棚田保全委員会 信州棚田フォトコンテスト結果発表 閉会式典	サントミュージゼ 大ホール
18:30～	参加者交流会	東急 REI ホテル 3階 「信濃」

令和6年10月18日（金）	
時 間	内 容
	現地研修会 （現地研修会終了後、解散）
8:30～	稲倉の棚田と梔子ファイナリー見学コース
9:00～	稲倉の棚田と上田城跡と柳町通り見学コース
9:30～	稲倉の棚田と上田城跡と柳町通り見学コース（出発遅め）
9:00～	国の名勝 姨捨の棚田（千曲市）見学コース
9:00～	日本遺産・ため池百選見学コース

後援団体

農林水産省、国土交通省、環境省、文部科学省、全国知事会、全国都道府県議会議長会、全国市長会、全国市議会議長会、全国町村議会議長会、一般社団法人全国農業会議所、一般社団法人全国消費者団体連絡会、日本生活協同組合連合会、全国土地改良事業団体連合会、一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構、一般社団法人全国農業会議所、全国農業新聞、公益社団法人全国農業共済協会、株式会社日本農業新聞、長野県、長野県市長会、長野県町村会、長野県市議会議長会、長野県町村議会議長会、全国農業協同組合連合会長長野本部、一般社団法人長野県農業会議、長野県農業共済組合、長野県土地改良事業団体連合会

来 賓

- 参議院議員 杉尾 秀哉 様
- 内閣府 地方創生推進事務局 局長 石坂 聡 様
- 農林水産省 農村振興局 農村政策部 部長 神田 宜宏 様
- 農林水産省 関東農政局 局長 安東 隆 様
- 長野県 副知事 関 昇一郎 様
- 長野県 県議会議員 農政林務委員会 副委員長 竹内 正美 様
- 長野県 県議会議員 清水 純子 様
- 長野県 県議会議員 林 和明 様
- 長野県土地改良事業団体連合会 会長 藤原 忠彦 様
- 長野県千曲市 経済部 部長 稲玉 修治 様
- 上田市 市議会議員 半田 大介 様
- 上田市 市議会議員 武田 紗知 様
- 上田市 市議会議員 高田 忍 様
- 上田市 市議会議員 佐藤 論征 様
- 上田市 市議会議員 金沢 広美 様

【主催者あいさつ】

全国棚田（千枚田）連絡協議会 会長

那智勝浦町長 堀 順一郎



皆さんこんにちは。私は全国棚田千枚田連絡協議会の会長を仰せつかっております、和歌山県的那智勝浦町長の堀と申します。本日は、第29回全国棚田千枚田サミット in 上田ということで、本当にたくさんの方々にご参加を賜りまして、本当にありがとうございます。心から歓迎申し上げたいと思います。また公務ご多忙の中、地元長野県からは関昇一郎副知事様、それと参議院議員の杉尾秀哉様そして内閣府の地方創生推進事務局長の石坂聡様ほか多くの方々にご出席を賜りまして、本当にありがとうございます。

まずは、昨年、私ども和歌山県那智勝浦町で第28回の棚田サミットの開催をさせていただき、多くの方々にお越しをいただきました。今日出席の方々もいらっしゃるかもしれませんけれども、本当に多くの方にお越しいただいて、特に地元の方々いろいろな方々と交流を深めて今後の棚田のあり方というようなことを再度検証をしながら進めていきたいというようなことで、地元が盛り上がっているところでございます。

本日明日と第29回の全国棚田サミット in 上田ということで「カカワレル棚田「ずく」を集めて未来につなぐ」が開催されます。実は私「ずく」っていう言葉は全然知らず、反対にくずって見えてしまうんですけど、「ずく」っていうのは本当に一生懸命にするということで、今まで棚田を守ってきた皆さん方のその想いがここに込められていますし、次に繋ぐためにも一生懸命身を粉にして棚田を守っていく方々を集める、そういったサミットの意気込みがあるんじゃないかなというふうに思います。本日、この入場の前に信州の棚田のフォトコンテストがありました。稲倉の棚田はもちろんですけども信州には本当に素晴らしい棚田があるなと思ひまして、私も1票投票して参りました。そういった意味で長野県上田市で棚田サミットが開催されるっていうのは大変有意義なサミットになるんじゃないかなというふうに思います。

全国の棚田を抱えている地域、棚田保存会の皆さん方、全国同じ課題だと思いますが、やはり担い手不足、高齢化、鳥獣被害それに加えて、災害による棚田の崩壊ということが言われています。特に今年1月に発生しました

能登半島では、土砂崩れ、あるいは9月の大水害によりまして、大変な被害を受けて白米千枚田の皆さん方、10分の1ぐらいしか田植えができなかった、という情報がございます。そういった意味で、いろいろな地域で大変なご苦労を抱えながら活動されているということでございます。皆さん方、棚田地域振興法はご存知だと思いますが、これは時限立法で令和7年の3月に法期限が切れます。そういったことで、ぜひとも、この棚田地域振興法を継続していきたいと思っています。今年の5月、立憲民主党の杉尾議員もいらっしゃいましたが、棚田の状況を教えてほしいということで、私が棚田の事情を説明しました。また、6月には超党派の棚田議連においても、私ども出向いていき、棚田の現状などを報告したところでございます。この法律の改正にあたりましては、現在はちょうど選挙期間中でなかなか動けておりませんが、選挙終わりましたら、要望活動をしていきたいと思いますので、ぜひ皆さん方にご協力をいただきまして、棚田地域振興法の更新、さらには、より良い条件での改定を目指していきたいと思っています。

最後になりますが本日、この上田市でのサミット開催のために、上田市の土屋市長を始め、関係者の皆さん方には、準備から運営に至るまで多大なご尽力を賜り、本当にありがとうございます。そして本日ご参会の皆様方が、このサミットによりまして、より良い棚田地域の活性のために、実りのあるものになることをご祈念申し上げまして、簡単ではございますが、冒頭のご挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございます。

【開催地あいさつ】

第29回全国棚田（千枚田）サミット実行委員会会長

長野県上田市長 土屋 陽一



ご紹介いただきました実行委員長の上田市長の土屋陽一です。先ほど堀会長のお話ありましたように、長い歴史の中で、私達は先人の想いを次世代に繋げなければいけない、この棚田への想いを繋げなければいけない、そういう皆様がお集まりになっていると思います。

また、本日は能登半島の輪島市からもお越しいただいております。能登半島につきましては、元旦の大地震、そして9月の豪雨災害ということで大変な状況の中でも、棚田を守っていこう、という想いを発表されると伺っております。災害に遭われた皆様、お亡くなりになった皆様には、お見舞い申し上げたいと思います。

この棚田のサミットにつきましては、全国棚田千枚田連絡協議会の顧問であります中島先生をはじめ、大変多くの後援団体の皆様にお力添えをいただいております。皆様には、心から感謝申し上げるとともに、それぞれの来賓の皆様には本当にご多忙の中お越しいただきまして、誠にありがとうございます。特に、長野県の皆様には、絶大なるご尽力をいただいております、御礼申し上げたいと思います。

さて、上田市につきましては、一つすれば700年代に信濃国分寺がこの地にあったということ、そして、その後は真田氏の居城でもあったということで歴史的な風土があります。また自然風土の中では、南は美ヶ原高原、そして北側にはラグビー合宿の聖地と言われております菅平高原があります。その真ん中に千曲川が流れているという場所があります。

そして、稲倉の棚田は東北東の地に位置取り、先人の皆様のお力をいただきながら今に生き、最近では、天皇杯も受賞しているということもありまして、大変注目されている棚田でございます。先ほど堀会長が「ずく」は何かというお話しがありましたが、おそらく稲倉の棚田の皆様も、「ずく」を出しながら、歴史を繋いできているのかなというふうに思っております。

今、大変な農業環境もあるわけでございますが、今日明日は、皆様と一緒に棚田について改めて、その必要性を感じ取っていただき、次の世代にぜひ繋げていただければ幸いです。そういう役割を今日お集まりの皆様お1人お1人が担っているのではないかなというふうに思っております。

プログラムにつきましてはお手元にありますけれども、既に午前中から七つの分科会が行われておりますし、この後、豊殿小学校の全校児童による合唱があります。

また先程申し上げました輪島市の白米千枚田愛好会の皆様から、現在どうなっているのかという、ご報告をいただきます。そして、また明日は現地研修もあります。稲倉の棚田をはじめ、梶子ワイナリー、柳町あるいは日本遺産ため池百選のコースがあります。さらには、上田市内には日本酒の酒蔵が六つありますし、またクラフトビールもございます。それぞれのお立場で、この2日間を楽しんでいただき、昼の部夜の部それぞれ皆さんと交流を深めていただくことを心からご期待申し上げます。

結びになりましたが、本サミットにあたりまして、多くの皆様にお力添えをいただいたことに感謝申し上げますとともに、那智勝浦町から上田市そして別府市へと繋げていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。本日誠にありがとうございます。

【開催県あいさつ】

長野県副知事 関 昇一郎



駆けて、棚田の保全活動に対する県からの助成制度を始めさせていただきます。維持管理ですとか、イベントをやっていただくものに県として支援をしようということで、現在も続けさせていただいております。

また、令和元年から、信州の棚田ネットワークを設立いたしまして、棚田の魅力そして保全活動を情報提供していこうということで取り組んでおります。

また棚田保全は、地元の皆さんだけではできません。この稲倉の棚田でも酒造会社等の皆さんと連携協定を締結され、こういった協定をなるべく全国各地に広めていただくような取り組みをしているところでもあります。

そういった意味でこの棚田をいかに守り、そして継承していくか、こういった観点から、さらに県としても力を入れていきたいと思っておりますし、これが広く国民の皆さんにもご理解いただけるように取り組んでいきたいと思っております。

最後になりますが、今回のサミットが盛大にこうして皆さんにお集まりをいただいた中で、実り多きものとなりますように、ご祈念を申し上げますとともに、本日お集まりの皆様のご健勝ご多幸を祈念いたしまして、開催地長野県からの挨拶とさせていただきます。

【来賓祝辞】

参議院議員 杉尾 秀哉 様



皆さんこんにちは。ご紹介いただきました長野県選出の参議院議員をしております杉尾秀哉と申します。

本日は第29回全国棚田千枚田サミット in 上田、こうして近隣地域の皆さんはもとより、全国各地から大勢の皆さんが集まって盛大に開催されますことをまずもってお慶び申し上げます。お招きいただきましてありがとうございます。

ご承知のように衆議院議員選挙が行われておりまして、地元の議員の方も候補者として走り回っていて、ちょっと今日は出席できないだろうということで、国会議員が誰もこのサミットに出ないのはまずかろう、と私も選挙の応援をしていたんですけれども中断をいたしまして、やってきました。

また私も棚田振興議員連盟のメンバーでございます。先ほど堀会長からご紹介いただきましたように、党のワーキンググループの方でもワーキングチームの方でも活動させていただいております。

今お話がありました稲倉の棚田、そして、この近くにはあの有名な姨捨の棚田もあります。田毎の月は本当に幻想的で去年中秋の名月で見に行きましたが、本当に素晴らしい光景でした。私も全国各地選挙の応援であったり、私前職がテレビのニュースの仕事をしていたものですから、いろんなところに行くことが多くて、やっぱり棚田が有ると気になっているところを見てきました。

今日お越しいただいておりますが、1月1日の地震、そして先日の豪雨災害で白米千枚田が本当に甚大な被害を受けました。本当に地元の皆さんにお見舞いを申し上げますとともに、この白米千枚田の1日も早い復旧復興に全力で取り組まなければいけないと思っております。

それから長崎の大村湾の方に確か鬼木棚田という棚田があったと思うのですが、ここは石垣で積まれている素晴らしい棚田で、景観が本当に圧倒的なんですね。ただ、上の方で見えますと、やっぱり維持できない棚田がいくつかあって放棄地になっている。こういう状況を見ると、本当に棚田の保全というのは大変だなと感じます。

そういう意味では、棚田地域振興法、先ほどこれも堀会長からご紹介いただきましたように、今年度末、来年の3月末で切れるということで、改正法の方、これを作

らなければいけないということで、政局の方が落ち着いたら、来年の通常国会になろうかと思っておりますけれども、一つまたバージョンアップしたような形で、法改正の方も取り組みをさせていただきたいというふうに思います。

日々こうして棚田の保全活動をしている皆さんに深甚なる敬意を表しますとともに、この稲作文化の象徴的な存在でもあります、この棚田を未来永劫に守っていくために、私たち全力で力を合わせて頑張りたいというふうに思います。締めくくりになりますけれども、今日お集まりの全ての皆様のご健勝ご活躍をお祈り申し上げます。私よりの一言のお祝いのご挨拶をさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

【来賓祝辞】

内閣府
地方創生推進事務局長 石坂 聡 様



こんにちは、内閣府地方創生推進事務局長の石坂でございます。はじめに本サミットの開催にご尽力いただきました皆様方、そして全国棚田連絡協議会の皆様を初め、多くの方々が出席され、本サミットが盛大に開催されますことをお慶び申し上げます。

棚田でございますけれども、皆様ご承知の通り、農産物の供給にとどまらず、国土の保全、水源の涵養、生物の多様性の確保、良好な環境の形成、景観の形成、伝統文化の継承など様々な機能を有しておりまして、これは後世に残していかなければいけない国民的財産だと考えているところでございます。

令和元年により、議員立法で作っていただきました棚田地域振興法でございます。こちら堀会長の方からもお話ございましたように、今年度末で期限を迎えてしまいます。こうしたものについても、内閣府とししましても関係省庁と連携しながら対応、準備をしていかなければいけないのかなというふうに考えているところでございます。

この棚田振興法でございますけれども、棚田の地域指定、棚田地域振興活動計画これを認定する仕組みがございます。この地域指定も730の地域、計画も200計画の認定がなされており現在取り組みが進められているところでありまして、これを一層進めなければいけないと考えてございます。

私、地方創生推進事務局長でございますけれども、まさに今話題の地方創生を担当させていただいております。今般の石破総理におかれましても、初代の地方創生担当大臣ということで、大変地方創生を進めるべきということで今打ち合わせを進めているところでございます。

先週の11日の金曜日でございますけれども、新しい地方経済生活環境創生本部ということで、設置が閣議決定されたところでございます。その中で地方こそ成長の主役という打ち合わせがされたわけでございますけれども、この棚田も含め、地方創生、地域作り、まち作り農村作り、そうしたことをですね、やっぱり進めていかなければいけない、これを想いを新たにして、関係省庁とも一緒に進めてまいろうというふうに考えているところでございます。

ここ来る前に稲倉の棚田を見させていただきましたけれども、単にこの棚田の景観のみならず、様々な関係者ですね、地域の関係者、自治体、住民、企業、NPOあるいはここに住んでいないけれども、その担い手になってくれる都会の人たち、そうした関係者の方々が本当にみんな協力して進めているからこそ、この棚田が守られ続け、かつ、ちゃんとお米も作って、お酒も作って供給もしている、そういうことが大事なんだなというのを感じ取った次第でございます。

全国棚田千枚田サミットでございますけれども、今日明日ということでございますけれども、このサミットが成功し、また皆様方のご健勝ご発展を祈念申し上げます私の挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願い申し上げます。



テーマ： 棚田活用の取組み方とねらい

～棚田保全に必要なこととは～

【内川氏】

あらためまして、皆さんこんにちは。信州大学の内川と申します。今日はどうぞお付き合ってください。遠くから全国各地の棚田から起こしいただいたことを感謝申し上げたいと思います。この第1分科会のテーマはここにありますように「棚田活用の取組み方とねらい」ということなんですね。私が講演というよりは、今日は隣に座っていただいている玉崎さん、稲倉の棚田保全委員会で活動されている玉崎さんと2人でトークショー的にやりたいと思います。大学の教員が講演することはよくあるんですが、あまりおもしろくないということで、今日は少し気楽にお聞きいただきたいなということと、もう1つはこのセッションのねらいとしますと、稲倉での活動をあらためて今日ご紹介するわけですけど、そんな稲倉の棚田でも人知れずご苦労があると思います。そのへんを少し私の方からお聞きしながらご紹介いただきたいなと思っています。そのことが各地の棚田の地域の方々にも何か少しヒントになるのではないかと考えております。ディスカッションでも是非活発なご意見をいただければ幸いです。では、短い時間ですので早速始めたいと思います。流れを最初に説明いたしますけれども、1つ目がよく知られているところの稲倉の棚田の紹介です。これまでの歩みと特徴について玉崎さんの方から説明します。2つ目以降から本題に入りますけれど、活動を支える取り組みの実情みたいなことですね。そこで実際の苦労や課題について是非触れていただきたいと思います。そして3つ目がそうした課題に対してどのような対応をしてきたのか、しておられるのかを取り上げて今回はそのあたりを少し深掘りできたらと思います。4つ目は農水省の方からもサポートをしていただいておりますので、全国に対してのお話もありますし、多面的機能ということで稲倉の棚田で昨年から少し調査もしていただいておりますので、そのへんのお話も触れていただくことになります。最後に会場の皆さんからの質問と意見交換の時間をしっかりとりたいと思っています。よろしく願いいたします。それでは最初に稲倉の棚田の歩みと特徴ということで稲倉の紹介を玉崎さんの方からしていただきたいと思います。

【玉崎氏】

ご紹介いただきました玉崎と申します。よろしく願いいたします。まず稲倉の棚田の歴史ということで概略をご紹介させていただきますのですが、元々江戸時代に開田されたものだと言われているんですけども、具体的な資料はなくて、私どもが紹介させてもらうのは、実は稲倉の棚田には6世紀から7世紀頃と言われている横穴式古墳があります。今現存しているのは3基だけなんですけど、元々13基くらいあったということで、その頃からあったということでご紹介させていただいています。こちらが横穴式古墳です。保全活動についてなんですけど、平成11年「日本の棚田百選」認定を契機に地元の有志が集って保全活動を開始したという経緯があります。稲倉の棚田保全委員会自身は任意団体なんですけど、今の中心となる組織は地元のまちづくり協議会の組織として動いているという状況です。色々

コーディネーター

内川 義行 氏
信州大学 学術研究院(農学系) 准教授

話 題 提 供 者

玉崎 修平 氏
稲倉の棚田保全委員会 地域おこし協力隊
西島 太加志 氏
農林水産省 農村振興局 地域振興課
篠崎 剛 氏
農林水産省 農村振興局 地域振興課

な貴重な農業資産を守る活動を全国に先駆けて取り組み始めていますが、常に一進一退ですので、そこらへんも含めてご紹介していけたらと思っています。まずは棚田オーナー制度です。他の棚田地域で採用されている所はたくさんあると思いますが、稲倉の棚田オーナー制度は人手を集めるというよりは、お客さんとして体験を提供するということをメインに考えてやっております。なので、作業は田植えと稲刈りに来てください、疲れたら休んでもいいし、来られなければ来なくてもいいですよというような、自由な形でさせてもらっています。大きく分けると棚田米オーナーと酒米オーナーと2つあるんですが、こちらの概略を説明させていただきます。まずは棚田米オーナーの推移ですね。ちょうど私も棚田米オーナーから始めて今地域おこし協力隊ということでのいるんですけど、私が関わったのが実は結構早くて、「お前が一番長い方なんだぞ」と言われているんですけど、平成20年、まだ18組の頃から関わらせてもらっています。私自身が着任したのが令和2年ですので、お陰様でそこから右肩上がりです。棚田オーナーがどんどん増えております。なぜオーナーが急に増えてきたのかという要因につきましては、練馬区は上田市の姉妹都市になるんですけども、令和2年に区報に棚田オーナーの募集の掲載させてもらいました。なので、今は棚田オーナーの多くは練馬区出身の方が来ていらして、上田まで1時間半で来れるというメリットもありますので、多くのオーナーが来てくれています。令和3年に棚田オーナーの経験から3つのプランを追加したらどうかということで、採用いたしました。そこからまた右肩上がりになってはきているんですが、そのあたり説明させていただきたいと思います。まず、棚田米オーナーの3つのプランとしまして、オーナーというのはグループで自分達の田んぼを持ちたいとか、小さい子に体験させたいなど結構要望が多岐にわたると思うので、そのオーナー様の要望をそれぞれ反映できるように3つのプランを用意しました。もともとの棚田オーナーというのは棚田サポーターになると思うんですけど、こちらを少し変え、もう少し進んだプランでエリアオーナー、もう少しライトなプランで棚田ファンというものをご用意しました。具体的に言いますと、エリアオーナーというのは占有の田んぼを割り当てまして、こちらで作業してもらいます。そこで収穫したお米を搗精して差し上げるというプランです。団体で来られている方や企業様がこちらを採用していただいてエリアオーナーになっていただいているという形です。ただ別で搗精するので、あまり多くこちらも受けるわけにはいけないので、限定5枠という形でやらせてもらっています。続いて棚田サポーターですが、前は田んぼごとに、例えば田中さんの田んぼとか鈴木さんの田んぼということでご案内していたんですが、なかなか田んぼが歯抜けになってしまうとか、来る日程でうまく合わなかったりとか、それぞれの田んぼに人がつかなければいけないとかという苦労もありまして、うちは作業日程を2週末をまたがる期間でご案内しているんですけど、日程が重なったオーナー様同士で一緒に田んぼの作業をしましょうということでもやらせてもらっ

ています。このメリットとしましては、オーナーさん同士も横のつながりができるということと、ベテランオーナーさんが初心者オーナーさんに教えることができるなど、交流ができるということがメリットだということが1つ。あとは同じ田んぼを田植えるので、保全委員の方も非常に手間が軽減されたというメリットがありました。続いて、棚田ファンですが、これは作業に来れないという方でも寄付金代わりにファンになっていただいて、2合パック×3個ということになっているんですが、今年は2合を6個という形でご提供したというような流れになっています。これも毎年毎年色々な反省点も踏まえて少しずつ変えているという状況で、実は来年度の棚田オーナーの募集も今検討中です。もう1つの軸となっている酒米オーナーです。ほかの地域でも酒米を作られているところもあると思うんですが、関わっていただいている岡崎酒造さんは非常にビジネス的な部分が強いです。保全が先というよりはビジネスが先にあって保全がついてくるのではないかなというようにお考えの持ち主です。なので、岡崎さん自体も棚田のお米で信州亀齢、稲倉の棚田産の純米吟醸を作るというのは、もともとの意図としてワイナリーを参考にした部分があります。日本酒を作っている酒屋さんというのは基本的に酒蔵を映すことが多いんですが、ワイナリーのように農園を映すことが少ないというお考えをお持ちです。テロワールを重要視した、どこのお米で作ったお酒なんだよということでブランディングしていこうということがございました。そこがウィンウィンの関係で相乗効果がありまして、岡崎さんは日本酒2024とかで検索すると上位5位には必ず入っているような、すごく有名な手に入らないお酒としてブランディングで成功されました。お陰様で酒米オーナーは募集開始から2日間経たないくらいにうまってしまうというように状況です。実際に体験の様子ですね。田植え体験ということで皆さんが一緒になってこういった田植えをしている状態です。これは稲刈りの様子ですね。子ども達も喜んでやっているのと、バインダーもオーナーさんにやってもらったりしています。必ず補助はつきながらという形にはなります。体験を通して交流人口は右肩上がりです。今とても保全委員会の貴重な収入源となっております。ただ、関係性を持ちたいとか、もっと仲良くなりたいという層が5%くらいいらっしゃるんですけど、ここを拾い上げていきたいなということで検討しております。次は、酒米オーナーさんの瓶詰め体験です。田植え稲刈りの体験は酒米オーナーさん共通でやっているんですが、最後お酒を醸して瓶詰めすることを酒蔵に入らせていただいて体験をするということを行ってきました。これも非常に好評だったんですけども、だんだん酒米オーナーさんが増える中で抽選形式でやっていたんですが、できれば岡崎さんのご要望で全員ができるサービスを提供したいという話もありまして、今年はちよっとこのへんを変えていこうと考えています。耕作以外の活動です。その1として、「ししおどし祭り」というのを今開催しております。冒頭のイメージ動画の中でもその様子ご覧になられたと思うんですが、ライトアップした中を松明を持って練り歩くという祭りをしております。香川県小豆島の中山千枚田で行われていた害虫駆除祈願の虫送りというのを参考にやらせてもらいました。この虫送りは確か「八日目の蟬」の映画で永作博美さんとかが出演されていたと思いますけれど、その様子を見て当時の棚田担当者が気に入りまして、是非稲倉でもやってみようということになりました。もともと稲倉にはほたる火祭り、基本的に棚田をライトアップしてそれを来たお客さんにご覧いただくというように他の地域でもやられていますけれども、そういったことは

やっていたんですが、もう少し見るだけではなくて参加してもらおう祭りにしていこうというのが、こちらの祭りの意図になっています。最近知ったんですが、長野県も虫送りという行事はやられていたみたいで、年配の方に昔は小学生が松明を作ってやっていたんだという話もうかがいました。実際、うちはししおどし祭りと名付けているんですが、イノシシの獣害がすごく多くて、それを火で追い立てるようなイメージを持った祭りにしようということで、ししおどし祭りとネーミングさせてもらっています。これが令和2年から始まったんですが、ちょうどコロナの時期でもありましたので、あまり大々的に募集はせずに地元と棚田オーナーさんだけでやってきました。途中から松明がなかなか難しくて灯油につけるとしても、持つ角度によって火が手元の方にきてしまったりとかで、小さなお子様なかなか一人では持てないという状況がありました。そこで、小さいお子さんにも安心して練り歩きができるようにということで、松明の代わりに竹提灯をワークショップを兼ねて作ることにしました。これはちょうどこの時期、令和3年から4年にかけて外から来ていた保全員の方がすごく増えまして、その中にとても手先が器用な方もいらして、そういうご縁がきっかけでこういったものを製作することができるようになりました。これがししおどし祭りの様子です。ほたる火に彩られた棚田を松明を持って練り歩いて、最後田んぼの中で花火まで打ち上げるということで、今精力的にやっております。その次が耕作以外の活動2ということで、棚田のキャンプです。これも私が棚田のオーナーになった時に、2017年から稲倉の当時の保全委員会の委員長さんに声掛けして、田んぼの中でキャンプをやらせてもらえないかという企画書を持ち込んで始めたのがきっかけです。それでご縁ができて、今は地域おこし協力隊としてこちらで活動しているんですが、棚田キャンプ、今年も継続してやっております。ただ、本当はこの秋も開催したかったんですが、今回棚田サミットで忙しくなってしまったということもあって、この秋は初めての中止ということで、春にまた仕切り直しということになります。2017年に始めたのを契機に、ちょうど翌年の2018年に棚田サミットが長野県小谷村で行いました。その時少し時間をもらいまして、棚田キャンプを紹介させてもらったという経緯がありました。棚田キャンプの開催でこういったことが広まったかというご紹介なんですけれど、アウトドア業界から違った形で棚田が取材されるということにつながりました。参加者が30代から40代の方だったんですが、そういう方々に棚田を訪れるという機会を設けることができて、そこからオーナーさんになっていただいた方もいらっしゃいます。あと、法政大学のサークルだったり、長野大学とか各大学機関の関係性が深まり、信州ハムさんから参加者にハムを提供いただくということから始めさせてもらって、今パートナーシップ協定を結びまして、パートナー企業になっていただいたという経緯があります。棚田キャンプは、田植えの前と稲刈りの後に田んぼの中でキャンプをするということでやっていたんですが、年中棚田を見ながらキャンプをしたいという要望が非常に多くて、キャンプサイトを数か所設けることにしました。これを宿泊型農業体験エリアとして始めまして、畑が田んぼの中にあって田んぼを眺められる場所にあるんですけど、その畑の部分で4区画くらいキャンプできる空間を作ったので一泊できるようなご案内をしています。宿泊された方はその野菜を自由に採って調理に使っていいよということで、ご案内して

おりまして、今まだ大々的には募集はしていないんですけど、シーズンになると週末は8割ぐらいまるかないう形で今やっております。サイトはこのウッドデッキがもともと棚田にありまして、そちらをご利用いただく貸切サイトというのと、あとウッドチップをひいている場所がテントサイトということで展開をしております。耕作以外の活動3としまして、泥んこASOBIというのを開催しております。これは5月より水を引いていくタイミングで子ども達に泥んこ遊びしてもらいたいというところから、人間代掻きと称しまして、代掻きの意味を説明しながら子ども達に遊んでもらうというようなことを開始しました。稲倉は減農薬栽培なのでどうしても田んぼの中の草が生えやすいということもありまして、そういった部分も子ども達にお伝えしながらやっているという状況です。事前のVTRにもありましたが、こういった形で泥んこでかけっこしたりとか、すもうをとったりということをやっています。決まりきったことでこういうふうに遊びなさいということよりも、子ども達は自分達から創造力働かせて、道具だけ用意してあげれば色々な遊びが生まれるみたいな形になっていて、自由時間を多くとるような形にしております。活動4として、焼芋FIREということをやりました。これは令和3年度やはりコロナで非常に経済的に厳しい状況がありました。観光客が訪れない時があって、どうにか予算を確保できないかということで、我々はクラウドファンディングを行いました。その時の返礼の一つに焼芋やればいいんじゃないのというアイデアが出てきてまして、それをイベント化してみようかということでやりました。このアイデアの発端というのは、野焼きしている時に保全委員の方々がおやつ代わりに芋を焼いていたという光景を見まして、それは最近焚き火とかできないし、観光客も喜ぶんじゃないかということで始めた次第です。火を見るだけでも子ども達は喜ぶので、非常に楽しくやっているのが見受けられました。ただイベントというのは用意がすごく大変だということがあるので、これはイベント形式から変えてもいいんじゃないかという意見が今出ている状態です。耕作以外の活動5として、ピオトープ&ネイチャーゲームと称してやっております。これは今無農薬の棚田における生態を把握するためとなっておりますが、当時は無農薬だったんですが、今は減農薬という形でやらせてもらっております。これはネイチャーゲームというシェアリングネイチャー協会というところが推奨している生態系とか自然を楽しく学んでいこうというカリキュラムなんですけど、私自身が地域おこし協力隊として、こちらに就任した際にその資格をとりました。その資格を活かして子ども達に自然を体験させようということで、始めた事業になります。もともとのきっかけというのが、その前に長野県の棚田が集まって中学生とかから質問を受ける機会があったんですけど、その時に「棚田にどんな生物がいますか？」という質問をいただいたんです。その時にみんなが答えられなかったという経験がありまして、そういうのはよくないなということで、実際にどういう生物が住んでいるのかというのを学びたいというのと、あとせっかくそういう貴重な環境なので子ども達にも是非そういうことを体験してもらいたいという想いが結実した形になります。実際現地での地元の小学校3年生は、地域課題学習の時間を利用して毎月1回くらい棚田に来て、年間通したカリキュラムを実施しています。令和3年から始めているので当時の3年生は今6年生になっているということです。ネイチャーゲームの中で、ノーズというゲームがあるんですが、そこに使われるヒントカードというのを毎年子ども達に作ってもらって蓄積していくという形です。これがヒントカードなん

ですけど、稲倉の棚田にいる生物を当てるという形でやっております。一応概略ですが、そういった内容になります。

【内川氏】
ありがとうございます。ここまでが皆さんも聞いたことがあったのかなと思いますけれど、非常に盛り沢山の取り組みをされていて、耕作に関するものもちろん、各種のオーナー制度、オーナー制度を非常に工夫をされていて、色々なニーズに応えられるような形をされていたし、もう一つは耕作以外の部分の様々な取り組み、活動というのも大変多様に行われているというのが稲倉の大きな特徴になるかと思います。ただ、ここで是非玉崎さんに聞きたいんですけど、どうしてこういう多様な活動が、ただでさえこの棚田地域でも人出不足で苦しんでいるのに、できるようになってきたのかというところを教えてください。

【玉崎氏】
保全委員の募集というのは毎年行わせてもらっていまして、棚田という所のメリットもあったと思うんですけど、上田市報に取り上げてもらったり、あと信濃毎日新聞で1回保全活動に協力いただけませんかという記事を載せてもらいました。その効果がとても高く、もちろん稲倉の棚田が市街地からとても近いというメリットもあるんですけども、地元の豊殿地域だけではなくて、上田市内の他に隣の東御市であったり坂城町の方からは是非棚田で手伝いをしたいという方が多く訪れまして、説明会を開く機会を設けることができました。その時にだいたい40〜50人ぐらい来たかなと思うんですけど、その内半分ぐらいが実際に残ってもらって活動を始めたということが契機になりまして、それによって先程ししおとし祭りでもご紹介したんですが、竹提灯を作ることができるようになったり、もう少し細かいロジックですとか営農ができるようになりました。

【内川氏】
色々なスキルを持った人もそういうことをきっかけにして来ていただいたということですね。

【玉崎氏】
はい、そうです。あとやっぱり棚田を守りたいという想いで来ていただく方は非常に積極的だったという部分もあります。棚田を見たことがないという方が結構多くて、そういうところから逆に外から入ってくる視点があることで、またこっちも刺激になったと感じました。

【内川氏】
そういう中で色々な取り組みに対する体制みたいなものも徐々に整えられてきたということでもいいでしょうか。

【玉崎氏】
そうですね。多岐にわたって色々アイデアを展開することができるようになってきたなというのが、ここ3、4年の状況だと感じます。

【内川氏】
色々最初からこうと決めずに、少しずつ変化しているという様子が先程のお話からみてとれていて、体制作りなんかも皆さんと相談しながら常に変化していくという感じを印象として受けました。そうした紹介が最初のところで、だいたい皆さんご存知だったところに加えて、より詳しく知れたというところがあったんじゃないかなと思いますが、これから第2部に入りまして、活動を支える取組みの実情、実態とこれからの課題という形でここが今日皆さんに分科会に来ていただいた一番の収穫になるのではないかと思います。稲倉の活動のより詳しい裏話に入っていきたいなと思っています。

まず最初に聞きたいのが、先程話がありました色々な方が外から入って来ていただくというのは大事なんだけど、ただ来ていただいているだけではなくて、関わっていただくということがテーマであったかと思うのですが、逆に関わっていただくことによって色々な軋轢が起きるんじゃないかということがありますが、そのへんをご紹介いただきたいと思います。

【玉崎氏】
そうですね。赤字で書かれてしまうと外部から来た人は優秀みたいな感じになるんですが、そういうことではなくて、例えば外からの視点でしか良さが分からないこともたくさんあると思うんですね。例えば東京に住んでいたらスカイツリーに1回も登ったことがないこともあったりとか、それは地方から都市圏という逆のバージョンもあると思うんですけど、棚田を求めて外から来る人の気持ちが分かるというのも一つメリットかなとも思いますし、棚田がいいと思ってくれる人に応えようと思った時には外からの視点というのがとても大事だなと思うんです。ただ非常に難しいのは地元の人というのは、こういうロジックがあって合理的に進むからいいんですと言われてもなかなか説得力に欠ける部分も多々あるので、やはり私自身も最初からそういうロジックで話をするというのは良くないかなと思っていて、一緒に農作業をしたりとか、自分が手伝ってあげようかなという気も作り上げていくということがあります。自分ができているかどうか分からないんですけど、そういうのは大事だなと思います。あと、外部から関わるのに自分一人では変われないので、少しずつ増やしていって多数の意見にしていこうということも大事だなと感じています。あとちょっと実験みたいなことでもよいのでやらせてくれということで、一人ですることから始めて、それを成功事例を作りながら仲間を増やしていくということも大切なことと思ってまして、最初からお願いできることを自分でやってみるということで広がってきたという部分も多々あるのかなと感じています。

【内川氏】
そのへんがなかなか教科書的にはできない難しさではあると思いますが、こういうことには意識的にも色々なことを考えながら進められてきたということかなと思います。2つ目の各種イベントの耕作以外の活動の役割という部分についても深掘りしていきたいなと思っているんですけど、これはちょっと前になってしまったんですけど、保全委員会の収支を卒業研究とかでまとめさせていただいた経緯があったので紹介しますが、左側が収入の部になっていて、先程から活動の紹介がありましたけれども、オーナーとか各種イベントとか、米の販売とかその他収入もあるんですけども、これを見るとやはりオーナーの会員のところはそれなりに占めている一方で、結構イベントなんかでも努力している部分があるけれども、収入という部分で見てもどうしても小さいかなと思えるんですけども、役割とすると人のつながりとかあると思うので、そのへんのところをどんなふう to 受けとめながらやられているのか聞きたいと思います。

【玉崎氏】
これは令和3年度の数値なので、実はオーナーさんこの時期から80組以上増えている実情があるので、かなり収入の内訳は増えていると思います。これは全体の予算の内訳なんですけど、イベント3%なんですけど、労力のグラフになるとがイベント30%ぐらいになってしまうこともあるので、やはりイベント疲れみたいなことも起きがちです。難しいのがPR効果は確実にあるんですけども、そのPR効果でオーナーさんが増えた

のがイベントのお陰だという具体的な証拠がないんですね。証拠がないことに関してすごく労力をかけるというのがとても辛くて、ただどこかしら、つながりはあると思うんですけど、そこらへんを皆で共有していきながら残すものは残す、変えるものは変えるということでやっていく必要はあるなと思っています。まだまだ私も勉強中で色々模索はしている最中だとは思っています。

【内川氏】
ここは結構重要なところではあるような気がしていて、できる地域であるならば、イベントを積極的に労力をかけてでもやろうというふうにやっていくことは正解なんだろうと思うんですけど、一方、収入がほとんどないとするちょっと違うんじゃないのという話になると思うので、そのへんの位置づけを各棚田地域でどこを残すかということが一つの鍵になるのかなと思います。どうしてもトップランナーのやるどころの稲倉を参考に、やってみようと思ってしまいうところもあるかも知れませんが、実情では結構労力はかかっているというのと、必ずしも収入につながるかどうかは発展途上だというところが裏話としてあるのかなと思います。それと2つ目の耕作活動を実際により詳しくみてみようということで、後程、農水省の多面的機能の話なんかに関わってくところなんですけれど、全国と長野県と作付面積0.5ヘクタール未満くらいのところの稲倉の各作業時間で10アールあたりで算出してみました。稲倉は結構時間かかって労力も非常にかかるという見える化ができたところなんですけれど、特に多いのが維持管理作業、ここのご苦労がどの棚田でもあると思うんですけど、このへんについても玉崎さんお考えになっているところがあると思うんですがいかがでしょうか。

【玉崎氏】
そうですね、やはりうちの棚田は水が溜まらないですね。すぐに出てしまうので、そういったものを管理していく労力だったり技術だったり、あと畦畔が非常にきついところが多くて、毎年話を聞くと死と隣り合わせだったとかの事故も多くて、そういうところが悩みだということがあります。

【内川氏】
これについてはスライドも用意したので見ながら説明いただければと思います。

【玉崎氏】
うちの棚田が一番急な所で勾配が25%ぐらいあるんですね。どうしても次の田んぼから次の田んぼに移っていく時に、遠回りするのが億劫で近道しようとするのですごく転倒の危険性があったり、それぞれの田んぼで脱穀作業とかハーベスターをしていくんですが、本当に大きい機械なので、平地だったら1人でできるんですけど、2、3人が周りにつきながら作業していく感じです。同じにやるにも本当に大変だなとつくづく感じます。

【内川氏】
農作業事故の危険と隣り合わせというところがどこの棚田でもあると思うんですけど、これも私はかつて調べた経験があるんですけど、どうしても人の不注意だと言われがちのところがあるんですけど、実際には農作業事故の起こる原因の一つは人間の操作ミス、熟練度も関わりますけれど、もう一つは当然なんですけれど機械自体の問題というのがありきますね。最後最も大事なのはそもそもの農作業環境の問題。これが急な坂とか狭い所でスリップだとか転倒だとか起きる。そうするとこの3つの条件の複合関係で起きてい

るということではいずれの3つを考えていく必要があると思っています。従って人の注意だけで避けられるようなものではない、熟練度だけでもかわせるものではないわけです。ということで、機械についても色々考えなければいけないし、当然棚田地域の人達ができることは農作業環境の安全性をどうやって高めていくかということもとても大事なことだと思います。もう一つ草刈り作業も多くて、稲倉の方も最もお金をかけているということで、そのへんについてもお話いただけますか。

【玉崎氏】刈払機での作業で事故が多いということは一般的に言われていることで、傾斜が急な所があったりとか、きれいに整備されていても石とか岩とか結構ゴロゴロしている状況もありまして、非常に足場が悪いという状況があります。2日ぐらい作業すると刈払機の刃がボロボロになるという状況でやっていることもあって、なかなかオーナーさんに刈払機で草刈り作業してもらおうということができないような状況がありまして、熟練度が必要な作業だなとつくづく感じています。

【内川氏】こういう部分も少しでもやりやすい状況をどうやって作れるのかというのも課題になってくるかと思います。かつては棚田というと、そもそも面積が小さいので畔の傾斜をゆるくしようとかそういうことを言うとか農家の人達はそんなことできないと言われていたような気がするんですけど、近年継続する、或いは安全に続けるということがとても大事になってきているのでそのへん考えていきたいなと思っています。最後に3つ目、技術継承ということで、厳しい作業はもちろん知っていただくと同時に、様々な棚田って各地各地であると思うんですけど、つなげていかないどうまくいかな技術みたいなものがあるんじゃないかと思っています、このへんも工夫されていると思うんですけど、玉崎さん外から来て初めてで分からなかったこととかもたくさんあったと思いますが、そういう視点からお話いただきたいと思います。

【玉崎氏】稲倉の棚田保全委員会は毎日来ていただくメンバーが30人くらいいて、来れる時に来ていただいて1日10人くらい集まるかなという形なんですけれど、実はそのメンバーの中で、もともと棚田で営農されていた方は実はゼロなんです。地元の方と言っても麓の緩やかな地域で農業されている方に足を運んでもらって手伝ってもらっているという状況です。令和3年くらいは維持管理しているのにどんどん収量が減っていってしまうとか、畔が崩れてしまうということが多々ありまして、そういうところも逆に皆さんまだ高齢で地元の方が人数は少なくとも維持されているという現状も多いかと思うんですけど、その先の世界としてまだ棚田でやったことがない人が始める時の農作業事故みたいなことがたつぷりあるなということもあって、そういうところも紹介できたらと思っています。

【内川氏】情報が個人個人で個々に対応していったという話もありましたよね。

【玉崎氏】そうですね、棚田自体はたくさん地主さんがいらっしゃっても飛び飛びだったりするので、まとめてどういうふうにな水が流れてきてどういうふうに満たしていくのかという知識が分からなかったりとか、非常に水持ちが悪いので、独特の方法も必要だという現状もありまして、そういう技術継承みたいなことが求められるなと感じています。

【内川氏】これまでは農家の方々が耕作をされていたのが、こういう保全委員会が一括統一的に集団的な管理ということで、まさに個々の細かい部分というのが個人でやっている場合はできたかも知れないけれど、委員会として管理するということになると、そういう意味での共有が必要になってくるということですね。

【玉崎氏】そうですね。もともとあったものが分からなくなってくることもたくさんあります。

【内川氏】それをどうやって継承していくかということも課題の一つだと思います。そういうことでいくつか事例をお話してきましたけれども、こういった課題に対して、まず玉崎さん達が取り組まれたのが、皆さんと共有化するために集団的管理を実現するためには、状況を見える化する可視化するということをしたということなので、そのへんの話をさせていただきたいんですが、この図は地区全体の価格と面積などを表していますね。

【玉崎氏】もともとはGoogleマップの資料しかなかったんですけど、私自身が建築をやっていた関係もあってCADソフトを使える関係で、だいたいなんですけれど、データで面積を出すということをしました。それによって初めて田んぼあたりどのくらいの収量があるかということが毎年具体的な数値で出てくることができました。

【内川氏】その数字が今資料に出していただいたことで捉えられるようになったということですね。

【玉崎氏】そうですね、今までは感覚でなんとなく今年は採れたな採れなかったなという話をしていたんですけど、例えば2019年は田んぼあたり260kgで、その翌年は236kg、大きくコシヒカリの面積を減らした年があって、そうすると全体収量は落ちてしまったというようなこともあったんですね。こういったことで田んぼあたりの面積を把握することによって確認することができるようになりました。だんだん2022年は最悪なんですけれど、田んぼあたり200kgをきってしまったみたいなのが危機感として共通認識を共有することができたというような経緯になります。

【内川氏】感覚としては皆さん危機感は感じていたかも知れませんが、具体的に数字を見たりとかすることで、より課題が共有できたりとか対策を考えましょうという方向に向かいやすいということにつながったということですね。

【玉崎氏】そうですね、実際棚田オーナーさんに増えてきても、お渡しするお米がなくなる危機感とかもあったりしたので、非常にこれは良かったと思っています。

【内川氏】もう一つが、そういった中で人数が限られている、増えてはきてもやはり限定的な人数とか技術力の中でどうやって場を回していくのか、そのためには一定の手当をしながら体制を作りながらという話が次の話です。まず一つ目は、水の問題、水持ちが良くない田んぼが非常に多いという話についての水の流れについてですね。

【玉崎氏】水のかけ口とそこから出たところをどうやって元に戻して水を

次の田んぼに運んでいくかということで、私の方で全部図面化しました。これは私自身が考えてやったということではなくて、たまたま稲倉の田んぼ全体の土木工事だったりをされている昔ながら耕作している方がすごく気にかけて下さって、棚田に足しげく来ていただいたことがありまして、話を聞いてみるとそこらへんのお話を汲み取らなければいけないということで、だいたい3ヶ月から半年くらいかけて一緒にマンツーマンで付き添いながら田んぼの水の入れ方とか、ここはこういうふうに流れているんだというのを自分も手探りで学びながら、それをデータ化したということです。実際このデータごとにその水のやり方を踏襲して保全員でチームを作ってそれぞれ管理しているということで、出したものです。

【内川氏】この青いラインが水の移動になっているんですけど、田んぼによってはかなり複雑なものも図面化していることで、なんとなく現場に行けば分かるのかも知れないけれども、初めての人もこうなっているんだと見れるようになったということです。

【玉崎氏】知識として継承していける状況を作ったということです。

【内川氏】これは従来の田んぼの水のかけ流し、上流の排水が下流の用水になってきているという図なんですけれど、これだとうまくいかなかったという話で、右側に変えたという話を聞いているんですけども。

【玉崎氏】全く知識がないと下の田んぼに水を入れるというのは左側の図が分かりやすいと思うんですが、ただこうすると田んぼ全体に水が流れてしまうということで崩れやすくなってしまったりとか、田んぼを経由していく段階でどんどん水が少なくなっていくという現状がありまして、それを是正するために、田んぼの脇に水路を作っていくというのを先人から学びまして、それを徹底的になくなった所は掘り起こして復活させるとか新たに作っていくとかをしていきました。他の地域とかでやられている所もたくさんあるかと思いますが、稲倉としてはそういう知識が本当に失われていたということがあります。

【内川氏】それを復活しつつ、こういう水路の崩れたりすることを防ぐことにもつながっているという感じですね。

【玉崎氏】これもいかに田んぼの中の水を動かさずに定量だけの水を田んぼごとに供給していくかということに工夫を先人に伺って、それを図式化したものになります。注水は田んぼの中に直接入れるんですが、だーっと田んぼに流れない流水系を設けてそこで必要な分だけが田んぼに入っていくというものを図式化させてもらっています。

【内川氏】常に水は入れていかなければいけない、だけれども入れっぱなしでいると中には水がどんどん回って冷たい水で満たされていたところを入口のところでそこをすぐ戻せる様な形に変えていったということですね。

【玉崎氏】そうですね、すぐ戻すことによって下へ行く水量も減りにくいということになりました。水位調整板は、こうやって作ればみたいなことで、丸パイプを半角にしてを地面に打ち込んでやるみたいなことも教わりながらやったんですが、水が落ちるから石を置いた方がそこは削れていけないなどを発見したり聞きな

がら皆で協力しながらやりました。

【内川氏】こういうの事例がもう一つありますね。

【玉崎氏】これも水位を調整する機構ということで、エルボのパイプによって水位を調整することが可能だということを教わったりしながら設置していきました。

【内川氏】こういうのをマニュアルみたいにして皆さんと共有化して管理を改善するということでやってきましたけれども、水管理自体がかなり短く省略化できたんですね。

【玉崎氏】水が抜けてしまう田んぼが非常に少なくなったのと、どういうふうに対処すればいいのかということが分かってきたということです。

【内川氏】加えてさっきすごく減ってしまったと言っていた収量がどうだったのかという2023年の数字をあげたんですけど。

【玉崎氏】2022年に200kgをきったのが、一気に田んぼあたり481kgという実績を出しました。今年は実は代掻きが失敗だったとか他の要因もあってちょっと減ってしまうかもしれないので、色々難しい部分もありますが、ただ200kgをきるというような心配はしなくてもよくなったかと思います。

【内川氏】水の管理のことはちょっとしたことと思うかも知れませんが、実はすごく大きな影響があるかも知れません。もちろん水の部分だけではなく各種努力もあるかも知れませんが、一つの成果としてこうやって見えてきたというのは大きいのかなと思います。こういった水管理者向けのマニュアル、図を入れたりとかして作られたということですね。

【玉崎氏】自分で制作して参考資料として継承していきたいなと思います。

【内川氏】技術の継承という意味で非常に重要だと思います。今水の問題を話しましたが、畔管理の話も出ていて、稲倉の例として法面にこういう足場を作られたことによって少しでもスリップとかを防いだというような努力もされているということなんです。

【玉崎氏】そうですね。ただこれは結果的に失敗だったということで、木が2024年になったら腐り始めてしまって、足をかけると腐って落ちることが起きてしまって、落ちた後の木が刈払機の刃を傷めるみたいなことも起きてしまったので、次にやるとしたら中段とかに段を設けた犬走を設置した方がいいんじゃないとかそういうことを話している最中です。

【内川氏】このへんに関してはどうするかという話もあります。ただとにかく安全に作業するためにはこういう努力をやってきたことから成果が見えてきたのかなと思います。ということで、そろそろまとめという話になってきています。少し簡単ですけど書いてみました。作業環境の改善、人材育成、色々な人に来てもらってやってもらわなければいけない、若い人達に引き継いでいかなければいけないという時に、農作業事故の話で、人と機械と作業環境の話をしましたが、こ

の作業環境を変えるだけでも相当変えられる可能性があると思いました。人を呼ぶと共にそれぞれの管理者が安全かつ効率的に作業できる方法を検討することが非常に重要な棚田を継続するための基礎的要素としてはあります。皆さんも家に暮らして古い家にお住まいだとやっぱり住みにくかったりしますね。だからその環境をちょっと直すだけでも全然暮らしは変わる。棚田というのも古いものなので変えられない部分もあるかも知れませんが、そんなこともない。稲倉の棚田を見てみても色々な工夫をされていて作業環境をちょっと改善しただけでかなり外部の人とか管理者の労力が変わる。それによって余った時間ができます。或いは先程から玉崎さんが色々な技術継承の可視化や資料化をされていますけれども、これ自体が見る人にとっては非常に大きな人材育成の素材になっているというふうに感じました。補助金交付による支援も色々なことでされていますけれども、その使い道としてどこに落ちる方がいいのかなということ、もちろん現状維持としての部分というのはそれだけで手狭になってしまう部分もあるかも知れない、或いは色々なイベントをやってみたいというところに使うことも必要なかも知れないけれども、もしかしたら今日持続に向けた整備投資みたいなもの、環境作りみたいなことに振り分けてみることをプランニングする。そういうことを棚田地域振興法等の中に位置づけていけるといいのかなというふうにも思います。イベントが決していけないと言っているわけではなくて、位置づけをやる必要があるということです。

【玉崎氏】

おっしゃる通りだと思います。

【内川氏】

この後ディスカッションで色々なご意見、うちはそんなこと言われてもこうなんだよねとか色々あると思いますが、是非そのへんは色々議論できたらと思っています。少し農政の方からも話題提供をしていただければと思います。

【西島氏】

農林水産省地域振興課の西島と申します。今日は貴重なお時間をいただきましてありがとうございます。私の方から棚田地域における多面的機能の評価ということで簡単にご説明させていただきます。私は多面的機能班というところにいますけれども、昨年度からここ稲倉の棚田で棚田の多面的機能にフォーカスして調査をさせていただきました。人口減少とか高齢化の中で最前線でやっておられる方のご苦勞を評価したいというところと、PR したいなと思っています。誰に対してかということ、一般の方に対して、特に財務省とかに PR したいなと思っています。というのは、財務省に棚田の良さを伝えているんですけども、いつも泣きながら帰ってくるんですね。財務省の方も、日本の予算をしょっておられますので本当に大変なんだとは思いますが、棚田というところは、お米の生産以外でもこんなに機能があるということを評価されるべきだと思っています。それを正確に伝えたいと思ひまして調査をしているところであります。また食料農業農村基本法も改定されまして、引き続き多面的機能の発揮、これが基本理念になっております。そういうところもありますので、棚田の多面的機能の評価、そして発信の調査を行いましたので、簡単に報告させていただきたいと思ひます。多面的機能ですが皆さん既にご存知だと思います。農業生産以外の機能ですね。例えば洪水防止機能とか河川流況安定機能とか、土砂崩壊防止機能とか保健休養機能とか地域社会を振興する機能だとか、それ以外にも色々あるのではないかとと思っています。例えば、土砂崩壊防止機能は、地下水が大きい

く上がったり下がったりすると地滑りとかが起きます。代掻きとかすることによって安定してちょっとずつ水が浸透すると地滑りを防ぎます。稲倉の棚田は地滑り危険区域に指定されておりますが、ちゃんと管理されるとそういう被害が防げる。土壌侵食防止機能、当たり前ですけど、水でラップすることによって土壌が飛んでいかない、そういう機能がございます。そして、生物多様性保全機能、水田とかビオトープなどを維持すると、生物が非常に多く生存することが調査結果でも確認されたところです。体験・教育機能としまして、棚田オーナーの方が来られることによって経済的にも効果がありますし、子ども達の教育にも非常に有効なものだと思います。小学校の校長先生にもこの委員会で話を聞かせてもらったんですけども、非常に評価していただいているところがございます。保健休養・やすらぎ機能としまして、この地域ではししおどし祭りとか焼芋 F I R E とかそういうものが盛んにされておりまして、色々な方がこちらの方に来られているということでございます。伝統文化保存機能ということで、お田植え祭とかししおどしとか色々されています。そういうことによって伝統や文化も引き継がれるというところがございます。評価額としましては、1 供給サービス、2 調整サービス、3 文化的サービスという形で、生態系サービスの概念で整理させていただいたところです。今回稲倉の棚田で算定させていただいたんですが、これを一般化できないかと考えております。そのための調査をしていますので、また形になりましたらホームページとかで報告したいなと思っています。また、同じ資料の中で私どもは PR ということと動画を作成しました。それが午後からの本会の方で流れると思います。その動画に関するアンケートをお願いしたく資料を配布しています。午後の動画を見ていただいてアンケートに答えていただければと思います。また、来年度以降になりますけれども、棚田や農業と多面的機能の動画を作りたいと思います。もしご提供いただける方はその旨ご連絡いただければと思いますので、ご協力のほどよろしくお願ひいたします。

【内川氏】

ありがとうございます。各地域の棚田も多面的機能がどれだけあるのかということをお考えになっている方もいらっしゃるかと思いますので、今後活用できたらいいんじゃないかと思いました。もうお一方、篠崎さんも来ていただいているので、先程稲倉でも色々な取り組みをされていて、そういうサポートの可能性はどうなのかというところで新たな事業を検討されていると思いますので、その辺のご説明をお願いします。

【篠崎氏】

ここ 1 年くらいの間、様々な棚田現場でご指導いただいた皆様、ありがとうございます。農作業の安全性や、保全整備の必要性について、現場の方からたくさんお声をいただいております、対応策を考えているところがございます。今日は貴重な機会をいただきましたので少し紹介したいと思います。ここに書いてあるので少し省きますけれども、過去には保全整備をするための棚田専門のハード事業があったんですが、他の整備事業との統合等もあり、現在、こういう事業がなくなっているんです。そういう状態の中で、棚田というものがどんどん世の中に認められてくるようになり、令和元年にはついに法律までできました。これも皆様方のご功績だと思います。棚田百選から時間が経過したこと、棚田地域振興法が成立したことを機に、令和 4 年、新しく「つなぐ棚田遺産」というものを認定させていただきました。まさに、棚田へ脚光が当たり始めているところですが、今年度末をもって棚田地域振興法が一旦期限を迎えること

になります。現在、棚田法の延長・改正に向けた協議が国会議員の先生方によって進んでいるところでございます。棚田法の期限を迎えるにあたって法律もリニューアルするチャンスもあるということから、この機会を逃してはいけないということで、先程内川先生の方からお話がありましたように、棚田では作業労力を軽減させるための整備が求められていますので、棚田専門の保全整備事業を復活させたいという想ひがあります。稲倉の棚田でも水が抜けるとか、傾斜が厳しいとか、狭いとか、そもそも農作業環境が良くないという状況を改善するために維持管理労力を軽減するために行う簡易な整備です。大きな公共事業はなかなか難しいですが、法面や水路等の簡易な整備ではございますが、こういった整備が実施できる事業を令和 7 年度新規で要求しているところがございます。まだ認められたわけではなく、財政当局と折衝が続いているところです。我々は必要な事業だと思っていますが、財務省からは厳しい指摘を受けており、そこが難しいところがございます。棚田地域振興法につきましては、新聞に 6 月頃に記事が 2 つほど出ておりました。これは役所が作る法律とは違ひまして、国会議員の先生方が作る議員立法というものでございますので、どのように議論が進んでいくかは分かりません。ただ、全国棚田連絡協議会の堀会長が議論の場に呼ばれ、棚田地域振興の必要性をアピールしていただきましたし、まさにこの会場のテーマになっております厳しい耕作状況が課題と認識をされたところです。人材不足は、どの棚田でも一緒ですけども、こちらも認識いただいているところです。少なくとも棚田法の期限が来たから今年度末で終わりととはならないと思ひております。この議論の経過については新聞等でご一読いただければと思います。法延長・改正に向けた議論の中で、いくつかの棚田地域振興の事例を役所から紹介する機会もありました。石部の棚田、千万町の棚田、吉延の棚田、栃又の棚田、佐賀県の中田の棚田、を取り上げました。このような各地域の棚田の素晴らしい部分を、我々が作成して先生方に説明し、アピールをさせていただいております。こういった資料の作成にあたりまして、現場の皆様から写真提供などいただきました。本当にありがとうございます。引き続き、頑張っていきたいと思ひますので、よろしくお願ひいたします。

【内川氏】

ありがとうございます。是非こういうものが進むことを、ここにいらした方々から大きな声を上げていただけたらと思ひますので、よろしくお願ひします。最後に会場の皆さんからのご質問と意見交換という時間に移っていきたくと思ひます。早速ですけど、まずは先程の話、或いは今の農水省からの色々なご紹介に関してご質問ありましたらいかがでしょうか。

【参加者】

姨捨の棚田に携わるものです。アリオという上田に大きなスーパーがありまして、そこでこういうパンフレットを拝見するんですけど、非常に稲倉の PR になっています。ただスーパーの使用料は払っているのかを聞きたいです。それと棚田には地主が多いと思ひますけれど、地主の借地料は現金ですか？あるいは、お米ですか？

【玉崎氏】

ご質問ありがとうございます。始めのご質問でアリオ上田との関係ですが、長野県の棚田パートナーシップ協定、こちらで稲倉の棚田とアリオ上田は締結をさせていただいている関係で、非常に部長さんが協力的に活動いただいているところで、無償でコーナーを設けさせていただいたりとか、パンフレットを置

かせてもらっています。2 つ目の質問なんですけど、今地元の地主さんには採れたお米をお戻しするという形で、本当に気持ちばかりなんですけど、それで土地を貸していただいているという状況でやっております。

【内川氏】

よろしいですか。今長野県ではパートナーシップ協定をおこなっておりますが、農水省さんの方でもそういう取り組みをされていますか？

【篠崎氏】

農水省が中心となってパートナーシップ協定などを行うということではないのですが、棚田に関心のある企業様が最近増えていて、農水省が認定している「つなぐ棚田遺産」オフィシャルサポーターが 45 社ほどいらっしゃいます。

【内川氏】

ありがとうございます。他にもございますでしょうか。

【参加者】

飯田のよこね田んぼです。先程集まっていたいただいた方が 30 名、声をかけて 20 名くらいということで、草刈りとかをすると思うのですが、日当とかそういうものは出しているんですか。

【玉崎氏】

一応有償ボランティアという形をお願いしているんですけど、時給という形でお支払いはさせていただいています。作業の内容によって金額は若干変わるんですけど、だいたい時給 1,000 円お支払いさせていただいています。

【参加者】

それは例えば草刈りなどは自分たちもそうなんですけど、急斜面とかもありますから、できる人は限られてくると思うんですね。一般の方にも草刈り機を出して刈っていただくとかはやっておりますか？

【玉崎氏】

草刈りに関しては特殊な事情がありますので、何チームか作られていて、エリアごとに分けて草刈りをお願いしているという状況です。ただやはり草刈りの人数は毎年減ってきているというのもありまして、もう 1 回、チームを編成し直さなければいけないなと思っています。それと、今年は上田市の隣の青木村で草刈り自体を専門にやられている団体がありまして、そこに一部の地域を外注という形で年何回かこの時期とこの時期に来てくださいということで、お願ひしたところもありました。

【内川氏】

今のお話もそうなんですけれども、もちろんそういう人が集まるのが一番いいですし、方法は色々あると思いますが、そもそも安全なところを少しでも作っていくということと合わせて合わせ技でやっていくのもいいんじゃないかと思ひます。他はありますでしょうか。

【中島 峰広氏（NPO 法人棚田ネットワーク理事）】

これからの稲倉を考える観点から質問をさせていただきます。今全国の棚田保全活動で一応食べていけるとか、つまり給料をちゃんと支払って成り立っている所は全国で 3 ヶ所あるかと思ひます。1 ヶ所は鴨川市の大山千枚田、2 つ目は今日ここに来ておられますが十日町の池谷、だいたい鴨川は予算額が年間 7,400 万円、2 番目の十日町が 4,700 万円、これがベスト 2 です。給料は鴨川がだいたい 25 万から 30 万です。それから十日町の池谷も 30 万円くらい。だから目標としてはいわゆる取り組みの事業化ということを皆さん頭におい

で、ボランティア精神もちろん大事ですけども、ちゃんとおまんまが食えるような活動をしないと継続性は生まれてこないと思います。そういう意味で稲倉の場合は1,500万円売上げ、中身は米の売上といわゆるオーナー制、米の売上は十日町には稲倉は及ばないと思いますから、これを追求してもなかなかうまくいかないと思います。私が考えるに稲倉の場合はやはり鴨川は体験で2,000万円はあります。小中高大学までの体験で1人あたり1,100円か1,200円もらっています。だから稲倉の場合もそう田んぼがあるわけではないので、少ない田んぼを活用して体験型。鴨川だっていわゆる東京からの人は2時間以上かかっていると思います。稲倉の場合も首都圏をターゲットにして、小中高の体験を。まだまだ稲倉はそのくらいの田んぼは空いていますからそういう方向を目指してやられれば、久保田さんにも20万円か30万円払えるような活動をするにはそういう方向を目指したらいいかなものでしょうか。

【玉崎氏】
令和3年度に1,500万円となっているんですが、実は棚田オーナーさんがどっと増えたので、今年度の収支だと3,000万円を越えている状況までは稲倉もいっております。お陰様でオーナー会員費が大きな母体軸となって運営させてもらっていますが、まだどうしても年間通して時給1,000円でやっていくだけでも結構いっぱいいっぱいになるので、年間受け入れの体験事業みたいなものもやってみてはどうかということも今話としては出ています。ただ体験事業をお客様として受け入れてしまうとそれに対応する人間がいるのかという問題があったりとか、あとそうなってくると農作業の方に人が足りなくなったりというトラブルにもなります。そういうところでも徐々にやれる人間を増やしていきながら受け入れ体制も増やしていくことも必要だなと感じています。

【内川氏】
色々な企画をお考えになっているということですね。ありがとうございます。各地の棚田の規模やスタッフの事情とかも様々だと思います。そういうことを加味しながら検討できるということが大事だと思います。モデルは一つではないのでいくつか整理しながら方法を出していけたらと思っています。他の各地の棚田地区でもお悩みはあると思いますが、まだあればお願いします。

【参加者】
稲倉の棚田保全委員会の者です。玉崎さんのお話の中で行政の皆様方へお願いがございまして、実は稲倉の棚田というのは平成23年から令和3年まで行われた中山間総合整備事業ということで随分道路とか水路の用水関係の工事をされました。だけど、用水に関しては水持ちが悪いとかの問題がありまして、基盤整備事業の方がまだまだ足りない状況であります。用水も色々お金がかかってくるし、円グラフを見てもらえばわかると思うのですが、お米の生産だけで営農が成り立っていないような現状であります。そこで草刈りなんかの作業も大変危険なものですから、非常に人の集まりが悪いという現状なんです。もう少し用水の管理にお金をかけてもらいたいということで、先程の棚田地域振興法が7年の3月でという話もありましたけれど、是非延長をお願いしてそういうものを取り組んでいただきたいと切にお願いしたいと思っていますのでよろしくお願いします。

【篠崎氏】
大変心強いお言葉ありがとうございます。頑張りたいと思います。まず、法律に関しては議員立法ということですので、皆様のお声や課題を届ける形で頑張っていきたいと思っています。事業

要求については、私どもの課題でございます。こういう事業の必要性を説いて認められるよう頑張ります。ありがとうございます。

【参加者】
新潟県十日町市からまいりました者です。稲倉の棚田の数々の取り組みは素晴らしいと感じた次第です。私どももそういう取り組みができればと感じているんですけど、私どもの集落33世帯あった集落が現在3世帯4名しか人口がなくて、約10町歩の棚田を百数十枚、集落に住んでいる人は1人、あとは集落出身で今は里に下りている人で合計6人で管理しています。というところで外部からの田植えや稲刈り体験もしたんですけど、農作業は忙しくて自分の棚田を管理する、水路を管理する、農道を管理するというのが忙しすぎて、そういった新たな取り組みをすると、集落の6人と家族を含めてそこまで頑張れないという声が出てきているので、稲倉の棚田の皆さんがこれだけのものをやっている中でどうやって元々の仕事の中の考え方というか、一緒になって頑張っていこうという、正直我々もう限界を越えてしまっているけれども、どうしてもこの棚田を残していきたいと思って既存の住んでいる方と外部から来られた玉崎さんもその人達との意志の疎通をとりながら、前を向いてもう少し頑張ろうよと思うところのヒントになるところがあれば教えていただきたいなと思っています。

【玉崎氏】
稲倉の棚田がある豊殿地域なんですが、集落によって気風というのがあると思うんですけど、今中心にやられている人達が豊殿にある豊里という地区の方が主なんですが、気風は非常におおらかで寛容なものがありまして、そういう所で私みたいな外部から来た人も受け入れてもらえる環境があったのかなと思っています。あまり難しく考えないで、なんとかやれるんじゃないかと思う最初の気風というのもしかしたら大事なんじゃないかと思ひまして、その中で外から興味を持った人間を受け入れられる土台を常に作っておくというのが大事なのかな、とちょっと感じた次第です。

【内川氏】
玉崎さんは地域起こし協力隊という形で稲倉の棚田の方にいらして、きっかけは一応オーナーというスタートではあるんですけども、そういう外部の方でも専業で関われる方がいたというのが稲倉の場合非常に大きなここまで発展したところの状況としてあったんだと思います。各地のそういう制度であるとかそういう方の利用も一つご検討いただくのもある意味必要だと思います。

【参加者】
地域起こし協力隊で地域に入っていてやっているんですけど、それでもやっぱり人手が足りず、外の力を得たいのですけれども、地元で世話をしながら中心になって動いてくれる人を入れるということで、これからそういう方を入れるためには行政にもお願いいなければいけないかなと考えています。

【内川氏】
おそらく共通の課題をお持ちの地区もたくさんあると思いますので、今日の色々な場でディスカッションいただければと思いますし、そういうことが制度も含めて充実化していくということがこういう場で次につなげていくために大事な話題だと思いますので、質問いただいたことに感謝したいと思います。ありがとうございます。

【参加者】
私は玉崎さんの友達で東御市でワイン産業に関わっている者な

んですが、内川先生の授業の最後の方で「求められる作業環境の改善と人材育成」のところに「外部から人を呼ぶと共に」とさらっと書いているんですが、ここは最初のステップとしてすごい一番難しいのかなと思ってまして、稲倉の棚田ですとオーナー制だったりイベントをやって知ってもらおう。それをきっかけに関わってもらって、いかに継続して応援してもらうというのが大事だと思うんですけど、どういう活動が必要でどういう取り組みをすべきなのかということを内川先生や行政の方にご意見を聞きたいなと思います。

【西島氏】
昨年度と今年度でやった業務の中で動画を作ったんですけど、上田市の方50名くらいの方に見ていただいたら2人くらい協力したいという方がおられました。一つの手法としては動画配信で協力していただける方を呼び込めるかなということでYouTubeとかに流すのも一つの手かなと思っています。

【内川氏】
確におっしゃる通りここが一番難しいところでもあり、先程うかがった中でも玉崎さんのご苦勞があったと取り上げさせていただいたところでもあるところなんです。確になかなか関心がないという意味では、関心を持っていただくような取り組みは大事だと思います。その関心が稲倉の場合、一つ素晴らしいところは「カカワレルタナダ」というのをキーワードにされています。何か関わってもらおうということからスタートすることが大きいかなと思います。バーチャルな文章や映像も大事なんですが、実際に触れてみたらこういう人がいるのか、棚田という存在そのものももちろんですし、そこにいる方々との触れ合いとか、様々な魅力を感じるということをどういうふうに出していけるのか。これは答えはないのかと思いますが、ここが各地各地できっとあるんだろうなと思います。そういうこともここで話題にできることも大事だと思いますので、今後もそういうことができたらいんじゃないかというふうに思います。確かに一番大事なところですよ。今人がいないということがみんなが困っている。もちろん人がいない中でやれる方法として関係を作ってつなげるようにしようとするのが大事ですし、そうは言っても人をどう呼べるか。両方とも今後の課題だと思います。ここで時間になりました。最後までご静聴いただきましてありがとうございます。



〈2024（R6）年度
第29回 全国棚田（千枚田）サミット in 上田 第1分科会〉

棚田活用の取り組み方とねらい
～棚田保全に必要なこととは～

コーディネータ：内川 義行（信州大学農学部）
話題提供者：玉崎 修平（稲倉の棚田保全委員会 地域おこし協力隊）
西島太加志（農林水産省農村振興局農村政策部地域振興課）
横崎 剛（同上）

目 次

1. 稲倉の棚田の歩みと特徴

2. 活動を支える取り組みの実態と課題

3. 課題への対処
(1) 現状を「可視化（見える化）」する
(2) 少数でも対応できる基盤整備」と「体制」づくり

4. 棚田の「多面的機能」を評価する
（農水省から）

5. 会場からの質問と意見交換

1. 稲倉の棚田の歩みと特徴

～稲倉の棚田の紹介～

稲倉の棚田
その歴史と営み

稲倉の棚田は、江戸時代に開田されたものと言われるが、畦畔に数箇所ある6～7世紀頃の横穴式古墳が、太古からこの地に人々の営みがあったことを示しており、その歴史の中で棚田が築かれたと考えられる。

川を挟んで両側に水田が広がる形状は全国的に珍しく、谷間に寄り添うよう穏やかに通る姿は、自然を尊重し共生してきた日本の心象風景である。



6～7世紀頃の横穴式古墳

保全活動について

平成11年「日本の棚田百選」選定を契機に地元有志が集い、保全活動を開始。

地域住民だけでは困難な状況から平成18年に棚田オーナー制度を導入、学校課外学習体験などを進める。

さらに貴重な農業資産を守る活動を全国に先駆け取組み始める。

様々な団体と連携し、農閑期に田んぼ内でキャンプを楽しむ棚田CAMP、岡崎通達との協力体制による酒米オーナー制度など、さらなる顧客満足度の向上を目標に活動する。



保全委員の皆さん



稲田オーナー制度は実際に合わせて少しずつ内容を見直している。

現在、棚田米オーナーおよび酒米オーナーの受入れを行うが、参加者のご希望と協力的な運営体制を両立しながら、オーナー数の大幅な増加を実現している。

【耕作関連】
棚田オーナー制度
～棚田米・酒米～

棚田オーナーの推移

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
棚田米オーナー	13	15	18	27	35	35	31	35	24	24	42	50	47	37	59	66	81	95	117
酒米オーナー														20	15	21	34	52	80
オーナー合計	13	15	18	27	35	35	31	35	24	24	42	50	47	57	74	100	135	175	197

※酒米オーナーは抽選による抽籤制あり



ブランディング強化↓
3つのプラン増加↓
棚田米オーナー増加↓

棚田米オーナー
3つのプラン

オーナーは「グループで自分達の田んぼを持ちたい」「小さい子供に少し体験させたい」など多岐にわたり、意向に合わせて3つのプランを用意する。

【棚田エリアオーナー】
お茶の田んぼを割り当て、収穫米もその田んぼで育てられたお米を提供します。仲間内で取れたお米をいただける喜びと一掃感がある。

【棚田サポーター】
作業田畑が一瞬になった有明で働き、その日の暮れに食べたお米は田んぼで作業体験します。互いに交流が図れる。

【棚田ファン】
少しだけ作業体験してみたい、気持ちだけ働きたい方に3合パック×3割のお米と自由参加の作業体験をご案内する。



都合の良い田んぼへの案内と、ベテランオーナーが初心者をサポートする体制も構築。

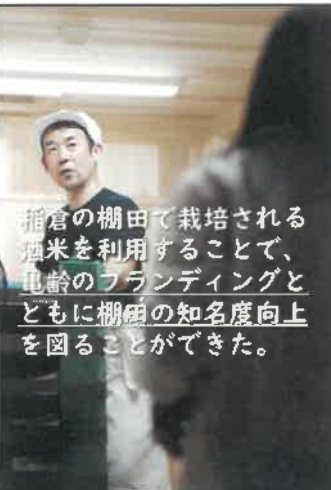
多様なプランは、オーナー数の増加につながり、保全活動の貴重な資金源となっている。

酒米オーナー
ブランディングと保全

稲倉の棚田で農作業体験し収穫された酒米を上田市柳町にある岡崎通達の協力により醸された、搾りたて無濾過生原酒「亀鮒」をいただける制度である。

【酒米オーナーの特典】

- 抽選で収穫した酒米を専用瓶に瓶詰め体験できる。
- 抽選で全国的に大人気の岡崎通達林氏と交流できる。
- 「信州亀鮒 稲倉の棚田産ひとごち純米吟醸」を一般販売前にいただける。



稲倉の棚田で栽培される酒米を利用することで、亀鮒のブランディングとともに棚田の知名度向上を図ることができた。



田植え体験



稲刈り体験



稲刈り体験



酒米オーナー瓶詰め体験



酒米オーナー瓶詰め体験



酒米オーナー瓶詰め体験



【耕作以外の活動①】
ししおどし祭り

お盆の時期、人々が松明を持ちライトアップされた道端を練り歩く光景は神秘的。「しし神よ、御りませ、御の神よ、守りませ」との掛け声とともに五穀豊穡と秋の収穫を願う祭りとして令和2年度より開催する。

眺める“ほたる火”から
カカワル“ししおどし”へ

ししおどし祭りは香川県小豆島の中山千枚田で行われる害虫駆除祈願の「虫送り」を参考に協力いただき、稲倉の棚田が新たな解釈を提示する形で開始。

以前までは保全委員が設置したペットボトルのほたる火を観光客が眺めに訪れる行事だったが、自ら松明をもって練り歩く参加型の祭りとした。



ほたる火の様子

ししおどし祭りでの松明練り歩き

令和4年度
竹提灯作りの体験

小さいお子さんにも安心して練り歩きの出来るよう、松明に替わる竹提灯（ちょうちん）を追加。点火式までの間に竹提灯を作る体験コーナーを設け好評だった。



ドリルを使って製作中



ししおどし祭りの様子



【耕作以外の活動②】
棚田CAMP
農閑期の新たな景色

棚田の中でテントを張りキャンプを楽しむイベント。農閑期における棚田の有効活用と農業生産性とは異なる新しい体験事業として開始、今では全国の多くの棚田地域に広まる。



棚田CAMPの様子

棚田CAMPから
新たなつながりへ

棚田CAMPの開催により、棚田に訪れるきっかけが多様化しアウトドア業界など多方面から取材される事になった。

また参加者は30～40代と従来の棚田愛好者に比べ年齢層が若く、新たな人材として棚田オーナーへの申込み、お田植祭でのコンサート協力、法政大学・長野大学・信州大学、信州ハム株式会社との関係性構築などにつながった。



棚田に設置された最新テント

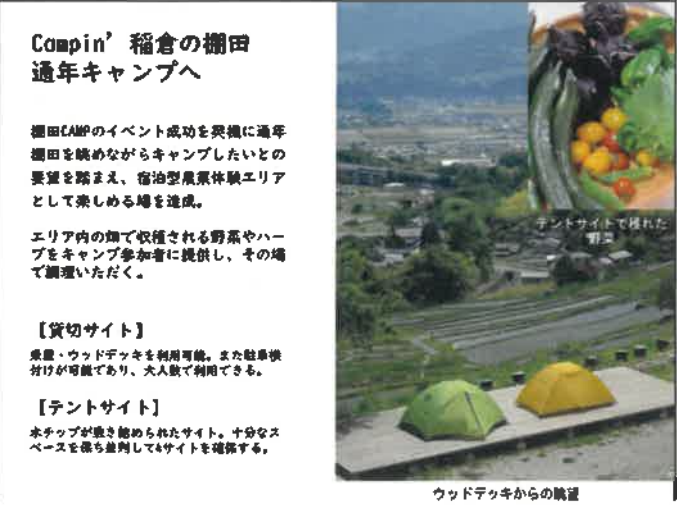
Campin' 稲倉の棚田
通年キャンプへ

棚田CAMPのイベント成功を契機に通年棚田を眺めながらキャンプしたいとの要望を踏まえ、宿泊型農業体験エリアとして楽しめる場を造成。

エリア内の畑で収穫される野菜やハーブをキャンプ参加者に提供し、その場で調理いただく。

【貸切サイト】
乗車・ウッドデッキを利用可能。また駐車場が可視であり、大人気で利用できる。

【テントサイト】
水テップが張り詰められたサイト。十分なスペースを確保し4サイトを確保する。



ウッドデッキからの眺望



Campin' 稲倉の棚田の様子

【耕作以外の活動③】
泥んこASOBI
人間代掻き

5月より開始する代掻きは、水を張った田んぼの土を掻き混ぜ止水と土を平滑にする作業である。

稲倉の棚田では、田んぼ内の雑草を手作業で取る作業が非常に大変であり、代掻きは雑草が生えてくるのを抑制する効果として重要。

子供たちに泥んこ遊びをしてもらいながら、一緒に代掻き効果もお願いする体験事業。





泥んこかけっこ

ロープすもう

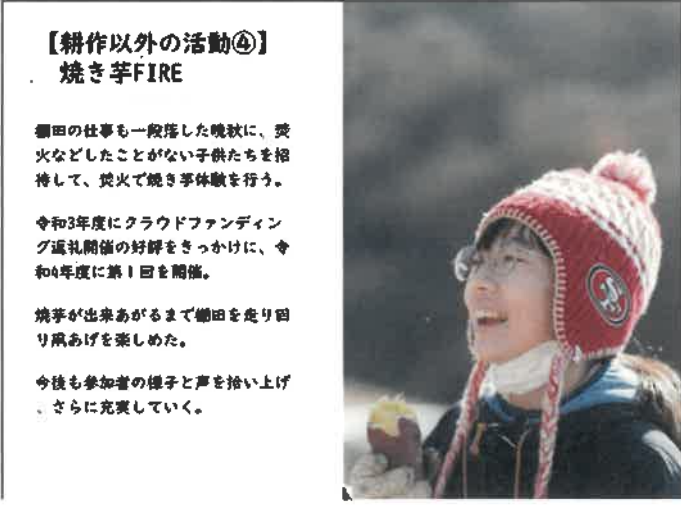
【耕作以外の活動④】
焼き芋FIRE

棚田の仕事も一段落した晩秋に、焚火などしたことがない子供たちを招待して、焚火で焼き芋体験を行う。

令和3年度にクラウドファンディング返礼開催の好評をきっかけに、令和4年度に第1回を開催。

焼き芋が出来あがるまで棚田を走り回り風あげを楽しめた。

今後も参加者の様子と声を拾い上げ、さらに充実していく。





大人も一緒に楽しむ様子

子どもたちの笑顔

【耕作以外の活動⑤】
ビオトープ&
ネイチャーゲーム

熊鷹農の棚田における生態を把握するため長野大学の協力のもとに環境調査を始める。また、棚田内に造成したビオトープ池を中心に体験授業を開始した。



ビオトープ&
ネイチャーゲーム

地元豊原小学校3年生が、理科の授業や地域課外学習に合わせて棚田に訪問、ネイチャーゲームで遊びながら年間通して学ぶ授業を開催。「ヒントカード」を棚田で観察した生物を題材に製作し、各年度の3年生の成果が徐々に蓄積されている。

【ネイチャーゲーム】
「楽しさは学ぶ力であること」を念頭に自然と触れ合い、そこで実体験の考え方に気づき、つながることのよさを痛感してもらった活動として公益社団法人 日本シェアリングネイチャー協会が推進する。



初めての水生昆虫を観る子供



なぜ、稲倉の棚田では、これらができるようになったのか？
活動の変化（人材の量・質の変化）

上田市報、信濃毎日新聞で農作業手伝い募集

⇒ 養蚕地域以外から人が集まる（現在約60%が外部から）

⇒ 棚田に思いのある人材が集まることで「能動的」人質が増加

⇒ （はじめは）農作業手伝いで集まったが、多様なスキルが集積

⇒ できることが格段に増加

⇒ 「体制づくり」へ

2. 活動を支える取組みの「実態」と「課題」

～稲倉の棚田のウラバナシ～

(1)「外部から関わる者の在り方」
（人材の参画、確保、育成）

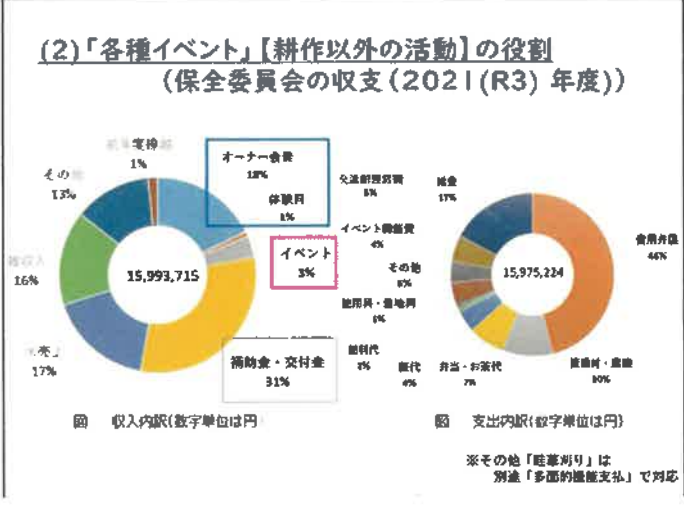
外部から関わる人は、地域変革を成しうる
← 培ってきた技術や知識を地域のために活かす事が求められる

But・・・

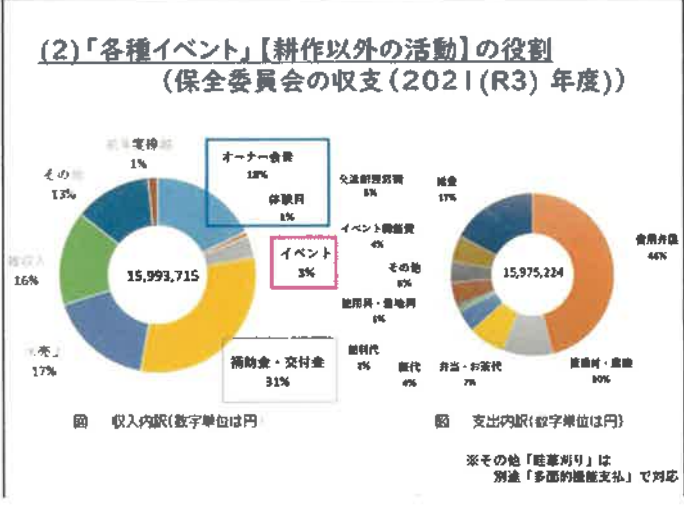
- ・大前提として、地域から理解を得る必要
- ・地域内で営んできた人々に「合理性」や「理屈」は通じにくい
⇒ 「〇〇さん」が言うならやるか！で動く（人柄で判断）
- ・外部から関わる仲間を一人ずつ増やし、多数の意見に
- ・小さく実績を示し、協力体制を築いて行く覚悟が必要

(2)「各種イベント」「耕作以外の活動」の役割
（保全委員会の収支（2021（R3）年度））

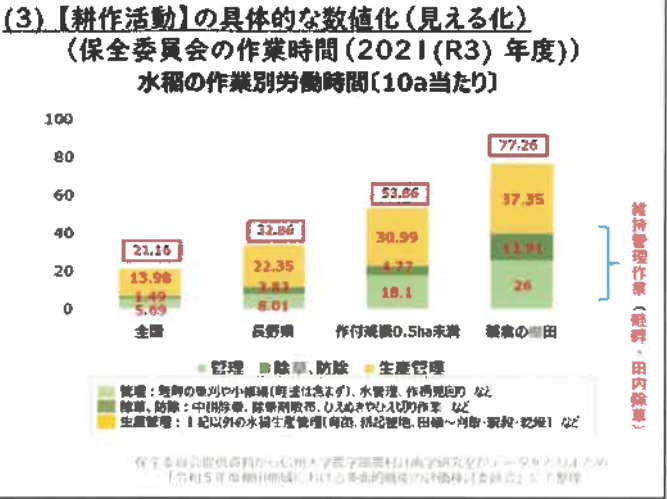
収入内訳(数字単位は円)



支出内訳(数字単位は円)



※その他「経費列挙」は別途「多面的機能支払」で対応



(4) 【耕作活動】キビしい作業と、技術継承の難しさ
①農作業機械

- ・区画と区画の移動等では、熟練と細心の注意が求められる
- ・機械の転倒、転落、狭い道での車両や人との接触
- ・クラッチ操作等の誤りによる急発進など...

⇒ 常に危険を伴う
農作業機械事故は「人(機械操作)」「機械性能」
そして「農作業環境(急な坂や狭い進入路など)」が
複合して発生する!

(4) 【耕作活動】キビしい作業と、技術継承の難しさ
②草刈り作業(維持管理)

- ・暑い夏季に繰り返される作業は、早朝の涼しい時間に行う
⇒ 朝露、急傾斜面は、スリッパや転倒しやすい....

⇒ 常に危険を伴う
農作業機械事故は「人(機械操作)」「機械性能」
そして「農作業環境(急で足場のない法面)」が
複合して発生する!

(4) 【耕作活動】キビしい作業と、技術継承の難しさ
③技術継承の課題

- ・一元化されない「情報」
各人が管理してきた棚田。
全体で統一的管理を行うには管理方法の整理が必要
- ・棚田特有の「技術」
当然、平地の水田とは異なると共に、同じ地域内でも
場所によって、作業方法を変える必要

⇒ 抜本的対処と同時に
技術の継承が求められる

3. 課題への対処

(1) 現状を「可視化(見える化)」する



(2)作付けから収量の推移を数値化⇒ 対応方法も
収量推移の実態

棚田米収量推移

年度	コシヒカリ				ひとごころ			
	作	収量 (kg)	面積 (a)	収量/ha	作	収量 (kg)	面積 (a)	収量/ha
2016 年	294	8820	190	464	30	900		30000
2017 年	277	8310	190	437			80	30000
2018 年	178	5340	190	281	384	3120	80	3900
2019 年	96	2880	110	262	75	2250	150	150
2020 年	63	1890	80	236	103	3090	150	206
2021 年	94	2820	116	243	112	3360	148	227
2022 年	97	2910	150	194	116	3480	172	202

※ 収量/haは、100aあたり100kgを基準として算出している。

3. 課題への対処

(2) 少数でも対応できる
「基盤整備」と「体制」づくり



(1) 水管理作業を抜本的に考え、整備する!
① 掛口の改修

稲倉の田は水が抜けやすいので、常時注水。
そのため、生育初期の低水温、除草剤が流れて効きが悪いなどの課題に悩まされてきた。
← そこで「流水受け」と「水位調整板」を設置
余剰水は、できるだけ注水せずに下流へ!

直径30cmほどのパイプを半割にして製作。
時間経過とともに満水しやすくなるので、水漏れしないように泥を盛り付け。
該当箇所の手拭シートは必ず切る。(泥に落ちると漏水原因となる)

水位調整板から落としたり側に水が落ちる箇所には石を置き、流水で溶けないように。

エルボ鉋材タイプ
溝しほに直径30〜40cmほどの立(たて)例(ます)を設置し、脇から直径10cmのVU管を突き出した先にエルボ鉋材を取り付け、それをひねることで水位調整を行う。(エルボ鉋材を立てた状態が最大水位)

立例内部に草や土が溜まるので取り除くやすい

※ これらの改善整備で、①水管理時間の大幅節約
②同時に収量も大幅アップ!

2023 年度 収量の成果

棚田米収量推移

年度	コシヒカリ				ひとごころ			
	作	収量 (kg)	面積 (a)	収量/ha	作	収量 (kg)	面積 (a)	収量/ha
2016 年	294	8820	190	464	30	900		30000
2017 年	277	8310	190	437			80	30000
2018 年	178	5340	190	281	384	3120	80	3900
2019 年	96	2880	110	262	75	2250	150	150
2020 年	63	1890	80	236	103	3090	150	206
2021 年	94	2820	116	243	112	3360	148	227
2022 年	97	2910	150	194	116	3480	172	202
2023 年	208	6240	128	488	233	6990	166	414

※ 収量/haは、100aあたり100kgを基準として算出している。

管理者向けの「水管理マニュアル」まで作成!

水管理作業説明資料 2024

【明解! 水管理】
稲倉の田は水が抜けやすいので、常時注水。
そのため、生育初期の低水温、除草剤が流れて効きが悪いなどの課題に悩まされてきた。
← そこで「流水受け」と「水位調整板」を設置
余剰水は、できるだけ注水せずに下流へ!

【問題の現状】
稲倉の田は水が抜けやすいので、常時注水。
そのため、生育初期の低水温、除草剤が流れて効きが悪いなどの課題に悩まされてきた。
← そこで「流水受け」と「水位調整板」を設置
余剰水は、できるだけ注水せずに下流へ!

【これからの対策】
稲倉の田は水が抜けやすいので、常時注水。
そのため、生育初期の低水温、除草剤が流れて効きが悪いなどの課題に悩まされてきた。
← そこで「流水受け」と「水位調整板」を設置
余剰水は、できるだけ注水せずに下流へ!

(1) 水管理作業を抜本的に考え、整備する!
② その他(法面小段の設置による草刈り足場確保)

2017年に陥没法面に丸太材で小段を設置
<https://www.nagano-nouchimizu.net/case/4153.html>

求められる作業環境の改善と人材育成

外部から人を呼ぶと共に、それらの耕作・管理者が
安全かつ効率的に作業できる方法の検討が急務

↓

①作業環境の改善(水利等) ⇄ ②技術継承のための可視化、資料(人材育成)

補助金・交付金による支援
(現状維持、イベント等のみでなく「持続」に向けた整備投資の必要性)
⇒棚田振興計画等も利用して(イベント等の幅置には気を付けて!)

テーマ： 棚田と教育機関との連携

～入り口としての教育機関とその広がり～

【満尾氏】

今回の分科会では答えを出していけるものではなくて、話題提供いただいて会場の皆様と一緒に意見交換をしながら、それぞれの立場で棚田の未来の新しい扉を見つけることができればいいなと考えておりますので、是非様々なご意見をいただければと考えております。私も今日の発表会を楽しみにしております。色々な情報を得られるというところで、ちょっと長い時間になりますけれどもよろしくお願いします。ではさっそく、稲倉の棚田保全委員会さんの方から話題提供をいただこうと思っています。よろしくお願いします。

【稲倉の棚田保全委員会 自然探究会】

皆さんこんにちは。今日は遠い所からお越しいただきまして誠にありがとうございます。私は稲倉の棚田の保全委員の自然探究会としてやっています渡辺洋美と申します。よろしくお願いします。それでは本日棚田サミット稲倉自然探究会としての発表をします。まず、「色んな良いタイミングが重なって様々な人とカカワッテ繋がって未来へとつなぐ想い、心を一つに棚田を守る」ということでこれからトピック1から3を話していこうと思います。まず稲倉の棚田自然探究会の成り立ちです。保全委員として稲倉の棚田の生物や植物の図鑑を作りたいということで、私達自然探究会が集まりまして今生物や植物のことを小学校を交えて色々学習しています。地域おこし協力隊という方も今稲倉の棚田に2名いらっしゃいますが、棚田に来る子ども達に生物などの質問にちゃんと答えたい、棚田にビオトープを作りたいという気持ちがあり、大学の先生にビオトープを作るにあたり日大の先生に相談したところ、コロナ禍で多くの人が来づらくなってしまう。それで、ちょうど長野大学に着任したばかりの満尾教授をご紹介いただき、稲倉棚田と関わってもらうということになりました。ちょうど同じタイミングで地元の豊殿小学校の当時3年生を受け持っていた担任の先生より、理科の授業の一環で生物の学習をしたいという問い合わせがあり、ビオトープも完成したので一緒に授業を棚田で行うようになりました。長野大学の学生さんにもご協力していただいて豊殿小3年生の授業に長野大学の学生さん達にも関わっていただくようになりました。子ども達からの質問に答えてもらったり、一緒に生物観察したり、遊んだりしました。こちらは豊殿地域のまちづくり協議会の振興部会というものがあまして、こちら子ども達の体験授業ということで始まりました。探究会の現状、取り組みについてです。豊殿小学校3年生の総合学習も月1回程度実施しています。そして長野大学の皆さんにも可能な限り参加していただいております。稲倉の棚田にあるビオトープにて生物や植物の学習をしていただいております。ヒントカードを作成しております、そちらは会場を出て左手に掲示してありますので、もしよろしければ帰りに目を通していただきたいと思います。ヒントカードの作成も今年で4年目になりますが、カード監修は満尾先生にお願いしております。棚田があって学べること、体験できること、考えさせられること、教室を出て学べること、これが小学生だけではなく私達大人も良いメリットが

コーディネーター

満尾 世志人 氏

長野大学 環境ツーリズム学部 教授

話題提供者

松下 重雄 氏

長野大学 環境ツーリズム学部 教授

千原 厚 氏

長野県上田市立豊殿小学校 教頭

稲倉の棚田保全委員会 自然探究会

満尾研究室 ゼミ生

あると思っています。ネイチャーゲームリーダーというのがありまして、その養成講座の実施もありました。探究会、長野大学の学生さん含めた数名で養成講座を修了していて、こちらも今生物学習に役立てるようにしています。最後、想いを未来につなぐということで、豊殿小学校と長野大学のつながりをこれからも大事にしていきたいなと思っています。ビオトープは稲倉の棚田に3ヶ所ありまして、そちらの整備もしていきたいなと考えております。稲倉の棚田のオリジナル図鑑作成、ヒントカードを活用しながらいつかは作成していきたいと思っています。豊殿小学校や長野大学とのつながりを継続しながらビオトープの整備や観察会など子ども達の学びの場の受け皿として棚田の自然を保全していくために私達にできること、自然との関わりをより多くの人を巻き込んで考え、学び、実践できたらと考えています。また、子ども達の心に棚田での時間を大人になっても忘れず、自分達の地域の財産である棚田、生物、植物を大切に自然を後世に残していってもらえたらいいなと思います。これで私の発表は終わりです。ありがとうございます。

【満尾氏】

それでは続きまして私の方からの報告です。私は生き物を対象にした研究をしてまいりました。生物多様性、生き物が豊かにとそんなことをテーマにやっています。ちょっとその視点から見た時に大学という研究機関の視点において棚田をめぐる環境がどういうふうに映っているのかというのが重要ですので共有させていただければと思います。まず生物多様性ということが言われます。今ご覧いただいているこれはいわゆる地球環境問題の様々な問題、オゾン層だとかオゾンホールとかセンセーショナルに報じられてすごく印象に残っていますが、賛否あるんですけど、統一的な基準で人類へのリスクの大きさを表したものです。目立つものが2つほどあるんですが、その1つが生物多様性の消失は最も深刻なものです。近年気候変動の問題を目にしない日はないくらい今年は非常に暑くて今現在10月でも信州の気温ではないという日が続いているんですけども、そのリスクも低いわけではないのですが、それに比べてもこの生物多様性の問題というのはいかに重要であるかということこの図は端的に示しています。この図はSDGsを作るきっかけとなった研究になっているんですけど、例えば食料生産の大部分、野生の動物に花粉の媒介ですとか頼っている状態です。また一方では我々が日々使っている医薬品の開発も大部分を自然資源、タンパク質であるとかあいつたものから開発されています。そういったことから生物多様性の消失というのは非常に人類にとっても危機的な状況だと評価されています。その生物多様性なんですが、棚田は非常に生物多様性が高い環境だというふうに評価されています。その生物多様性が高い環境であるからこそ、私の方の学生さんと一緒に現場に出て行って研究の材料とさせていただこうというふうに考えて取り組んでいるところです。生物多様性が非常に高いところでありますので、日本の生物多様性の国家戦略においても水田を中心とした里山で

ですね。それが非常に重要な環境だということが明記されています。私は淡水魚を対象に研究することが多い、水田ですとか圃場とかを大切にしています。水田とかの水辺環境について見ていただきたい資料がございます。これは右肩下がりのグラフになっています。これは1970年をベースとして生き物の量がどのように推移しているかを示しています。地球全体を生物学的に言うと1970年ベースで2012年には6割も減少しています。あと3つ線があるんですが、それぞれ海と陸と淡水、水辺を示しています。その中でも淡水は圧倒的減少幅が大きい状態です。ベテランの方にお話を伺うと昔は川が黒くなるくらい魚がいた、川に手を突っ込むと魚の方からぶつかって来たというお話を伺うことがあって、大げさだと思っていたんですが、こういうデータを見るとあながちそうでもない。1970年に10匹いた魚が今は2匹しかいない、そういった想定になりますので妥当な状態だと思います。淡水魚は絶滅危惧種、近い将来になくなってしまふかもしれないです。これがどの程度なのかを見ていただきたいと思います。対象種は400種ほどあります。絶滅危惧種はめずらしい生き物という印象が大きいと思うんですけど、実は2007年時点で144種もあります。更新されているんですけど、現状は生息種の42%が既に絶滅、もしくは近い将来絶滅する状態にあるというふうに評価されています。一番下のところでは実に50%を越えてしまうんですね。つまり我々が川や池に行ったら淡水魚を捕まえるのにも12種類捕まえることができれば、その内の1種類は近い将来絶滅してしまう生き物である可能性が高い。単純に言えばそのような状況になってしまっています。2007年以降ランクアップして数字に現れていないリスクが上昇というところも複数見受けられます。なぜそういう状況にあるのかを見ていきます。まず、日本の生物を支えてきた里山や田んぼなんですけれど、そこが残ってきたのはほ場整備、基盤整備と言われる地域もあるわけですが、それがあげられます。田んぼを効率的に作り替える。大きくしたりコンクリートで固めたりという作業になります。このほ場整備が日本の淡水魚などの生物多様性を著しく脅かしたというふうに考えられています。日本の生物を支えてきた田んぼですので、そこを大きくコンクリートで固めていくという作業は、残念ながら生き物にとってはやさしくないものだと言えます。ほ場整備と言うと僕は生き物側の人なんで、ほ場整備なんてやめてしまえという意見だと思われることがあるんですけど、僕はそうは思っていないくて、むしろほ場整備があるからこそ田んぼが維持できている。農地、農業から考えればやっぱりかかせないものだというふうに考えています。全然悪いものとは思っていません。棚田に視点を移していこうと思うんですけども、棚田は近代的なほ場整備とはなじまない。そもそもそういったものができないのが地形的な状況ですので、伝統的な古くからあるスタイルの田んぼが多く残っている環境ではないかと思います。やはり棚田は生き物が豊富な環境だと一般的に言うことができます。これは稲倉の棚田の写真なんですけれど、コンクリートで固めようとは思わないですけども、自然な状態が残っていると考えています。棚田の特徴で私が研究してきたものでご紹介したいんですが、平地と棚田、傾斜地にある棚田は何か違うのかということですけども、今言ったほ場整備、構造上の違いもあるかもしれませんが、実はそれ以外にも特徴があるということが少しずつ見えてきます。ドジョウの生息量を平地の田んぼと山間の棚田の田んぼと比較したものになります。月ごとに4月からやってきているんですけど、いずれの時期においても棚田の方が生息量が多い。ドジョウがたくさん

いるということが分かってきました。もうちょっと調べていくと、棚田の方が重さを山の田んぼと平地の田んぼで比べています。こちらは夏と秋で比較を行ったんですけど、特に秋口にかけてドジョウの長さを見るとやはり山間の方が長くて重いということが分かってきました。山間の田んぼの方が餌をたくさん取ることができて成長率が高いということが分かりました。これは意外で当初の私の予測と逆でした。平地の田んぼの方が水温は高いし、プランクトン類が豊富だと考えますので、逆なのではないかと思っていたんですが、実は山間の田んぼの方が大きいということが分かりました。平地と棚田を同一視することはできないということが最近思っているところです。一方で佐渡島の棚田では点々と耕作されていない田んぼがございます。これはどの棚田でも抱えている問題じゃないかと思いますが、耕作が追いつかない。耕作を放棄されている問題があります。棚田、私達社会の問題、ほ場整備もそうだと思うんですけど、色々と姿を変えてきつつある環境が棚田と考えます。私はもともと生物の安全というところをテーマとして研究に携わってききましたので、そういった観点から学生さんを連れて行って実際に現場を見て学ぼうというふうに考えています。ただやっぱりそこまで考えられていなかったんですね。生物多様性に関する研究を行って、棚田に行けばどういうふうに楽に生物多様性を棚田で維持できるのかとか、ビオトープをどうしたら簡単に作られて簡単に維持できるかを研究して提供できたらいいなと考えていたんですが、やはり現場に来て学生さんが活動するのを見ていくと、そもそも田んぼだし食料を作る場所なわけで、学生さんも含めてお米を食べない人はなかなかいないと思うんですけど、そのお米が作られている場所を直接見てもらうというのは、やはりすごく大きな、お米作る過程がそこにある、そこに生き物がいるということを見てもらえるということに気づきました。また、もう一つ、この棚田サミットが行われているということ、保全委員の方々が活動されていることがまさにそうだと思います。棚田は文化的価値が大きくて、それに寄り添って様々な人が集まってきている場所なんだということも学生達が入ってもらうことで見えてきたのではないかと思います。生き物が好きで生き物を守りたいという学生さんも多いと思いますが、実はその背景がある。そういったものが反映して生き物がいたりいなかったりするんだということ、まさに生物多様性の向こう側にある人との様々な関わり、耕作をやめてしまうというのも人との関わりの一部だと思いますが、こういったものが見えてくるのが棚田なのではないかと思います。私の視点からということになりますけれども、こういったものを全て兼ね備えているのが棚田の教育機関から見ても一つの大きな魅力の強みだというふうに感じています。私はもちろん田んぼだけではなく、川とかに行ったら研究することもできるんですけども、やっぱり棚田でないと学生さんに伝えられないものがあるということを実感しています。今日はこの後実際学生さんが稲倉の棚田で活動して、その結果を報告するものを用意してもらっています。学生さんが見ていることとかを皆さんに聞いていただければと思います。

【ゼミ生】

皆さんこんにちは。環境ツーリズム学部です。今回は私達が2年生の時に行った活動の成果について報告させていただきます。まず背景についてなんですけれども、大規模開発や水資源の濫用によって淡水生態系そのものが消失しています。

それに伴って淡水魚を始めとする生物の減少が発生しており、日本の淡水生態系が危機に陥っています。そのため淡水域に生息している生物の保全が重要視されています。そんな淡水域のため近年注目を集めているのが棚田です。棚田は日本の中山間地域に存在しており、食料生産の体験型学習、観光支援といった文化的価値と、多くの生物の棲息地となる環境的価値があります。その棚田ですが、希少な生物が数多く発見されることが多いです。棚田には環境省、長野県共に準絶滅危惧に指定されているケンゲンゴロウや日本で唯一であるアカハライモリなどが確認されています。このように多くの生物の棲息地となっている棚田ですが、棚田の環境と実際に生息する生物の生息空間との関連性を示した研究はほとんどありません。そのため棚田を含む二次的自然での生息の生息空間を私達は研究し、把握することによって棚田での生態系保全や棚田整備において意義深い指針を提供できると考えております。そこで棚田における生物と生息環境との関連性を探るべく生物の調査と環境の分析を行いました。また、棚田は人間が管理を行うことに成り立っている二次的自然と呼ばれるもので、その区域は管理や運営の方法によって生態系が大きく変化する可能性があります。そのため、管理する側の意識と管理形態によって作り出された棚田の環境を把握することで棚田保全において意義深い指針の提供に寄与すると考えました。そこで、棚田の運営方針を探り、環境変化と生態系との関連性があるのか考察するため、管理に関わる人からの情報収集と分析を行いました。メンバーを2つの組に分けて、生物調査班と意識調査班を形成し、それぞれの観点から調査を行いました。まずは私達生物調査班の研究報告です。今回の調査では数ある棚田の中でも上田市殿城地区にある稲倉の棚田を対象地としました。この棚田は元禄から明治にかけて開田し、景観が素晴らしいことから日本の棚田百選に認定されています。2023 年 10 月 27 日の 15 時～17 時まで稲倉の棚田にあるビオトープで調査を行いました。調査の内容としては各ビオトープ内部に 3 地点コドラート（調査区画）を設定し、D 型たも網を用いて 1 m²の範囲を堆積物ごとすくい取り、確認された生物を 70%エタノールで固定し記録しました。また水温、水深、周長、pH 値、溶存栄養素、周辺環境をそれぞれ設定し、データの収集を行いました。調査地点となったのはそれぞれ A、B、C のビオトープです。2022 年度は A、B、C を含む 5 つのビオトープで調査を行われていましたが、2023 年度の調査では 5 つの内 2 つのビオトープに枯水が認められたため、調査時点で正確にできたビオトープに絞って行いました。まずビオトープ A の結果です。背丈の高い草本で開けた空間を有しているコドラート A1 と、逆に背丈の高い草本が多く鬱蒼としているコドラート A3、周長も 3,161 cm と 3 つのビオトープ内で最長だった他、ここではマメガムシを含む最多の 11 種類を記録することができました。ビオトープ B での結果です。背丈の高い草本からなるコドラートのパターンで構成されていました。周長は 1,330 cm と 3 つのビオトープの中で最短だった他、ここではシオカラトンボの幼虫を含む 5 種類を記録することができました。ビオトープ C での結果です。背丈の高い草本が多く鬱蒼としているコドラートのみで構成されていました。周長は 2,220 cm となっており、ここではブユ科幼虫を含む最少の 3 種類を記録することができました。各ビオトープのコドラートの水深です。左が 2023 年度、右が 2022 年度の数値となっております。比較してみると 2023 年度の方が全体的に浅くなっているのがわかります。2023 年度に最も指数が大きくなったビオトープ A を対象に 2022 年度と生物の比較を行いました。2023 年度は 2022 年

度に比べて種数が多く底生、潜行性の生物が多く見られました。一方 2022 年度では底生、潜行性の生物はあまり見られず、アカハライモリやツチガエルといった大型の捕食者が発見されています。まとめです。ビオトープの水深が浅くなるほど底生・潜行性の生物種が増加しており、反対に水深が深くなると大型の捕食者が増加することがわかりました。生物調査を受けての結果です。生物多様性の中には、条件が異なる環境が混在していることが 2023 年のビオトープ A の調査より考えられます。また生物ごとの生息環境としては、植生などの周辺環境と水深が影響を与えていると考えられます。最後に考察です。棚田は二次的自然であるために、人間による水の管理によって水深が、草刈りの頻度などで水深環境が変化することが考えられます。そのため人為的な介入が適度に行われることで環境の多様性そのものが保たれ、生物多様性の保全につながるが考えております。これで生物調査班の発表を終わります。続いて意識調査班による調査報告に移ります。

【ゼミ生】

これから意識調査班の調査報告を行います。私たち意識調査班は稲倉の棚田に関わる人の調査を 2 度行いました。まず 1 度目の調査では、稲倉の棚田の生物多様性が高い理由は、管理に携わる人々が生物を守ろうという意識を持ちながら管理を行っているためだという仮説を立てて行いました。調査の概要を話していきます。まず稲倉の棚田保全委員会の方々、地域おこし協力隊の方へインタビュー調査を行いました。この調査では主に生物多様性の維持を目的として活動している人々について詳しく伺ったり、生物多様性の維持のための活動を行っているか、管理形態はどのようなものを行っているか伺いました。1 度目のインタビュー調査の結果です。保全委員会の方々に生物多様性に関心があるのか聞いたところおよそ 60 人の中の 5 人が生物多様性に関心があるということがわかりました。従って管理に携わる人々が生物を守ろうという意識を持ちながら管理を行っているという仮説は実証できませんでした。生物多様性の維持のために活動を行っているかについては、行っていないという結果でした。管理形態については、全ての棚田において同じ手法で管理を行うために 2023 年度から一部管理手法をマニュアル化していったことがわかりました。考察です。稲倉の棚田の生物多様性の要因は、管理者の保全意識が高いためということが判明しました。稲倉の棚田保全は文化的価値を維持するために行われているという仮説と、生物のことは意識してなくても、保全委員会の活動が生物多様性に何らかの影響を与えている可能性があるという仮説を立てました。1 度目の調査の考察を行う前に、2 度目の調査では稲倉の文化的価値の中でも具体的に何に焦点を当てて管理を行っているかと、2023 年にマニュアル化された中で具体的にどのような手法がマニュアル化されたのかを明らかにしようと考えました。2 度目の調査は稲倉の棚田保全は文化的価値の維持を目的としているが、その活動は生物多様性にも影響しているのではないかとという仮説を立てて実施しました。2 度目の調査の概要です。今回は稲倉の棚田の保全委員会、地域おこし協力隊、上田市役所の方へインタビュー調査を実施しました。稲倉の棚田を保全する具体的な目的は何か、また棚田に期待することは何か、そして棚田の管理手法について詳しく伺いました。調査の結果についてです。稲倉の棚田は観光資源の他、歴史、農業、環境教育の場、地域住民の交流の拠点としての稲倉であるために保全活動を行っており、棚田での米の生産とそれを使った地酒の PR を行い関心を集めることで、稲倉の棚田への関係人口の増加を目指していること

がわかりました。2023 年度からマニュアル化された管理手法は水漏れ対策、草刈り、農業体験用の田植えの方法の 3 つであることがわかりました。水漏れ対策は、保水性を高めるために行われており、草刈りは除草剤や人口芝を使用せず人力で行われていることがわかりました。2 度目の調査の考察です。今回の調査で保全活動の主目的は文化的価値の維持であることから、生物保全を目的としていなくても棚田のための機能の一つである文化的価値を保全することが結果として生物多様性維持につながっていると考えられます。また、水田の水漏れ対策による水深の安定、景観保全のための草刈りが生物多様性の高さに影響していると考えられます。生物調査と意識調査のまとめです。二次的自然である棚田は人為的な介入が適度に行われることで生物多様性の保全につながるがわかりました。また、生物保全が主な目的の棚田保全活動であっても棚田の多面的機能の一つである生物多様性の維持につながるがわかりました。以上で満尾ゼミの発表を終わります。ありがとうございました。

【満尾氏】

ありがとうございました。いかがでしたでしょうか。今発表いただいた個別のデータの中には、もちろんまだ検証しなければいけないことは多く残されていますが、一番見ていただきたいのは、2 つの大きなテーマを持っていたということです。学生さんを稲倉の棚田に連れて行って、割と自由に課題設定をして研究を組み立てていこうという事で指導してきました。もちろん関心、興味を持っていた子がいたということはあると思うんですけど、人の意識、人の方に目を向けた課題を設定されたということはものすごい驚きでした。それというのが棚田に連れて行って、そこで感じたことだと思います。それが川や湖だったらそういったところに意識がくるということがあったかなと思っています。それが一つの棚田のパワーなのではないかと思っています。更に小学生が環境学習をするところにも接点を持たせていただくことにも広がっていきました。研究の視点として学生さんの学習の視点がすごく広がったというのもそうなんですけれど、実際に人との関わりも広がっていったと思います。保全委員会さんを通じてということですけど、豊殿小学校さん、或いは小学校の皆さんと接点を持つことができたということが非常に大きいです。これも本当に稲倉の棚田だからできたと感じています。続いて松下先生からお願いします。

【松下氏】

こんにちは。長野大学の環境ツーリズム学部の下松と申します。簡単に自己紹介させていただきますが、サブタイトルとして「私と棚田」みたいなですね、私が今までどういうふうに棚田に関わってきたかを皆さんにお伝えして考えるヒントになればなと思います。私自身は元々民間にいた人間でありまして、その後金沢大学で大学と地域をつなげるというところの組織の教員をしていたり、地域系の学部の教員をしていました。その後に 2015 年にちょうど北陸新幹線が開通した年に上田市の環境ツーリズム学部というところで教員をさせていただいております。満尾先生達は生態学とか生物系を専攻されていますが、私は地域の都市計画とか農村計画とか地域の組織づくりをどうするかということをテーマとして色々研究活動をさせていただいております。棚田との関わりと言いますと、大学時代を含めていくつかありまして、それを稲倉の棚田に至るまでどんな所で活動させていただいたかということを少し紹介させていただきつつ、話題提供できればと思います。小倉の千枚田で少し活動していたり、その後金沢大学に大きいキャンパスがあるんですが、その中にかつての棚田みたいなものがありまして、それを再生す

る活動でした。或いは能登半島の里山の保全活動研究ということをやりました。その中での色々なつながりで、最後に現在稲倉の棚田に色々お世話になっております。どんな形で棚田に関わってきたのか、色々なつながりがあるということでご紹介できればと思います。佐渡の小倉千枚田が面しているダム湖、小倉ダムというのがありまして、そちらのダム周辺の農村集落の方々が非常に期待を寄せてダムの開発されていた中で、一つのシンボルとして棚田というものをなんとか活用できないかということで活動させていただきました。これは、地域の方々とよく皆さんの地域でも実践されるかも知れませんが、まずは地域の自然を知ろうみたいなことで地域の方々とワークショップを開いて地域の宝だということでそれを地図にしたり、その地図に落としたものを今後私達が自分達でどういうふうに生かしていったらいいかみたいなことを、夢のプラン、アクションプランみたいなことを当時進めていました。当時というのは 20 年くらい前です。その時に 10 個ぐらい皆さんとワイワイとアイデアを出していきました。一番最初に出てきたのが棚田の再生をやりたいということです。先程お話があったように棚田が耕作放棄されているような状態だったので、地域のシンボルとして再生させたかったんですね。或いはそれを子ども達に伝えたいという話がどんどん出てきて、色々な活動を展開してきました。その中で地域の皆さんの成果をマップにまとめて自分達の地域資源を再認識しながら色々な活動を展開していこうということでした。テーマとしては地域資源を伝える活動を通じて地域のコミュニティを元気にしていこうということでも色々活動してきたわけですが、その中で象徴的だったのが棚田を再生するには、当時は新潟大学が入ってきて棚田を再生し始めます。集落の子ども達はこういう所を知らないよねということで、整備した棚田をみんなで見に行こうということで遠足のコースに組み込んで、そのガイドを地域のおじさん達がやって遠足を支援する。そういうような仕組みが地域の中に出来上がって、非常に住民のボランティアと小学生を含めて地域が一体となって自分達の地域を見つめ直すみたいなことができました。そんな活動の象徴として棚田がありまして、そういう活動が数年続いた小倉千枚田という 1 つ目の事例です。2 つ目としては、金沢大学です。日本で 2 番目か 3 番目くらいキャンパスが大きいと思いますが、250 ヘクタールあってその内の 75 ヘクタールがいわゆるかつての里山ということで、かつての里山ですから、今は人の手が入っていないんですね。その里山をどういう形で教育研究フィールドとして活用しようかということになりました。そういうことで、教育だとか研究だとか更には地域連携、大学のミッションを果たしていったとか色々な活動が大学のキャンパスにある里山で現在でも行われています。私自身も全体をコーディネートする大学の組織があるんですけど、そのコーディネーターもやらせていただきました。教育プログラムとしては里山のフィールドを使って色々な実習、再生していくような活動、色々な学部の学生さん達が関わるような人間力強化プログラムに利用しました。その中の一つとして棚田を再生していく活動があったり、オーソドックスな実習フィールドがあったり、或いは地域系の学生さん達の地域資源再生活動フィールドとして棚田があったり、研究も様々な研究が行われていました。薬学部もありましたので、棚田を再生して薬草園を作るというような研究もされていまして。そこに大学の組織だけではなくて色々な方々が、元々そこに住んで

おられる地域の方々が組織を作って色々な活動を展開していった、里山、或いは棚田がちゃんと地域連携の一つの拠点になっていったというのが金沢大学としてあります。色々な人達と関わりながら里山の棚田を再生していきます。右上がまだ荒れている時で左上が少し再生されて、子ども達も含めて環境学習の場として活用したり、学生達の研究フィールドとして活用したりということで学内の里山の活用拠点にして活動していきしました。というのが金沢大学での棚田の事例であります。3 つ目が今回災害がありました輪島の白米千枚田で、文化的景観世界農業遺産としての棚田ということでどのような棚田であったか少しだけ紹介したいと思います。里山里村プロジェクトということで研究部員を地域振興ということで地域連携の大きなフィールドということで色々な活動を展開していきます。その内の里山里海プロジェクトのシンボルの一つとして輪島・白米千枚田というのがあったわけです。そういう活動を展開していくうちに世界農業遺産に認定されたり、そのような関係でフィリピンの大規模な棚田であるイフガオの棚田と連携関係ができたりして、お互いの農業技術者の方々が交流するようなことで国際連携につながりました。そのような中で先程景観の話がありましたけれど、能登里山里海の文化的景観、農業景観として棚田が作られていったわけです。私自身はこの棚田に具体的に関わってはいないんですが、文化的景観の一つである間垣というのがあって、その景観をどうしたらいいかに関わってきました。能登の文化的景観は、能登の過疎高齢化だとか今回の自然災害などで非常に存続が危ぶまれています。能登の方はNHKの「まれ」という朝の連続テレビドラマ小説で土屋太鳳さんが主役だったんですね。集落全体を竹垣が囲んでいるような独特な景観を持っています。そこを過疎高齢化で維持が難しくなっている中で、どういうふうに景観保全していったらいいか、そんなプロジェクトを行っていました。地域の方だけでは維持管理が難しくなったので、学生だとか地域絡みの方々を巻き込んでそれを維持管理保全していく仕組みができないかということを実践しました。道路は何とか通れたのですが、今紹介した集落なんかは道路が通ってない孤立集落になっています。輪島の白米の千枚田はもうちょっと右です。そういう所で建物自体も全壊半壊になっています。200 名だった集落が今 10 名弱になってしまって他の地域に移れたということで、地域の方々に話を伺って来たんですけれど、高齢者の方々は戻りたい意向もあるんだけど、現役世代の 30 代から 40 代の方々は子どもの教育のこともあるしもう集落に戻るのとは考えられないというような話を現時点ではされていました。そういうことで集落が文化的景観を保存する意味があるのかというような問題がこの集落では出ています。同様に人の手が入らなくなる、棚田ってなぜ残さなければいけないのか、こういうことをまざまざと考えさせられる。そういうことで話題提供させていただきます。最後に稲倉の棚田ということです。こちらは稲倉の棚田とそのサステナビリティということで授業でいくつかフィールドとして活用させていただいています。具体的にはとにかく棚田を体感してみようということで学生に田植え体験みたいなことをさせていただいております。1 年生のゼミで演習の授業でフィールドを活用させていただきまして、私のゼミも持続可能な生き方をデザインしようというテーマでプログラムを組んでいます。その内の 1 コマでこの棚田で田植えをしたりということで、色々試行錯誤して現時点ではゼミとして棚田オーナーにならせていただいて管理させていただいています。そのような仕組みの中で棚田を体験させていただいています。これが 15 コマのゼミのプログラムですけ

れど、6 回目の緑色になっているところで稲倉の棚田の活動体験があるんですが、それ以外は文献を読んだり映像を見たり、世界のことを感じ取ってみたいり、世界で活躍している若者がどうということはどういう問題意識を持ってどのように活躍しているのかとか、或いはグローバル経済みたいなものをもう少し考え直してみようということでローカルの経済のありかたとかをやっています。或いは格差社会の問題だとか、社会問題をテーマとして与えながら実際そのフィールドに行って感じ取ってもらう。その内の 1 つが 6 回目に行っている稲倉の棚田です。そういうことで棚田で体感して何かを感じてほしいなという思いで棚田をフィールドとして大学の授業で活用させていただいているということになります。以上が私が棚田とどういうふうに関わるかという事例になりますが、最後に棚田に関わることの教育、或いは研究の意味とはということを簡単にまとめさせていただきます。私自身はまちづくりが専門ですので、一般的に考えればサステナビリティを検討する対象としていくことが位置づけの 1 つになるかと思います。地域資源の保全を活用としてどうやってサステナビリティを実現していくかということで、サステナビリティの取り組むことと環境と社会と経済をどういうふうにバランス良く棚田を素材にしながら実現していくかとか、モノ・ヒト・コトを掛け合わせてどうやって保全できるかとか、或いはそこで活躍される地域組織の方々がどういうふうに運営していくといいのかとか、色々な人達がどういうふうに交流して関係人口を作っていくといいのかとか、棚田の色々なテーマがあろうかと思いますが、やはり棚田の圧倒的に美しい景観を学生に体感してもらいたいと思います。私の分野では「名付け得ぬ質」(Quality Without a Name) という言い方があって、要は「これってすごいよね」それを言葉で表すと珍奇になってしまうんだけど、人として見た時に圧倒的にすごいと思える、それが棚田だと思うんですね。それを実現しているものの 1 つが棚田だろうと思います。イメージ的に棚田のスケール感是非常に人間的なスケールでできていて、そういうものの良さみたいなものを学生と共に承継していかないと世の中のスパンが崩れてしまうんだと思います。そのへんをうまく体感してもらいたいです。それと、身体性を獲得する、糧になる場としてということで、今、私たちの教育現場でも話題になる生成 AI があります。AI が発達してくると人間と AI はどうやって共存していくのかとか色々な議論がここ数年起こっていると思います。その中で身体性みたいなものが、人間が持っている身体性みたいなものが一番の根源的なものであって、五感も大切だとか、マスゲームみたいなものでもいいんですけど、総体的な関係と手作りとか手仕事の大切さ、人ができることの大切さを体感するとか、身体的なものを体感していくということが今改めて求められているのではないかとかな勝手な思いがありまして、それを体感する場としての棚田です。そういう危機があるのではないかとということで学生に色々体験させてもらいましたが、今後も稲倉の棚田で体験させていただきたいと思えますのでよろしくお願いします。それでは私の方からは話題提供を終わります。ありがとうございました。

【満尾氏】
ありがとうございました。僕もタベ資料を作成していて教育機関から見た棚田のパワーみたいなものを表現したいと思っていました。それではもう 1 件話題提供をいただきまして、その後会場の皆様を交えてそれぞれ意見交換をしていきたいなと思います。それでは今日は小学校の方から話題提供をお願いします。

【千原氏】

こんにちは。豊殿小学校で教頭をさせていただいております千原と申します。本日はとても貴重な機会をいただきありがとうございます。本校の取組みを少し紹介させていただきながらこれからの棚田のあり方というものを資料など情報提起ができればなと思っています。先程から皆様のお話を聞いていて、ちょっと私どもの話は話題がずれてしまうかも知れません。そこは申し訳ありませんがご容赦いただいて話を聞いていただければと思います。まず最初に本校はとても恵まれた立地にあるなと思います。基本的にはバスを手配いただいてバスで体験に行くわけですけど、直線距離にすると本校から棚田までだいたい 800 メートル、歩いて行けるということでその良さがあるかと思ひましてありがたいと思っています。先週も 3 年生は歩いて秋晴れの中とても気持ち良く棚田に行って生物のまとめのチェックをやらせていただきました。ありがとうございます。最初に本校の子ども達が棚田でどう活動をしているかを紹介させていただきたいと思います。その前に本校のグランドデザインがあります。ここに豊殿の宝があってそこを中心にした取組みを行っております。そこを通して本校が目指す子ども達を育てていくということで、内容については保全委員の方々と相談をしながら決めていきます。まず 3 年生です。生き物を探して観察します。それを黒板にまとめたりしながら実際にどうすることが正しいことなのかを調査しながらまとめていくわけですが、ここで満尾先生や長野大学の学生様方のご協力をいただきながら修正を加えていって正確なものになり、最終的にはこのような生き物観察カードになっていく流れになっています。また、ビオトープを作るということを経験させていただいています。ここに子ども達に実際作らせていただいて、自分達の生き物が住める場所というのはどうということなのかを学ぶ機会を与えていただいています。次に 5 年生を中心に田植えから脱穀までの体験をさせていただいております。また、3 年生は最後に冬の棚田に足を運ばせていただいて、保全委員会の方々と収穫の喜びを味わったりとか、ここではマシュマロを焼いていますが、楽しませていただいております。また 5 年生では最後の収穫をし終わった後に収穫祭ということで続けていきます。今の 6 年生の子達はお世話になった保全委員会の方々に感謝をしたいということで、感謝の会ということでやらせていただいております。また、お米がおいしかったので子ども達が豊殿の棚田で採れたお米を是非色々な方々に伝えたいということで、園工の時間を使いながら棚田のお米をアピールするポスターを作ったりして広めています。以上がざっとですけど本校が行わせていただいている活動です。その活動の中でどんな学びがあるのかということをもとめさせていただいております。これが全てではないですけど考えてみました。まず、棚田に行く道中です。子ども達は口々に言います。3 年生の子ども達が初めて棚田に上がった時に「棚田ってきれいだね」「私達が住んでいる近くにこんなきれいな所があるんだ」と言うんですね。感動しますね。実りを迎える時「稲穂がきれいだな」自然の美しさに気づき、そこに感動できる心を養っているんだなと思います。それを見ていて自分達の活動を振り返って詩を作ってみます。活動の中でも棚田の良さを感じてこれもまた感性を養っているのではないかと思います。また生き物探しの中ではどこにいるのかと思って行くんですけど、いないからどうすればいいのかということで、色々試行錯誤していった、きつこうなんじゃないかということを見つけ出していった最後見つけることができます。これはまさに問いを持ち、予想を立てて考えながら

確かめたい。最終的に答えを見出す探究のサイクルを作っているのではないかと思います。探究的に学ぶおもしろさ、良さを感じることにつながっているのではないかと思います。また、ビオトープ作りとか棚田を巡りながら自分達で田植えをする場所に辿り着くわけですけど、この過程には自然の豊かさとか、自然の豊かさを守り続けていくということの努力の大切さに気づかせる学びにつながっていると思います。田植えです。まず田んぼはぐちゃぐちゃです。子ども達は「いやだ」と言うんですね。ただこれは例年本校がやらせていただいていることだからやらなければいけないことだと思って始めるのでしょ。それが最初に保全委員の方々から真っ直ぐ植えることが稲を丈夫に育てるポイントなんだよと教えていただいて始めます。だからこの S さんも真っ直ぐ植えるということを考えてやりましたが、周りと違うんです。自分の苗が倒れているんです。自分ではやったつもりだけどなんでもかなと思って、友達と相談し、植え方にポイントがあるんだということを学んでやってみて「あつできた」となるんですね。コツをつかむんだと思います。更にもっとちゃんと深く植えることが大事なんじゃないかということを経験から教えてもらって植えている時に、自分の手の差し方を工夫するということを考え出します。真っ直ぐ差すように植えていくことで深く植えられて丈夫に苗が育つんだということをつかんでいくわけですよ。コツをつかんだんだと思います。植えたと思ってできたと思っていたら、隣にいた保全委員の方々が土をかき直し始めるんです。「ん？」となりますよね。「なんで？」となったところで、保全委員の方々が「土が固まったり、かたまりになっている所なかった？そこをかき回しているんだよ。」というふうに紹介してくださる。こうやってやれじゃないんです。こうやってやっちゃおうというふうに提案、ご自身の経験を語られます。それで自分でやってみて「確かに」となるんですね。自分が経験させてもらっていることで、やらせていただいたんですけれど、こういう色々な学びをしてきて、「田植えをすることで自分がプロになった気持ちになった。だから嬉しくなりました。こんな経験をさせてもらったからお米にも愛着がわいておいしいお米ができる」といいな。保全委員の方々にこんな体験をさせてもらって感謝の気持ちでいっぱいになりました。だから恩返しをしたい。コツを学ばせていただきました。愛着を持たせてもらいました。その結果感謝の気持ちで育てさせていただきました。」私が小学校 5 年生の時に田植えを経験させてもらったら、確かにこの S さんと同じようにわーっと思って田んぼに入りましたが、最後終わった後「楽しかった」となります。植えられて良かったなという感想も持ちました。が、この S さんのように最初気持ち悪かったりで始めたのがコツを学び、愛着を持ち、感謝の気持ちを持てたのは、本校の子ども達は全部で 187 名です。本当に小規模校なんです。各学年 1 クラスなんです。その中でも保全委員会の方々が子ども達一人ひとりに寄り添ってくださって、その子ども達が必要とすることに必要な指示をしてくださりました。また、子ども達にとっては稲倉の棚田が学びの場である。もっと言うと予想して試し、何度もやり直せることになっているということがやはり子ども達の育ちにつながっているのではないかなと思うんです。最後に棚田によってこんな活動に広がってきているんだということをご紹介させていただきたいと思います。3 つあると思います。まず今の 6 年生ですが、美味しいお米に合うおかずを作りたいということと他の農家の

方々、山口大根を育てている生産者の方々と一緒に植えていくという活動をしてみたりとか、棚田に思いを絵にしようということで日本画家の中村ひろみ様とするアピールとか、地震の経験をした時に輪島市の白米千枚田の方々に自分達が集めていたアルミ缶の収益金を募金として保全委員の方々を通じて送らせていただきました。そうしたところ、白米千枚田の愛好会の方から感謝状をいただきました。こんな出会いができてとてもありがたいなと思っています。この後実際にお会いできる機会をちょうだいしているのがこれがきっかけで交流が広がっていくといいなと思っています。また、中村様との活動はこんなふう

に4年生の活動につながっていくわけですが、その活動が更に東京都の大森東小学校の皆さんともつながるということも経験させていただきました。そして、自分達の棚田を自分達の手を通して棚田に対する思いなんかを語りながらオンラインで語り合おうという体験をさせていただいたので、自分の思いや考えを伝えることの良さを学ぶ機会にもなったかなと思っています。自分達の故郷の良さを改めて感じて愛着を持つ姿にもつながっていると思います。この時に描いた作品についてはサントミューゼのホワイエに飾らせていただいておりますので是非ご覧いただければと思っています。また披露させていただきました子ども達の体験を歌にした「稲倉棚田ラブソディー」という歌が本校にはあります。それを使って自分達のこれまでの活動を紹介するという歌の取組みをしています。この後全体会の中で披露させていただきますのでご覧いただければと思います。これも自分の思いや考えを伝えていく良さをを感じる機会になっていくと思います。是非お聞きください。このような新たな広がり

が色々な人と関わることで人とつながることの楽しさを感じることにつながっているのではないかと考えています。最後まとめです。稲倉の棚田で育った豊殿小の子ども達です。棚田でこのような学びをさせていただいております。これが本校の目指す子ども達の姿に育成につながっているというふうに思っています。また、先程からお話を聞かせていただくと、棚田において生物が生まれ、私達という生き物が生まれ、そこにつながっていく接着剤のようなつながりが棚田にはあるのではないかということを感じて聞かせていただきました。これから子ども達が育ち、人々とつながりながら育ち、生き物とつながりながら育ち、いずれ社会に育って行って、自分達の故郷を大事にしたり日本を大事にする人達に育っていけばいいなと思います。ありがとうございました。

【満尾氏】

ありがとうございました。先程拝見した小学生の皆さんの感想を見ていてもやっぱり棚田のパワーかなという議論にもさせていただければと思います。棚田の持っている根源的なパワーが現れているなと感じました。それではここまで話題提供を長く続けさせていただきましたけれども、ここで10分ほど休憩をさせていただいて、その後は会場の皆様を交えた意見交換させていただければと思います。

～休憩～

【満尾氏】

それでは最後に、意見交換をしていければと思っています。冒頭でも申し上げましたとおり、僕も何か答えを持ってるとか、まったくそういうことではないわけで、色々なご意見をちょうだいできればと思います。また、色々話題提供はあったんですけれど、うちでも同じようなことやっているとか、或いはこ

ういう違うことやっていますということもあるかなとも思いますし、同じ取り組みでも見え方も違ってくこともあるかと思っていますので、本当にざっくばらんに出していただければと思います。まず最初にテーマは教育機関としての関わりなんですけれど、受け入れていただいている側ということで、保全委員会さんはどのようにおやりになられているのか、課題を含めて言っていただければと思っています。よろしくお願いします。

【稲倉の棚田保全委員会 自然探究会】

稲倉の棚田保全委員会の春原と言います。5年目くらいでメンバーがなんとなく集まって始まったというのが本当のところ

で、田んぼの中にしか今は見られなくなった生物とかを集めてみんなでそれを知りたいねということもあって、なんとなくメンバーが集まりました。自分の孫や子どもも含めてこういう所に集まりたいねということもあって、だんだん関わりが広がっていったと思います。そうしているうちに、それなりのところの方達に見てほしいという思いがあるときちんとした先生の話

を聞かなければいけないこともあって、長野大学の先生にも教えていただいたりしています。とりわけ豊殿小の子ども達は毎年毎年色々なカラーを持った子ども達が来るので、私達も楽しく関わらせてもらっています。この後式典があった時に豊殿小の子ども達が作ったラブソディーを聞いていただきたいんですよ。是非聞いて稲倉の棚田そのものを体感していただけると嬉しいと思います。

【満尾氏】

ありがとうございました。どうでしょうか。今稲倉の棚田さんでは豊殿小学校さんや我々長野大学なんかも入らせていただ

いて、それ以外にも色々なお付き合いはあったかと思いますが、受け入れてフィールドとして活用するばかりでこちらから何か提供できるものはないかとやってはいるんですけれど、なかなかそういったことができていないのですが、そういうメリットがまだ見えてこないところがあるかなと思うんですけれど、受け入れていただく中でもうちちょっとこういう関わり方ができたらしいのにとかそういうことって保全委員会さんの方から何かありますか？

【稲倉の棚田保全委員会 自然探究会】

もうちょっと上田地域全体の小学生にも関わってもらいたいなという思いもありますし、私達も働きながら棚田の保全をし、自然探究会も成り立っているというところで、自然探究会6名

いるんですが、やっぱり3年生の授業やるから集まれる？となると半分くらいしか集まれないということがあります。もっと多くの方も携わってもらったり、学生さんや満尾先生にも充分関わっていただいているんですけれども、もっと広い人とも関われるようにしていきたいとは思っています。ですが、そこまで手いっぱいできるものではないので、皆さんたぶん田んぼを抱えていらっしゃるってできる範囲が限られてくとは思いますが、そういった問題が出てくるかとは思っています。逆に皆さんの田んぼでこういう関わりをしているよとか、こういう行事があるよとか、こういう問題があるよというものがあれば教えていただきたいです。

【満尾氏】

いかがでしょうか。うちではこういうことをやっていますとか何か、皆さん棚田に関わっている方であれば色々な取り組みに関わっていききたいという思いがあるかと思いますがいかがでしょうか。

【参加者】

岐阜県の坂折棚田保存会です。先程からお話聞いていたんです

が、非常に活動が活発で棚田でお米作りを続けられているというのに驚きまして、こちらの棚田は棚田だった所を見ることが多いです。私どもの坂折棚田もまだ耕作を続けてますが、聞いたところ保存会が地元の方中心に60名くらいということです。それが1つの驚きで、そこまでよく集まっていたんだと驚いています。全国の色々な所を見ましてもどうやって関心のあ

る人が集まっているのか、それから私どもも教育の場として小中学生の子ども達に土とか稲とか水路に触れてもらう機会を作って学校に提供していますけれども、そういった活動はしています。ただ、それはやっぱりコーディネートできる人がいない、受入団体がいないとなかなかそういうものが成り立たないので保存会という組織がしっかりしているからこそできることかなという思いで聞きました。是非他の地域の所でそういう受け入れする保存会とか構成メンバーとかをどうやって地域の所に教育をしてくれているのか。是非どういう活動をしていらっしゃるのかを聞いてみたいと思います。

【満尾氏】

ありがとうございました。今いただいたご意見の中で気になったところが、中学生も体験学習しているということなのでしょう

か。

【参加者】

先日

も中学生のツアーみたいなものがありました。中学校といっても小さな中学校です。私どもの恵那市中野方町の周辺の町3町合同の中学校です。そこから来た生徒が中学1年生全部で20名くらいです。その子達はほぼ地元もしくは周辺の町村の方で、住んでいる環境も同じような所です。ですから、そういう田んぼの周りで育っている子達ですが、その子達も経験したことがないということが話していてよく分かりまして、今は地元の子どもでさえそういうものに触れたことがないんだとちょっと驚きでした。色々話をしてみると興味を持って聞いてくれました。そんなような活動をしています。

【満尾氏】

僕も普段保全委員会の方と、小学生と大学生と関わらせていただ

いていますが、間の中学生や高校生は違った感覚を持って棚田に関わってくれるのではないか。そういったところのつながりがいいなと思っているんですが、小学生と中学生では棚田のためになるものは違ってきそうですか？

【千原氏】

たぶん違ってくるのではないかなと思います。というのは、小学生は本当に体全体に関わっていくので、素直に感じたことを自分で吸収していくと思うんですけれど、中学生はその経験を含めながら色々な知識を持っていて、それを含めて自然と関わっていくのでちょっと解釈が変わってくるのかなというふうに思います。が、たぶん根底には肌で感じ、匂いをかいだり、見たり、心で感じたものが最終的には自分のものになっていくと思うので、大事にしていきたいことが既存のものではなくて、自然と関わることでその土地が何を感じて何を一番思ったのかを子ども達に返してあげれば、そこが子ども達にとっての学びの場になっていくのではないかと思います。

【満尾氏】

千原先生からお話聞いた中で、お子さんが棚田に訪れて「きれいだ」と言ったというのがすごく印象に残っていて、僕

の目からすると豊殿小学校さんの周りもすごく風光明媚で美しい景観を持っていると思うんですね。そこで育っている子も棚田に行く

とインパクトを感じるのはすごいなと思いました。僕は東京出身で小学生の時田植えを学習でやっていたんですけれど、

すごく覚えていて、土に入った感覚とか覚えているんですけども、田んぼについてきれいだとかそういった印象を受けたという記憶はなくて、そこが棚田が持っている根源的なパワーかなと思います。そこが中学生に対しても発揮できるものがあるだろうと思います。先程会員の方からいただいたご意見では関わりが作りにくいという意見をいただきましたが、まさにそうだと思います。僕は大学生との一つのつながりとかメリットとか、常に新しい子が入ってきます。教育としては常に新しく入ってくる子達をまたその場所に連れ

ていって学ばせるわけですけど、棚田からすれば常に新しい力が入ってくるということはいいいことだと思います。ただ今意見をいただいたように棚田を作るような役割を果たせる人、組織がないと難しい、確かにそうだと思います。うちではこんなつながり方があったとか、そうじゃない関わり方

とかつて事例があるとか、あったりするのでしょうか。

【参加者】

大分県別府市からまいりました。先月別府市内にある高校で地域を盛り上げたいという部活、サークルの子ども達が稲刈り体験をしに来たんですけれども、それは商工会議所の方が支援して食育と絡めて今まででこちらの地域ではそういった商業との関わりはしてこなかった

ので、そういった初めての試みではあったんですけれども、それは地域としては受け入れなかったんですけれど、個人的に受け入れられているという土地を借りてやった時に、その部活で入ってきている子達なので、田植えと草取りと稲刈りを体験した中で、彼らの動きを見てみると、田植えした時から稲が成長した時の過程、それに対しての米はどういうふうにできるのかという勉強になるだろう、その時に誰でも参加してもいいとしていたの

で他の一般の方がいたんですが、受け入れ側としては小さい子どもは鎌を使うので稲刈りの時にケガとかさしたらそちらを優先して考えてしまいました。受け入れ側としては即戦力のある大学生くらいの大人の対応ができる人が欲しい。だけど教育として受け入れなければいけないというジレンマを抱えながら、できることなら受け入れてたくないという本音をのぞかせたりしました。それでも受け入れるということになって、その子どもさんで見ると、大人も子どもでもすけれど、何才がいいというのはないのかなと感じました。それは保育園に通っている子が稲刈りをするということで、鎌の使い方を教えて稲株を持って稲刈りするんですけれど、最初は稲株が2、3本の稲を刈ったんですが、何回かやっていくうちに太いの

に挑戦していく、2、3本だったものが10本に挑戦して、10本だった稲株が更に15本くらいの太い株、そういったところで安全とかケガ

したら大変だとか、稲なので稲科のアレルギーがあったり、ケガ人が出たり事故が起こったりというリスクを考えてしまって、やはり受け入れに皆さんおそらく高齢化とか少子化で組織の運営する立場からすれば何か起こったらいやだなという方が優先してしまうのでなかなか受け入れは難しいと思います。そういった学校として行く時は自分の親が農業なんてなくていいと言われれば、棚田の下に住んでいる子ども達でも水田の中で遊んだりすることはないと思うので、自主的な呼びかけで来た人を受け入れられる仕組みと受け入れ側が事故とかリスクを優先してしまう中で、そこをどうすればなおいいかという意見があれば聞きたい

と思います。ただ私

が感じたものとしては、子どもでも大人でも小学生でも中学生でも高校生でも年齢関係なく、安全にその人を見守り、助けながらやることで

その人の成長も見れて、自然と農業との関わりができると思います。やはり一人ひとりと向き合っていくのは難しいと思うので、そういったところが解決策につながるのではないかと思います。

【満尾氏】

ありがとうございました。ご意見の中ですごく感じたのが、僕は今スタッフに受け入れていただく側で、僕は大学という組織、小学校なら小学校という組織でそれらが来てくださるのではなくて、自主的に入っていくという流れが必要だったと今さらながら強く感じました。拙い進行で時間がきていますので、最後に1点ぐらい会場から何かご意見があればと思いますがどうでしょうか。

【参加者】

和歌山県那智勝浦町の棚田を守ろう会です。中学校の話が出たので私達棚田を守ろう会でも棚田の一角を地元の色川中学校の学校田として数年前から耕作、耕作といっても田植えと草取りと稲刈りなんですが、やってもらっていて、そこで採れた米を給食で使ってもらおうという活動をしています。豊殿小学校さんも給食で使うという活動をされているのかを聞きたいと思います。それと、先程の鎌のケガとか事故の危険性の話があったと思うんですが、中学校でも去年と今年と2年連続で稲刈りの時に田んぼにマムシが来たということがありまして、幸い事故にはならなかったんですが、どんな対策とかをされているのか教えていただければと思います。よろしくお願いします。

【千原氏】

ありがとうございます。まず給食には出ていません。5年生の子ども達が米を育てさせていただいて、脱穀を終えた後に、その時の収穫量にもよるんですけど、いただいてきて先程紹介させていただいた今の6年生達が自分達も食べながら保全委員会の方達に感謝の気持ちを伝えたいということで、手紙を書かせていただいて食べるということをやるとか、過去には全校にお米を炊いておにぎりにして配ったということもやりました。コロナ禍もあったのでそれが途切れてしまいましたが、そんなことをやってきたということはあると思います。それと、安全面に関わっては本校もとても自然が豊かな学校なので、匂うんですよ。肥料を発見するのでその部分ではいいのか分からないんですけど、察知するんですよ。へびだということで噛まれることはないかなと思います。あと指示物があるのでホワイエを見ていただきたいわけですが、今年の5年生は稲刈りの経験を語ってくれた中にこんなのがありました。「最初は鎌を使って刈るのですごく怖かったんだけど、最初に保全委員の方々から注意点を含めて使い方を教えてくださった。その使い方通りにやることで徐々に刈ることができて、サクサク刈れるようになって達成感があった」ということを述べてくれています。だから、授業で使う道具の危険性についてはしっかり使い方を含めたり、道具の特徴を教えることで体験をしていくということがまず大前提ではないかなと思います。でも、それをもとに今度自分達がどういうふうに活動できるのかということ形づけていくのも大事なかなと思います。のびのびと自然の中に出て、それを体で感じながらやれるというのは抵抗感なく学べる良い機会になるのではないかなと思います。以上です。

【参加者】

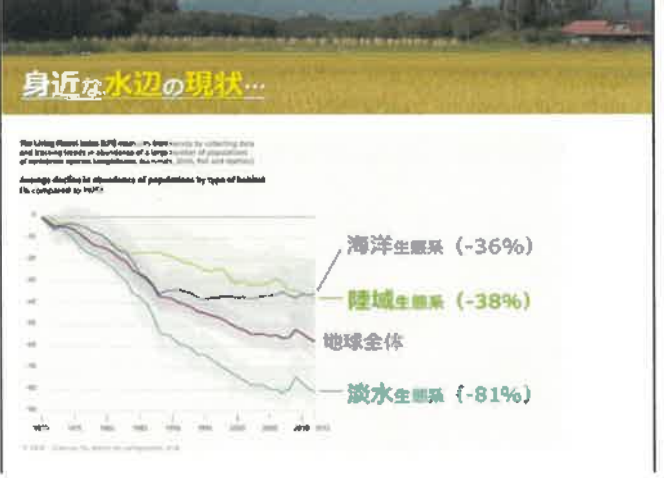
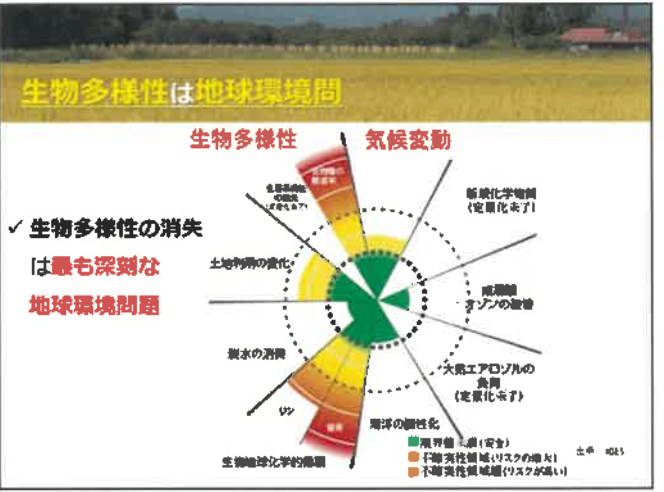
ありがとうございました。私達の地域も非常に自然豊かな所で、子ども達も匂うんですね。2年連続で見つけたのも子ども達だったので。そういうことかなと思います。ありがとうございました。

【満尾氏】

はい、ありがとうございました。僕もちょっと注意しなければいけないなと思いました。実は以前調査中にマムシに腕をかまれたことがありました。それでは時間が過ぎてしまいましたので、この後の交流会でも意見交換させていただければ幸いです。会場からも最後短い時間で申し訳なかったんですけど、色々な意見が出たなと思っています。私自身は知識を得ることができたと考えておりますので、また発展的な意見交換をしていただければ幸いです。長い時間ありがとうございました。私自身は知識を得ることができたと考えておりますので、また発展的な意見交換をしていただければ幸いです。長い時間ありがとうございました。



《資料：第2分科会／満尾 世志人 氏》



テーマ： 企業も棚田も得するかかわり
～稼ぐ棚田を考える～

【久保田氏】
稲倉の棚田保全委員会の久保田でございます。これから岡崎様と1時間ほどお話をさせていただきますが、最初に今までの岡崎様との歴史についてちょっとお話をさせていただきます。今日のテーマは非常に重く、難しい内容だと思っております。棚田の保全は皆さんも十分わかっておられるとおり、なかなか難しく、やはり成功、正解というものがありません。どんなやり方でもやれば前に進みますし、やらなければ前に進まないというようなことが言えるのではないかと思います。岡崎様が最初に棚田に関わっていただいたのは、棚田のオーナーさんでした。2013年頃だと思います。家族、そして企業として、社員の皆さん共々来ていただいて、棚田で田植えから稲刈りを体験していただくということが長年続きました。同じ頃に、私どもの組織を少し発展させていくため、酒米オーナー制度というものを構築する時期に来ていました。2017年頃に岡崎様にご相談し、快諾していただいて、酒米オーナー制度が始まりました。最初は20組で始まりまして、今年は122まで増えてきております。私どもの予算の約3分の1を占める大変重要な関わりになっております。それともう一つがパートナーシップ協定です。パートナーシップ協定第1号として長野県に仲介していただき結ばせていただきました。パートナーシップ協定は上田市内の様々な企業様に棚田に対等の立場でご支援をいただくということで、7社の皆さんと関わりを持たせていただいております。これが非常に大きなインパクトを与えてきていると思っています。今日のサミットもそういう7社の皆様方のお力を結集させて、やらせていただいております。そんな歴史がございまして、今日に繋がってくるわけです。ぜひ1時間ほど私と岡崎様と、今1人ここには書いてございませんが、次に私どもがぜひお願いしたいという人を壇上に上げますので、ご了解いただいて、3人で話を進めていきたいというふうに思っています。その後皆さんのご質問を受けたいと思いますので、よろしくお願いいたします。それでは岡崎さんお願いします。

【岡崎氏】
皆様、改めましておはようございます。今いろいろとご紹介いただきました信州亀齢というお酒を作っている酒蔵の代表をしております岡崎と申します。文章というより画像を見ていただいて、簡単にご説明をさせてもらって、終わりましたら3人でフリートークのような形で進めさせていただきます。いろんなタイミングとかご縁とかの中で進めていることもありますが、ご質問などもいただきながら、皆様と一緒にこの分科会を作り上げればと思っておりますのでよろしく願いいたします。題名はちょっと重いと久保田さんがおっしゃっていましたが、民間企業からするととても大事な感覚だと思っています。「保全」という想いだけではなかなか続かないところを、どうやって経済の仕組みと一緒に進んでいけるかというところで、民間の役割があると思っています。自己紹介もそんなにはいらないかなと思いますが、上田市の北国街道というちょっと古い町並みの中に酒蔵があります。規模としてはすごく小さな酒蔵になります。実は私は婿養子で、埼玉県の川越市の出身です。東京農大で出会った妻と お付き合いが始まりまして、せっかく入った東京都庁ですけど、4年で辞めて婿に入りました。潰れかけた酒蔵だったので、最初婿に入ったとき岡崎酒造に入りたいと言ったら、「そんな給料払えないから他で稼いでこい」と

コーディネーター 岡崎 謙一 氏 岡崎酒造株式会社代表取締役
話 題 提 供 者 久保田 良和 氏 稲倉の棚田保全委員会委員長

言われ、社会福祉法人に9年勤めました。いよいよ岡崎酒造が本当に潰れかけて、あんまり笑い事じゃないのですが、番頭さんという社員さんが辞めちゃうと、代わりの社員を雇う体力もなかったんで、僕は社会福祉法人を辞めて岡崎酒造に入ったのが13年前です。そこから岡崎酒造という酒蔵をどう立て直すかという流れですが、今日はそこではなく本当にどん底から這い上がってきた酒蔵というところでご理解いただければと思います。はい上がってきましたが、意外に結果も出ました。1枚写真を見せていいですか。全然関係ない写真からスタートしたかったので、使わせてもらいます。ちょうど棚田百選に選ばれた頃の稲倉の棚田の写真です。この辺の話は、久保田さんの方が後で詳しくお話できるかなと思いますが、なかなかこのまま保全していくのは難しいという段階にも入っていた時期だと思います。百選に選ばれましたが、この後どうするのかというタイミングだったので、保全委員会という団体が立ち上がったのがちょうどこの頃になります。そこから保全委員会の方たちの尽力で、保全やオーナー制度等々がスタートし始めました。棚田保全、多分これは皆様も同じ感覚になるのかなと思います。負担の大きい農作業、段差など地形的に機械が入れない小さな田んぼもあって、本当に負担が大きいです。私達も今年の夏にやりましたが、法面の草刈りは本当大変でした。地方の中山間地域の農業の人手不足はとても深刻だと思っています。あとは補助金頼みの運営ですね。どう民間が関われるかというところで、私達の出番かなというふうに思っていて、今回はこれからの取り組みの一つを話させていただければと思っています。今日お話をさせてもらう中で、大事なことはこの三つかなと思っています。もっと言うと、最終的に答えから言ってしまうと人ですかね。どんな仕組み、システム、ルールみたいな話よりも、やっぱり人が大事だなというところでのこの3点になります。1つ目として、保全団体の方は民間が投資をしやすい環境作りをしていただきたい。これは私も地方に20年以上住んでいる人間なので、排他的という言い方がいいかわかりませんが、新しく何かをやるうとすると、「本当に大丈夫な人か？怪しくないか？」と、とりあえずブロックをしてしまうということもありがちではないかなということ。2つ目は農地、これはどうしても農地法等法律上のルールでなかなか難しいところがありますが、行政の皆様をお願いしたいところは、そこも実は活用する道があるという道筋を示してくれることはあってほしいと思います。「こういうルールだから駄目です」ではなくて、その次の道筋を一緒に考えていくという姿勢を持っていただけるとありがたいと思っています。3つ目は私達民間の話ですけど、この岡崎酒造がどういうスタンスで稲倉の棚田に関わっているかという、やはり寄付とか支援という、何か社会活動・慈善活動をしているという関わりではなくて、自社のブランドが上がるために、関わると自社のメリットになるという意気込みを持って取り組んでいく必要があるということが大事だと考えています。この岡崎酒造がどんな酒蔵かというところで、先ほど潰れかけたというお話からスタートしましたが、一応評価も上がっていくことをちょっとご説明させていただきます。これは2015年ですが、関東信越国税局という新潟長野群馬埼玉茨城栃木の酒蔵全部が集まった鑑評会がありました。そこで1位になりました。ほかにも稲倉の棚田とか岡崎酒造というものをベースにしたドキュメンタリー映画というものを撮っていただきました。

海外のコンクールでも賞を受賞していたというところがあります。あとはdancyuという雑誌をご存知ですか？毎年春ぐらい2月3月に日本酒特集の企画がありまして、今年3月発行のdancyuでは「王道の日本酒」というテーマがありました。その中で4ページの見開きで岡崎酒造の信州亀齢が特集を組まれました。この中で酒造りのこだわり、お酒のこだわりというものを記事として載せることが多いですけども、取材をお受けするにあたって「私達が言いたいことは、お酒を美味しくするのは当然ですが、その先にどんな酒蔵になりたいのか、どんな街づくりをしていきたいのか、どういう地域にしたいのかということも語らしてほしい」という条件で掲載していただきました。その雑誌dancyuに、棚田のことも触れていただきました。ちょっと次、本当にいやらしい話をしちゃいますけれども、日本酒ランキングで検索すると、信州亀齢というのは全国で3位、長野県で1位になっています。ランキングっていうのは、そんなに気にしてはいないですが、一応ちゃんとした酒蔵ですってことをちょっと言いたかったんで、加えさせてさせていただきました。この稲倉の棚田で作っている酒米で仕込んだお酒がこれになります。この話をするとちょっと長くなってしましますが、基本的には信州亀齢というブランドのままで、使っているお米が棚田ですよということが言いたい見目になっています。対比になってもいけないのですが、世の中には「棚田」というお酒があったりしますが、そういったお土産品などではなく、ちゃんとしたブランドのお酒というものがあった上で、それが棚田で作られた酒米だということです。ちょっと自分で言うのもなんですが、美味しいお酒の米が棚田だということで、棚田の魅力を高める思いを込めて、こういうラベルにしています。もっと稲倉の棚田とかが前面にあった方が稲倉の棚田を知られるのではないかなということもありますが、まずはお酒の価値を上げるということから入るという意味で、こういう見目にしています。今年でいうと生酒4,000本ぐらい。火入れのお酒が今年は少なかったかな、4,000本ぐらいできましたが、そう時間がたたずに売り切れています。もっと言うと、半年ぐらい前の春ですけども、去年までこの4合瓶が2000円ぐらいでしたが、今年は3000円にしました。告知せず、それでもなくなりました。という商品を作ることが、結果として棚田に向かっていくというビジネスとしてとても有意義ですし、棚田の評価を上げていく価値を上げていくということにも繋がるという作り方、見せ方にしています。この左側の器の方は、これの発売日に合わせてコラボしたんですが、この上田市でとても人気のある陶芸家さんとコラボしまして、稲倉の棚田の藁を混ぜ込んだ酒器。1個4000円ぐらいしますが、それも瞬殺です。というブランドをしっかりと上げていくということが、民間の役割だと思っています。どうしても保全委員会、保全を担当されている方たちは、毎日の水の管理であったり草刈りであったり、そういったことが必要だと思いますが、その「価値作り」のためには民間が必要だということをお伝えしたいと思っています。稲倉の棚田保全委員会、これは久保田さんからのお話の方がいいかなと思いますが、主な収入はお米の販売ですね。稲倉の棚田の約半分ですかね。コシヒカリと「ひとごち」という酒米になります。コシヒカリというご飯米と、酒造好適米が半々の状態でお米の販売が一つの収入ですね。もう一つがオーナー制度で、酒米オーナーは税込みで年間6万6000円。6万6000円で田植えをしたり、稲刈りをしたり、最後にお酒を4合瓶で12本もらえる。これ1本って考えると、高いという話にはなりますが、このオーナー制度を100組で募集したら、1日で完売しました。

そんな人気のオーナー制度になりました。3番目が教育機関の体験料ですね。多分皆様のところも行われているところが多いと思いますが、例えば東京の銀座中学とかそういったところが、こういう中山間地域の農家実地研修として小中学校の教育の受け皿として収入を得ています。実際この三つの収入源の中で、オーナー制度の収入が増えてきているということです。今日お話をさせていただきたいのは、お米の販売はどうしても面積というものが限られているので、これからどんな増やして荒地を復活させるということもあるのかもしれませんが、ある程度管理できる田んぼの面積が限られていると、お米の収量もほぼほぼ限られてくる。そのお米を高く売るという方法はなかなか難しいと思っています。どうしてもお米を二つ並べられて、これはいくらで買えるのに、なぜ棚田の米は高いのか。棚田だけのイベントで売れば高く売れるかもしれませんが、売るという行為は収益まで見据えた人件費など経費を考えると、なかなか販売は難しいなということだと思っています。そんな中で、私達が今進めたいと思っているのは、オーナーさんを限りなく増やしていきたい。今120組ですけども、それを200組300組と増やしていけることが、大事な収入源になるのではないかなと思っています。実際の様子ですけども、これは田植えの様子です。ちょっと見づらいかもしれませんが、これは信州亀齢のTシャツです。何が起きているかということ、信州亀齢というお酒が好きな方がオーナーになってくださって、田植えや稲刈りに来てくれるという、ちょっと自分では言いにくいのですが、ファン交流会のような状態になってきています。この方たちは、発信もしっかりしてくれます。また「田植えをしています」「稲刈りをしています」と勝手に広告をしてくれる人たちです。この方たちとうちの目の前の駐車場でイベントをやったことがあります。そういう方たちは前泊をします。前の日に街でいっぱいお酒を飲んでくれます。宿泊による経済効果を生んでくれます。応援者をどんどん増やしていくってことが、とても重要なのではないかなと考えています。どうやって信州亀齢というお酒だけじゃなくて、棚田というものをどうツールに使っていくかという話ですが、棚田にずっといると、棚田なんかどこにでもあるとか、長野県でもいっぱいあるよとか地元の人は見えてしましますが、お茶畑の例もあるようにビジネス化できるを見ていかなければいけないということです。すごく得意なのは海外のワイナリーの方たちですよ。ブドウ畑ですと言っても、実はそこのファンの方たちはブドウ畑を見ながらそのワインを飲んで、「あのワイン本当に美味しい」という感情に訴えかけて、そのワインが例えば3000円だったのが、そこで飲んだら5000円でも1万円でも買いたくなる。ファンになるっていう仕組み作りをしっかりとされています。実際棚田でやっているところもあるのではないかなというところで、左側はバリ島のウブドですね。ライステラスでしっかり棚田を観光地にして、そこでお金を落とす仕組みが作られています。右側は星野リゾートさんの界湯布院。湯布院に星野リゾートさんが作ったホテルですね。ここはこういう言い方していいのかわからないけれど、どちらかというで作られた棚田ですね。その景色として景観として棚田を使っている。そのリアルなお米作りというよりは、ホテルの庭園って言っちゃなんですけど、そういう位置づけの棚田になります。ただそこもしっかりサービスとして成り立っているということを考えて私は思っています。ただ、私はあくまでも酒蔵の社長で棚田を守っていきたいとい

う思いだけはありませんが、その辺をビジネスとか魅力を作るっていうのはなかなか難しいですね。簡単じゃないというところに、新しいパートナーとして、今、上田市の隣の隣、佐久市というところで、クラビトステイという酒蔵の一つの建物を宿にして、酒蔵体験という取り組みをしている、クラビトステイ代表の田澤麻里香さんが今、仲間になっています。この方は観光とか宿泊体験、地方、インバウンド付加価値を上げることとか、そういうテーマを全力で取り組む、とても能力のある方が今仲間になってくれています。実際この方に関わっていただいて、この夏に稲倉の棚田でも取り組んだものが「棚田モーニング」。棚田で朝食を食べるという企画です。朝7時に集合してお散歩をして、あそこの素敵な棚田を眺めながら、お重の朝食を食べ、お酒も飲める方は飲んで、すごく優雅な時間が過ごせました。その後酒蔵を見学してお酒、この棚田の酒1本持ち帰れるというのがありましたけども、参加費は1万5000円です。高いって思いますよね。でも、早々に埋まりました。約3週間やりましたが、100名の方が早々に予約されてビジネスになるということ、新しいしっかりしたパートナーさんと組むことで価値を作れるということが実証できたこの夏でした。実際に新聞記事にもなってですね、しっかり地元の方にも伝わり、実際その棚田の人たちも、1万5000円でそれをやりたいって言ったときに「来るんかい」という話ですよ。でも、こうやって予約が埋まって新聞記事になると、自分たちの保全活動が魅力があるということを実感していただけた。このときも、「みんなが来るから草刈頑張っとくわ」とか、「その日のお客さん来るときは作業をやめとくわ」とか、どうしても草刈りやんなきゃいけない日は、遠くの方でやってくれるとか、本当に協力してもらって、この事業がやれました。この次も僕たちは考えていて、稲倉の棚田大作戦として、棚田の耕作している上の部分に、もう竹藪になってしまった棚田があります。昔は多分米を作っていたと思います。その場所がすごく景観が良い場所なので、そこを活用したいという夢・野望を持っています。ちょっとこれはまだ計画妄想の段階ですけど、棚田の絶景を見ながら泊まれる。先ほどの星野リゾートさんみたいなところがありますが、そこよりもリアルな棚田で、現実の生活がちゃんと見えるところでのサービスを作りたいと思っています。ここで宿泊、物販あとはカフェですね。おにぎり、例えばかまどで炊いたおにぎりが食べられたらいいなとか、そういった妄想をしています。もうちょっと具体的に言うと、スライドの下の方に建物がありますが、ここに泊まれる宿を造り、先ほどのオーナー制度と結びつけたいなと思っています。例えば、オーナーさんに、6万6000円が入ってもら。その方は1泊もし、ちょっと極論を言いますが、例えば10万円の宿とした場合に、半額で泊まれるという特典をつける。もしくはオーナーさんが今ここで6万6000円という計算をしています、10万円というオーナー制度にして、その方には一泊が付いているとするとずっと稼働率も良くなる。その先に考えているのが、やっぱりそういった目的でオーナーさんがどんどん増えていったほしいなと。なんだったら海外から田植えも稲刈りも来られないけれど、1晩泊まりたいからそのオーナーになりたいとかですね。これからの地域、農地をしっかりと盛り上げようという人のところには応援したいけど、寄付というとなかなか難しい。オーナーというのはすごく入りやすい切り口なんじゃないかなと思っています。さらにその1年間で1回2回泊まれたら、あの田んぼを見ながらのお酒が飲めたらとか、あの田んぼを見ながら、棚田を見ながら、そこでできたコシヒカリで、朝にかまどで炊いたご飯でおにぎり

が食べられたら幸せだろうなと、その喜びとか、お金を出したいという仕組みをしっかりと作り上げることで、その価値を引き上げられるのではないかと考えています。こういった投資をしたいという民間がいないよということもあるかもしれないですが、やっぱりこれをやるのが企業にとって得だということが伝わってほしいと思っています。というのはこれだけお金を注ぐんですけども、テレビで特集されたときに、景観を守る酒、棚田を守る酒っていうブランドが、この信州亀齢につけば、信州亀齢を飲んで応援したいとか、あんなにいいことをしているお酒だったら、みんなにすすめたいとか、企業にとってとてもプラスになるんです。そのブランドをもらえるということになると、企業もまたそこにエネルギーを注げるっていう循環に入ることがとても重要なんじゃないかと考えています。役割分担の部分ですね。簡単に言うと保全委員会は保全活動。民間はしっかり稼ぐと。もう1人、紹介させてもらいますが、先ほどの田澤麻里香さんです。棚田の保全活動があって、民間酒造りで酒を販売して利益を得る。ただその価値を上げるというところで、一番プロフェッショナルな田澤さんが入ってくれたことで、いい循環が起きているということになります。その辺の話を田澤さんから自己紹介を兼ねて話してもらってもよろしいですか。

【田澤氏】皆さん初めまして、株式会社クラビトステイの代表を務めております田澤麻里香と申します。私は2019年に資産も何もないところからスタートしましたが、「100年後も誇れるふるさとを守り伝える」という思いだけは持っていました。地元は小諸市ですが、16年ぐらい東京に住んでいました。20代の頃に旅行会社勤めで世界50カ国ぐらい旅をしたり旅を作ったりしてきた経験から、これまでタダ同然みたいにしてきたことでも、発信の仕方、磨き方などを工夫すれば、海外の人や地域外の方にとっては10万円20万円、もしかしたら100万円払ってでも惜しくないという宝物が地元だけでなく日本全国各地にはたくさんあると思いました。今このクラビトステイという事業は、佐久市の南にある大きな造り酒屋さんの敷地の中に、元々職人さんたちが寝泊まりしていた建物をリノベーションして、2.5畳のお部屋へお客様に泊まっていただく体験がメインの宿です。皆さんいくらだと思いますか？1泊2日で海外のお客様で約9万円、お食事は朝ご飯しか出しません。2泊3日のプログラムもあります。約14万円です。でも今年はすでに全部の部屋の予約が埋まっていて、今は来年の2月3月の販売をしています。これが1号店というのは非常に象徴的な例として捉えていただければと思います。今、稲倉の棚田の話をずっとしていただいて、本当に素晴らしいものを地域の方々が愛を持って、そして努力と本当に皆さんの想いで繋がれてきている。これをより多くのお客様であるとか、その地域を大切に思ってください、応援したい方と繋げていくということが、次のツーリズムの役割なんじゃないかと自分は思っています。これまでのツーリズムは、数を追う観光で、いかに多くの方を大量にその地域に呼び込むか。でも今は世界を見てもオーバーツーリズムという言葉がトレンドになってきていて、地域を汚す、ゴミを出す、大騒ぎする外国の人が来たりして、非常にリスベクトのない方を呼んでしまうことによる弊害が起きていることが、世界的な問題になっていると思います。けれども、私達は誰でもいいから来てくださいというツーリズムではなくて、この地域を同じ想いを持って守りたいと思ってくださる方々を呼び寄せる。そういう方々と地域を繋ぐツーリズムを展開していくというところで、

保全委員会の皆様や岡崎社長のお役に立てることがあったらいいなという想いで、この夏から本格的に関わらせていただいております。

【久保田氏】ありがとうございます。今、岡崎さんからいろんなお話がありました。いくつかキーワードがあったと思いますので、持ち帰って考えていただきたいと思います。まだ時間はありますので、もしご質問等あれば承りたいと思いますが、どうでしょうか？

【参加者】農林漁業信用基金の者です。岡崎様、田澤様、久保田様、それぞれ大変素晴らしいお話をいただきましてありがとうございます。3点ほど質問させていただきたいと思います。1点目は岡崎社長への質問ですが、非常に大事な役割を果たしております、この酒米のオーナー制度について、この酒米「ひとごち」を、棚田で作るメリット。これは平場と比較して、メリットなり特徴なりがあるのか。あるとすればどういうところなのかを教えてください。それから2点目は、岡崎社長と田澤様への質問です。いかに多くの民間企業の皆さんに、参画していただくのかということが、これ大変重要だと思いますが、ご当地におきましては7社がパートナーシップを結ばれているということで、これは大変素晴らしい取り組みだと思います。今後こういった企業の参画を増やしていくという意味で、具体的にどういった企業、どういった業態の企業、あるいはどういった取り組みをしている企業が、岡崎様が言われたような自社ブランド向上を思っ参画していただけるのかというようになどところについてのコメントがあればいただきたいと思います。最後3点目は、岡崎様と久保田様に質問です。岡崎様の方から負担の大きい農作業という話がありまして、いかにこの負担を軽減するのかというのが大事かと思っています。その意味で今スマート農業なりスマート林業といったようなものが中山間地域でも実装されておりまして、例えば薬剤の散布や苗木の輸送をドローンで行う、あるいは法面の草刈りをロボットでやるとか、ちょっと棚田の場合は、石垣は機械が使えないのでなかなか難しいと思いますが、こうしたスマート農業の今後の展開、それによる負担軽減というものについて、棚田についてもある程度可能性があるのかどうか、その辺りのところをコメントいただければと思います。よろしく願いいたします。

【岡崎氏】棚田のできる酒米の利点について言葉を選ばず最初に言います。去年も今年もそうですが、今年の米不足になった原因にもなると思いますが、夏場の高温というのが米の品質に影響するところが大きくて、去年の猛暑、今年も比較的暑かったですが、粒が小さいとか米が割れてしまうという現象が発生しました。多くの要因として水の温度、水が熱いかどうかという点では、棚田とか上田市の中でも標高の高い農地で作られている田んぼは、収量も品質も良かったです。確かに棚田というのは、どうしても水が冷たすぎるデメリットも当然ありますが、去年、今年に関してはその冷たさが良い影響を与えているというところがあります。これからの温暖化を考えると、その辺のメリットはあると思います。ただ、ちょっと正直に申し上げますが、酒蔵の価値向上を酒蔵の社長は当然考えています。そのときに良いお米を作るというのは大前提ですが、例えば「兵庫県山田錦を全部仕入れて海外に輸出します。大儲けしました」というのは酒蔵としてはハッピーかもしれないですけども、地域の農業が廃れます。地域にお金落ちないですよね、ということがこれからの酒蔵の生きる道とは思ってないということがあります。

まず、地域と一緒に進んでいきたいという想いがあります。次のステップですけど、酒蔵が価値を上げていきたいときに、酒蔵見学ということもよくやりますが、実際のところ、酒蔵には似たような設備が多いです。甑（こしき）という蒸す機械やタンクがあってそれを見せたところで、A社B社C社の違いはなかなか出づらい。それよりも、本当に酒蔵の価値より日本酒をおいしいと思って飲んでもらいたい、日本酒の価値を上げていきたいといったときには、景色というものも重要だと思っています。ワイナリーがワイン用葡萄畑のところにレストランを持って、そこで飲むことによる価値作りと同じですけども、それを酒蔵はあまりやってないですね。田んぼを見せるよりも酒蔵を見せることに注力していることが多い。田んぼというのも、比較的平地のちょっとした田んぼだとなかなか景観としての魅力って作りづらいと思いますが、そういった意味で言うと棚田というのはまず感情に訴える景色を持っていますね。そこを保全する酒蔵、この経過の中で作られたお米やお酒がこれだというブランディングすることで、価値が上がると思っています。先ほどの品質もとても重要ですが、それとセットで景観と一緒に進めていきたいというのはあります。それが一点目ですかね。2番目にどういう民間を入れていきたいかという話ですが、例えば慈善事業的な寄付支援という形の関わり方をする企業さんはいと思います。田植えを手伝ってくれる、稲刈りを手伝う。社員教育的にやったりする場合も。でもそこだとどうしても限界感を僕は感じていて、やはり観光とか、もしくはレストランとか酒蔵とか。例えばレストランでいうと、今はへき地でも、あそこのレストランで食べたいという魅力的なレストランであれば、そこまで向かう人は、全国もしくは世界からも作り上げられるのではないかなというところで親和性があるのではないかなと思っています。

【田澤氏】国がずっと6次産業化を進めて、1次2次3次足して6次ということで、農家さんが加工もする、販売もする、ときにはレストランもするというようなところが、全国にも何ヶ所かあります。地元でも農家さんがレストランをやられていたが、やめてしまいました。いろいろな理由があると思いますが、やはりその企業が得意な、コアコンピタンスなんていう言葉がありますけれども、得意なことってそれぞれ違うと思っていて、全部を自分でやろうとすると、やはりどこかで難しさも出てくると思います。棚田モーニングはすごく良いコラボレーションになったと思います。1次産業があって、2次産業があって、そしてサービスのプロフェッショナルとして、良いお客様の集客をお手伝いできる立場として関わらせていただきました。コソソーシアムなんて言葉もありますけれども、様々な産業の方が一緒にそれぞれの得意を持ち寄って、地域を元気にしていこうと同じ方向に向かって進んでいく。そうしたコラボレーションができること、自分の会社だけじゃなくて、その地域を良くしようという想いを持っている。そういった協業がこれからの新しい地方創生のあり方なんだらうなと思います。

【久保田氏】スマート農業のお話をいただきましたので、私どもの棚田についてお話しします。稲倉の棚田は、平均の勾配が10分の1ぐらいです。4分の1から17分の1でSL（法面の長さ）が8メートル以上。長野県のこの上田というところは、東日本と西日本のちょうど境にありますので、石垣の棚田と土手の棚

田が入り混じっているような、そんな畦畔になっています。ここ2〜3年かけてスマート農業、農作業の軽減については、モデル地区としていろいろな業者に来てもらっています。ただ、ロボットでの草刈り作業は現実問題として非常に難しいです。土質と傾斜が影響し、作業可能な場所が非常に限られています。そのため今でも、草刈りはビーバー（刈払機）を使用しています。やりたいけれどもできないといった状況です。来年は違う機材を導入し、またチャレンジしてみたいと思っていますが、いずれにせよ、全体的な草刈り作業の機械化は、現状では難しいというのが現実です。他に何かご質問はございますか。

【参加者】

失礼いたします。秋田県から参りました。本日は貴重なお話ありがとうございます。秋田県では、「守りたい秋田の里地里山50」というスローガンのもと、里山保全活動などを支援しております。しかし、秋田県には、なかなか魅せる棚田が存在しておらず、稼ぐという段階に至っておりません。本日のお話を参考にさせていただき、地元の方にも情報を共有していきたいと思います。具体的に、海外の方や地域外の方々にどのようにPRされているのか、お教えいただけますでしょうか。

【久保田氏】

稲倉の棚田保全委員会は「任意の団体」という位置づけです。私の住んでいる豊殿というエリアでは、豊殿地域全体で棚田を保全していく必要があるという認識のもと、「まちづくり協議会」が設立され、その活動が歴史的に続いています。情報発信は非常に難しい課題ですが、若い女性スタッフにも多く来てもらっており、SNSを通じて情報発信を行っています。誰が情報発信を行うか、明確に決まっているわけではありません。やる気のある人に、情報発信を任せている状況です。稲倉の棚田は任意団体でメンバーは各自の都合で参加するため、安定した活動が難しい面もありますが、近い将来、組織をより明確な棚田の組織へと発展させるべく、令和8年度に向けて法人化を進めております。

【岡崎氏】

付け加えさせていただきます。PRについてですが、保全活動、つまり保全委員会が行っている活動は、行政や新聞記事で取り上げられやすいという側面があり、現にできています。しかし、収益化を目的としたPRとなると、民間企業が担うべき役割となります。私で言えば、岡崎酒造のTwitterアカウントで、稲刈りや田植えの様子、新商品の発売などを発信し、棚田に関する情報は自社のメリットのために発信しています。今回の「棚田モーニング」に関しても、クラビトステイさんのホームページで募集したり、SNSで情報発信したり、これまでのクラビトステイのお客様に連絡したりするなど、民間企業は収益化を目的としたツールとして、情報発信を行っています。

【久保田氏】

よろしいでしょうか。続きまして、どうぞ。

【参加者】

奈良県のNPO法人「明日香の未来を創る会」と申します。私も今年で棚田オーナー制度を始めて29年目、老舗と言っているくらいの棚田です。私どもの地域もうまし酒オーナー制度というものを、我々の法人ではなく明日香村の地域振興公社さんが長いこと運営されていますが、稲倉の棚田のように盛り上がってはいません。運営側の立場から、酒米オーナー制度についてお伺いしたいのですが、一般的な田んぼのオーナー制度では、面積の制限があるため、アッパーが決められてしまうので、オーナー数がどうしても限られてしまいます。岡崎社長は、500

組のオーナーを目指しているとおっしゃっていましたが、どのような仕組みで、オーナーは6万6000円を支払うことで、どのような特典を受けられるのでしょうか。また、6万6000円の収入は、保全委員会と岡崎酒造でどのように分配されているのでしょうか。お話できる範囲で、よろしくお願いいたします。

【岡崎氏】

オーナー制度の仕組みですが、昔は、稲倉の棚田保全委員会も、この田んぼ1枚はどの家族とかが決めていました。それでやっていたら、やっぱり来ない家族とか、どうしてもそこだけ稲刈りできないというズレが起きてきたので、田んぼの割り当てはやめました。なので、ちょっとしか刈らない人もいれば、頑張らずっと刈っている人もいるっていう状況です。やりたい人はやる、やりたくないやらないぐらいの感じです。なので、実際にそのお米の収量に対してのお酒ができて、どれぐらいのオーナー数にいけるかという話は、確かにどこかで壁は来ます。量という制限があるのだったら、本数を減らすっていう方法もあると思います。あまりそうならないようにはしたいと思いますが、そこら辺は需要と供給のバランスだと思います。ただ、まだまだいけるので、オーナーさんはもう200人でも300人でもいいと思っています。ただ、体験に大勢来られたら大変だから難しいという制限がかかったりもします。そのため、棚田には来なくてもお金を出したいという支援者を増やすところも、どこかの過渡期で必要なのかなと思います。もしかしたらこの酒はオーナーにならないと買えないというレベルまでいけば、オーナーになりたいというその希望者に応じてオーナー料の金額を上げられるかもしれません。そういう循環になるまで頑張りたいと思っています。

【久保田氏】

今の件補足させてもらいますが、私どももオーナー制をずっとやってきまして、4年ぐらい前までは、今言われたように、それぞれのオーナー様がそれぞれの田んぼというやり方をやっていました。でも、さっき岡崎さんが言われたように、非常に良いこともあります。弊害も出てきます。なかなかこちらの思うように展開していきませんので、そこで今はサミットのタイトル「カカワレル棚田 ずくを集めて未来に繋ぐ」って書いてありますが、要は来た人たちにできるだけ交流、関わっていただいて、自分で参加していただいて、オーナーさん同士が交流してくださいっていうのが柱になっています。ですので、受付順に大きい田んぼに20名、小さい田んぼに5名と案内しています。そうすることで、こちら側の人間がいなくなり、非常にスムーズに回っています。それと、「カカワレル棚田 ずくを集めて」ってずくとは方言です。「一生懸命やる」とか「頑張る」とか、そんなような意味です。くずじゃないですから、間違いないように読んでください。「ずく」ですから。それで面積の話になりますが、30ヘクタールの稲倉の棚田が1999年に日本の棚田百選の認定を受けました。広いのですが、残念ながら10ヘクタールの山手につきましては、もう鳥獣の巣になっていまして荒廃しています。私どもはその中の、8ヘクタールを今、保全委員会でやらせていただいて、下流の12ヘクタールはそれぞれ地主さんがおられてやっています。8ヘクタールのうち、4ヘクタールは法面、畦畔です。それほど急峻ですから、面積の確保がなかなか難しいです。今岡崎さんが言われたように、酒米オーナーはまず酒米を私達が作りますと、法外な値段で買っています。岡崎酒造様にあんまりはっきりは言えないですが、今世間ではお米が無くなって、今年はJAの買い取り価格が昨年よりも3000円から4000円とかね、場所によっては5000

円ぐらいに上がっていますが、1俵あたり15000、16000円が普通だと思いますが、約その倍ぐらいです。最初からそういう価格で買っていただいていますので、岡崎さんの考え方が我々にとっては非常にありがたいです。だからこそ保全活動を頑張れるというところもあります。それと、オーナー料金6万円については、全てこちらがいただいています。それだけでも120組だと単純計算で720万円になります。そこにお米代が300万円以上になりますので、1000万円近くになります。私どもの総収入が約3000万ぐらいです。今現在の3分の1は間違いなく岡崎さんといひましようか、酒米オーナーに関わる分です。

【岡崎氏】

お酒についての収入は6万6000円のうちの一部をイベント協力費という形でいただいてやりくりしています。

【久保田氏】

他にはどうでしょうか？

【参加者】

滋賀県から来ました。うちも過疎化で困っていますが、こうやって何かイベントとか行いたいとなったときに、地元のお婆あちゃんたちが静かなままでいたい、知らない人が来て何かされるのかわからないという意見なんかもあります。今回こういう活動の中で、地元住民の方々の意識がどんなふう変わっていったか、それからそれによって移住者が増えたかっているのは、そういう変化があれば教えていただきたいです。

【久保田氏】

はい、私どもの棚田のある場所は岩清水という地区で、約60〜70軒ぐらいの方々が生活されています。豊殿地区の中に16の自治会があり、その中の一つが岩清水という小さな自治会になります。当然色々なイベントがあると、うるさいという話はもちろん出ます。もう私に関わってから10数年経ちますので、最初の頃はそういう話が出ていました。今はむしろ荒廃して営農できなくなったところを地主さんから保全委員会が無償で借りています。1年に1回だけとれたお米2キロをお礼に持っていくだけです。こんなところで耕作する人なんてなかなかいないですよ。棚田の保全は、個人的な意見でかなりプーイングが来るとは思いますが、やらない方がいいと思っています。ただ私は先ほど話が出ましたが、まちづくり協議会という組織の長をやっていたために、半分やらされたようなものです。でも、引き受けたからにはそこは責任っていうのもありますので、かなり家族を犠牲にしているのはもう当たり前のことで、そうじゃないと多分できない。覚悟ってやつですよ。当然岩清水の皆さんの自治会ですから、最初の頃は1年に1回とか2回岩清水の自治会の地主さんに特に来ていただいて、色々な話し合いをしました。そういう過程の中でだんだんそういう声は小さくなってきたことは確かですね。今は、ほとんど聞きません。どっちかという、やっていたいてありがとうという話が多いかもしれません。

【岡崎氏】

付け加えていいですか。最初にやっぱり人ですよと話をさせてもらったと思いますが、まさに久保田さんのことです。「やめた方がいい」とか言っていましたが、久保田さんは委員長になったのは5、6年前で、その前から岡崎酒造は関わっていて、「いや、ここは続くのかな」とか思っていました。出会う人みんながもう「駄目だ、高齢化で人もいないし、やってもあと5年もすれば駄目だよ」という言葉ばかり聞いていたので「やばい、ここに深入りしちゃったら出られなくなりそうだな」と、微妙に逃げられるぐらいで関わっていたのが本音です。そのときに

久保田さんが5〜6年前に「俺、委員長になるからよろしく」って来たときに、久保田さん「本当に棚田大丈夫ですか？」っていう話をしました。そしたら「俺はやる、5年間は必ずやると、お金がもしなくなったら俺は自腹切ってでもやると、本気で5年間をやり切る」って言ったので、「じゃあやろう」と思って、うちももうその船に乗ったって感じです。そこから本当に久保田さんのおかげで、いろいろなうちが関わっているのも、もっとオーナーさん増やそうとかですね、そういうことを言っても、久保田さんに相談すると、もう「はい」か「イエス」の人で、やるしかない人ですよ。なので、こっちが関わりたいって言ったなら、まず、いいよと、そこから地元の人をちゃんと説得といいますか、納得させてくれます。多分、保全委員会の中にも、「困る」っていう声が絶対あると思います。いろいろ関わることに關して。でも、そこを抑えてくれる、なだめてくれる人がいるから、僕らが前に出て、関わっていますってことが言い切れる環境を作ってくれているのが大きいと思います。多分一番最近で実感したのは田澤さんだと思いますけど、「棚田モーニング」に関わるいきさつとかを説明してもらえますか。

【田澤氏】

そうですね、最初に棚田モーニングをやり始めたきっかけとすると、この景観をもっと活用して、今まで応援してくださっている方とはまた違う方たちを呼び込めないかというのがきっかけで、声をかけていただいてやり始めました。特にインバウンドを専門的に呼び込むということをやっている、自分としても挑戦でしたが結果としていろんな国から来てくれました。アメリカ、イギリス、ドイツ、ルクセンブルク、あとアジア圏は香港、台湾、シンガポールの人とか、いろんな方が注目して来てくれました。さっき住民の方々からのハレーションが心配というご質問だったと思いますが、大事なことで二つかなと思っています。人は、特に高齢になるほど新しいことに挑戦することや、自分のコミュニティの外の人と交流することに、恐怖を覚えると思いますから、そここの心配を取り除いてあげる。密なコミュニケーションをしてさしあげて、不安を少しでも取り除いて差し上げるということがファーストステップ。もう一つはやっぱり主催者側がいいお客様を呼び込む。これによって最初「何か不安だ」、「何か盗まれたりしたらどうしよう」とか思っていたけど、「全然そんなことなかったね。しかもお客様がすごくいいね、いいねって言ってくれるからなんか嬉しい」といったように、人々の心って変わっていくんです。今回の棚田モーニングも、最初は地域の方は「1万5千円も払って朝ご飯に来るわけない」と思っている方が何人も来てくださったことで、自信に繋がっていく。そういう小さな成功の積み重ねをしていくことによって、みんなが「来年やらないの」、むしろ楽しみにしているぐらいの感じになっていくと思いますから、良いお客様を呼び込むことが大事です。誰でもいいから来てほしいという時代は終わっていると思っています。私は旅行会社時代、本当にマストツーリズムの極みみたいなツーリズムをずっと5年間やってきました。安くするから来てくださってって言って、バスに40人45人もぎゅうぎゅうに詰め込むという、そういうツーリズムをずっと見てきました。そういうお客様がたくさん来てくださっても、たった1時間の滞在で見学と買い物とトイレ休憩した方たちが、

その地域を大切に思ってくれるほどのお客様かというと、1 割もいらっしやらないと思います。ゴミが出て渋滞も起きるような数を追うツーリズムでないと生き残れない観光地にとっては大事かもしれません。けれども、こういう本当に田舎の地方、元々観光地じゃなかったところにとっての生き残り戦略は、数を追うのではなく、良いお客様を呼び込むことが大切です。良いお客様を呼び込むためには3つのポイントがあります。ぜひ皆さん活用していただければと思います。この3つをやるだけで9割ぐらいは自分たちの来て欲しい方に来てもらうことができます。1 つは価格にこだわってください。「こんなの 100 円でももらえればいいや」という考えの地元の方が多いです。事実、自分がやっている佐久でも、一緒にコラボしている酒蔵さんは、体験料について最初は「500 円ももらえたらいいんじゃない」とおっしゃっていました。それが今 13 万円いただいています。もし 500 円で呼んでいたら、物を盗む方が来てしまいます。まずは価格です。価格で本当にお客様の層が変わります。もう1つがデザインです。どんな方に来ていただきたいのかというのを明確に決めたら、デザインに徹底的にこだわってください。素人がちょっとエクセルで作ったようなデザインは駄目です。ちゃんとプロに頼んでください。自分たちの持っているコンセプトで来て欲しいお客様の心を一瞬でつかむイメージにしてくれる能力のあるデザイナーと組んでください。そこはお金がかかるかもしれませんが、絶対に必要なことです。最後に、価格・デザインときたら、媒体にこだわってください。どの媒体に出すのかによって、見ているお客様が全然違います。多分この会場に来て、日常的に TikTok を見てますという人は、多分お顔を見る限りそんなにたくさんいらっしやらないと思いますけど、TikTok は Z 世代の象徴的な媒体情報ツールになっていますので、来て欲しいのは Z 世代なのか、来てほしいのはシニアなのか、来てほしいのは外国人なのか、外国人の中でもどういう国の何を普段趣味にしている人なのか、その人たちが情報をどこから得ているのかということを徹底的に研究して、こだわってください。この3つを押さえるだけで、9割以上の自分の呼びたいお客様を呼べると思いますから、ご自身のご商売に少しでも生かしていただけたら嬉しいなと思います。

【久保田氏】

私もそうですが、価格、お金の話っていうのは、何となくタブーで、田舎にいればいるほど、どうしてもそこに抵抗感みたいなものがあります。私どもも地域おこし協力隊の制度を活用して、尖った人から若者やよそ者目線で多くの情報をいただくのでできるだけ聞く耳を立ててやっております。ぜひこれ、いいお話なので参考にいただければと思います。他にどうでしょうか？

【参加者】

お世話様です。離島佐渡島から来ました、佐渡棚田協議会といひます。今年是世界遺産にも登録され、目立っているなどというふうに世の中では言っていますが、佐渡ヶ島は世界遺産の前に、日本で初めて能登地域と世界ジオパークに認定された地域でもあります。全く広報はされていません。僕は長野県の棚田にはもう無限の価値があるし、無限の購買力があると思います。東京からたったの1時間。佐渡島は東京から電車で2時間、船で2時間バスで2時間。となると、もう軽く3、4万円はかかります。うちの岩首昇竜棚田というところは、5 年前から佐渡の真野鶴さんという酒屋さんに、酒米ではなく、食べておいしいのだから飯米を酒にしようと、初めてコシヒカリでお酒を作ってもらいました。しかも名前もうちの棚田の龍のめぐみという

素晴らしいネーミングで、3 年、4 年前は伊勢丹のお歳暮のトップページに見開きになったりしていました。ところが、今言ったような状態ですので、上手くはっていません。もういつ閉めるかといった状態です。その中で会長にお聞きしたいのが、地域の人はみんなが地域活性したいと思っているわけじゃない。駄目なものは駄目になればいいという方もいらっしやる。会長のような人がいないので、もう反発ばかりです。本当に大手企業さんの支援もいただいたりしているし、本当に酒蔵さんの支援もいただいたりしているし、年間 6000 人ぐらいの人は来てくれたりしています。大学の研究者も来てくれますが何も困ってないように言われます。ただ、社長が言ったように、経済的に動くシステムができない。問題のひとつには離島というハンディがあるんです。そこをどうやっていったらいいのか、何か知恵があったら教えてください。よろしく願ひします。

【久保田氏】

佐渡の棚田、私も行かせていただきましたが、どれも素晴らしいかったです。その中でも高校生が佐渡おけさを踊ってくれまして、踊っていただいた方々は民芸の甲子園みたいなコンテストで、日本一になったそうで、その佐渡おけさがすごく綺麗でした。一条乱れぬ素晴らしい踊りをよく覚えています。佐渡の棚田っていうのは、今言われたように不便かもしれませんが、今その不便なところっていうのは魅力があるっていう考えの方が多くのように思ひます。要するに、便利のいいところもありますが、不便さに価値があるという考え方があるような気がします。地域活動の話に戻りますが、私は来る人拒まず、去る人追わずの自然体であります。豊殿地域にはまちづくり協議会というものがありますが、必ずしも一枚岩ではありません。どうしてお前は棚田をやっているんだ、とそういう目で見るともいっばいいます。一方では、棚田はこれからきちんと管理していけないと、景観もそうですが、国土的にも大きな災害にも繋がるという、そういう考え方の人。両方いますよね。ですから、その反対側の考え方の人には、ターゲットは当てないです。私のいろんな話を聞いてくれるような人にターゲットを絞って、それを1本釣りしていきます。狙いを定めたら絶対外さないっていう、そういうことはあるような気がします。ですから、1 回来ていただいた人には気持ちよく働いていただく。棚田というものは、どういうものだっていうことを必ず私は言ひますが、理解していただきたいですから、普通にアルバイト感覚で来るのだったら、来てもらわなくていいということは最初にはっきり言ひます。今やっていたいでいる方がいっばいいるわけではないのですが、そういう人たちは棚田っていうものに対して、自分なりの考え方がある人が来ていただいでいるので、去る人は少ないですね。ですから、最初に嫌なことを言うというのが私の考え方です。もう嫌なことだけ並べて、最後にいいことを一つ言って、それでも来てくださいと言ひます。それで駄目だったら来なくていいというのが基本的な考え方ですね。もうこれは絶対譲りません。他には、いかがでしょうか。

【参加者】

飯田市から来ました。よこね田んぼという小さな棚田ですけど、頑張っております。今一番聞きたいのが、我々も頑張っている、はげかけ天日干しのブランド化とか、あと純米酒用のお米を作ってお酒の製造販売。ほかにオナー制もしてまして、今年 46 組で5年前に比べると5倍以上に増えています。それとあと、米粉を使ってクッキーとか、ブラウニーというチョコレートみたいなものを作ったりして商品化も頑張っています。

一番の問題は地元中心で 100 人ぐらいの守り隊がいますが、端的に言ひますと、岡崎さんとか田澤さんみたいに、プロデュース力とか企画力、そして発信力のある人材がなかなか育たない見つかからないです。そこでいつも中途半端になってしまひます。これはどちらに聞いていいのか。多分この地域も、そこで誰もやる人がいないのではないか。企画力やプロデュース力がないとそこで詰まるはずです。その辺の解決方法なりをお願いいたします。

【田澤氏】

すごくよくわかります。全国各地を見ていても、それで頼ってしまうのが、よくハイエナコンサルと言われる、全然ツーリズムをやったことのない人たちです。国からお金が出るからといって出てきちゃうコンサルみたいな人たちがいますけれど、絶対頼まないでください。彼ら何の責任もないし地域に愛もないから、1 年間の事業が終わるときによく何か地域のことを覚えても、事業が終わってさよならっていう何の責任も負わない人たちです。本当に良いコンサル、例えばその地域出身で自分のホームタウンを何とかしたいみたいな、そういう人たちだったらもちろん良いと思いますけれど、変なコンサルには騙されないようにしてください。また、そういう人たちが作る書類はすごく綺麗なで、騙されやすいので気をつけてください。そういう人材がいないっていうのは、もう本当にこの地域でもその通りだと思いますが、2 つの方向性があるのかなと思っています。私がどうして起業できたのかというと、町がビジネスコンテストを開いてくれたところがきっかけになって、そこで温めていたアイデアをみんなの前で発表できました。そのことによって起業したい人がこの町にいるということが可視化されて、いろんな方に応援をしていただきました。2 年間の専業主婦のプランクがありましたけど、そこからもう1回社会復帰ができて、今こんなふうにな国にも注目してもらえるような事業をやるのができて、今年で6年目になります。地元で起業家を育てるといひ、それはもう町ぐるみでソーシャルビジネスといひか、社会課題をビジネスで解決できる起業家を育てる取り組みは、行政としてぜひ人材育成投資という意味でやっていたきたい一つです。それはビジネスコンテストだけではなくて、創業塾とか実際の資金調達をどうするの、事業を大きくするときどうするのっていうところまで 人材を育てる投資を町と商工会議所などが一緒に取り組むことがすごく大事なことで思ひます。また、短期間で必ず人が育つとは限らないので、足りないものを見極めてアウトソーシングといひか、どうしても足りないものは、いいパートナーを見つけて外から来てもらうことも必要だと思ひます。例えば私も全部自分でやることはできないので、知識のない建築の部分は自分の尊敬する建築士さんにアウトソーシングしますし、デザインは創業からずっとやってきてくれた信頼できるデザイナーさんに自分は出しゃばらずにお願いをします。そういった形で自分たちでここまでできること、ここまで努力すればやれることっていうことと、どうしても駄目な部分は外部委託をする。それが日本人じゃなくてもいいと思ひます。例えば今の時代、海外の文化を、新しいエンターテイメントとして表現する演出チームとかもあったりします。本当に日本にとどまらず、世界という感覚で世界からお客様を呼び込むのであれば、そういうパートナーというのも、もっともっとグローバルになってもいいのかなと思ひます。

【岡崎氏】

話を聞いていてすごく感じたことが、観光のエキスパートです

よね。今こういう話が出ましたが、何となく「いや別に観光やろうと思っないし」という感覚の棚田の皆さんもいたりしませんか？この話があったとはいひえ、ちゃんとしたコンサルの、今みたいなハイエナコンサルじゃなくて、ちゃんとしている人だけけど、こういう話を聞くと、引いていく人いませんでしたか？これが地元の結構リアルなかなと思っいて、もし稲倉の棚田に田澤さんがプレゼンをしにいきなり行って、こうやりたいって言っても、もしかしたら無理かもしれないです。やはり繋がり、繋がり、繋がりという段階的な進み方だと思ひます。最初に酒蔵は棚田に関わることでよって、酒蔵の価値が上がります。良い景観の中でできた酒米で棚田を保全する活動をしている酒蔵だという価値が上がるから、メリットで関わっていく。ただそこもお酒造りの限界です。これからどうしようと、次のステップに行かないということ悩んでいるところに出会いがあって、そこがもっと価値を上げたいと思っ悩んでいるんだけど、どうしたらいいかわからないときに、信頼できる田澤さんに話をしたら、絶対そこへ行かせますよという人が繋がってくる。いきなり何か大事業とか、大資本とかすごいコンサルだっという話じゃなくて、やはり一步一步だと思ひます。最初に市役所職員さんが出せて言った写真があったじゃないですか。最後にかっこいい話をして、すごいうまくいっているふうに話していますけど、所詮ここからですよ。今でももしかしたらすぐこうなるかもしれないと思えるほど危うい道だと思っています。僕たちも。だけどこうならない、本当にまた荒地が増えちゃうこととも背中合わせて生きている中に、でも価値だよねって言ってくれる人が動き出せるところまで 少しずつ許容範囲を広げていく、外部の人を入れていくとか、仲間を増やしていくという、多分一步一步しかできないのではないかなというふうには思ひますので、皆さんと一緒にです。すごい上手くいっているように見せているかもしれないですけど、一緒ですよ。

【久保田氏】

先ほどの写真ですが、最初はですね、岩清水の自治会の皆さんが、自治会だけで これを3、4 年かけて頑張っって今の綺麗な状態にしてくれました。でもやはり岩清水の自治会だけでは駄目で、平成 15 年、2003 年に、岩清水の自治会から私も豊殿地区の連合自治会に何とかしてもらえないかという話が来ました。棚田の保全というのはいいことだし、みんなですりましょうということで、15 年から新たに稲倉の棚田保全委員会っていうのができました。行政 JA、地域、それと神川ソフトボールクラブなんて全く関係ないような人の協力もいただきました。そこから始まって今に至ります。私が4代目の頭になります。そういう歴史を少しずつ少しずつ、いろいろ山あり谷ありで、一番はコロナのときだったですかね。私が事務局長をやっていて、委員長を受ける前の3 年ぐらいが一番大変でした。これは皆さん全く同じだと思ひますので多くは語りませんが、大変だった時代がありました。けれども、おかげさまでいろんな関わり、最後は人みみたいな話になりますが、先ほど過分なお褒めをいただいた岡崎さんからお話をいただきましたが、決してそんなことはなくて、いろんな人に同志といひましょうか、関わって協力していただいたおかげで、今日があるといひことは言えると思ひます。話を戻しますが、棚田保全というものには正解というものは一切ありません。私は何を考えて始めたかといひと、まずその地域の環境ですとか、風土ですとか、歴史、そういう自分

が育ってきた雰囲気ですね。地域にある独特なものを感じながら、どうやってそれを結びつけていけば、棚田に繋がっていくのかを最初に考えました。私達の豊殿地域というのは、上田市の中でも合併が遅かったこともありまして、豊殿村っていうのはいろんな小さい自治会の小さい団体ですが、独立独歩で発言力があるというか、会議等をしますと意見がたくさん出てくる地域です。非常に発信力もありますが、反対方向を向いちゃうと全くやってくれなくなります。でも、大事な棚田を保全していく意義とかを理解してもらってくると、自治連の中できちんと位置づけがなされました。ポイントは、豊殿地区内で稲倉の棚田は、未来永劫保全していかなければならないということが、自治連の中で明確に位置付けられていることです。そのため、役員は責任を持って活動に取り組み、困った時には相談できる窓口も存在します。しかし、どんな組織にも言えることですが、一枚岩ではありません。一夜にして城は築けませんので、地道に少しずつ前に進んでいくしかありません。行政との関わり方や地域においてどのように位置づけられているのか、それが根底にあるように思います。そこを掘り下げていくことで、道が開けていくのではないのでしょうか。

【岡崎氏】

さいごに一つ触れてもよいでしょうか。この宿泊施設の計画は、夢物語ではありますが、現実に進めています。収益化は難しい課題ではありますが、酒蔵は棚田との親和性が高いと考えています。酒蔵の価値向上にも繋がるからです。次のステップとしてこの計画を進めています。これについても、久保田さんがいることで、スムーズに進んでいます。例えば、地主さんとの交渉ですが、久保田さんがつないでくれて交渉に行ける。様々な壁は出てきますが、壁にぶつかるたびに、協力してくれる人がいるので、諦めずに進んでいくことができます。収益化のヒントとしては、オーナー制度が光だと思っています。どのお酒が美味しいかというのも重要ですが、自分が田植えから稲刈りまで携わってできたお酒は格別です。その魅力を磨き上げれば、オーナーは増やせると思います。オーナーが増えれば、重要な収入源となります。今、社会貢献に繋がる活動に関わりたい、応援したいという意識が高まっていると感じます。単なる賛成ではなく、地域や景観を守る活動に携わってみたいという人が増えていると思います。稲倉の棚田には、電線が邪魔だとか、高速道路が気になるといった課題も存在します。しかし、現状の利点を生かしつつ、魅力を磨き上げていきたいと考えています。一緒に頑張っていきましょう。

【久保田氏】

ありがとうございました。なかなか結論の出る話ではありませんが、それぞれ参考となるところを持ち帰っていただければと思います。共に頑張っていきましょう。ありがとうございました。



《資料：第3分科会／岡崎 謙一 氏》

企業も棚田も得するかかわり ～稼ぐ棚田を考える～

『信州亀齢（きれい）』醸造元
岡崎酒造株式会社
代表取締役社長 岡崎謙一

酒蔵紹介

- ・銘柄 『亀齢』『信州亀齢』
- ・長野県上田市 旧北国街道 柳町通り
- ・創業 1665年（今年359年目）
- ・製造量 約500石（小さい酒蔵）

自己紹介

- ・岡崎謙一（旧姓 大島）
- ・埼玉県川越市出身
- ・高校時代はサッカー部（インターハイ出場）
- ・東京農業大学農学部・・・醸造学科ではない
- ・東京都庁（清掃局一環境局）
- ・社会福祉法人勤務（資格：介護福祉士、ケアマネなど）
- ・平成23年9月 岡崎酒造入社

棚田保全の主な課題

- ・負担の大きい農作業
- ・人手不足
- ・補助金頼みの運営



たぶん今日の中で一番大事なこと

- ① 保全団体は民間が投資できる環境作りをする。
- ② 行政は農地活用を促進する。
- ③ 民間は自社ブランド向上のために関わる。（寄付や支援などの慈善活動ではない）

関東信越国税局酒類鑑評会 第1位 ～女性社長で初の受賞～



ドキュメンタリー映画「一献の彼方に」



dancyu 2024.3 「王道の日本酒」



【SAKETIME】日本酒ランキング

《信州亀齢》

全国3位

長野県1位

2024.10.10掲載

信州亀齢 稲倉の棚田産ひとごち 純米吟醸 無濾過生原酒



稲倉の棚田保全委員会の主な収入

- ① 米（コシヒカリ・ひとごち）の販売
- ② オーナー制度の収入
- ③ 教育機関の体験料



絶景のお茶畑



海外のワイナリー



稼いでいる棚田



田澤麻里香 KURABITO STAY 代表取締役

☆観光
☆宿泊体験
☆地方
☆インバウンド



☆付加価値
☆起業家
☆女性活躍
☆働き方

TANADA MORNING 2024.8～9



稲倉の棚田 大作戦



この施設でやりたいこと

- ☆酒米オーナー数の拡大（世界中からオーナーに！）
（現在）120組×66,000円＝7,920,000円
（将来）500組×66,000円＝33,000,000円
- ☆環境にやさしい施設
- ☆災害が起きても人命は守られる施設
- ☆障害のある方が制作したアートの価値創出
- ☆地元産物のブランド化
- ☆職人がプレゼンするディナー
- ☆かまどで炊いたごはんの朝食

「日本の棚田百選」の稲倉の棚田

“景観を守る酒” 棚田保全支える酒蔵



ご清聴いただきありがとうございました。



テーマ：子どもたちが創る棚田のミライ
～アイデア出しワークショップ～

【杵掛氏】
「アソビノ」代表の杵掛瑞穂と申します。「杵掛」という字がとても読みにくいのですが、私は長野県の青木村という、人口が4200人ほどの村の出身で、村には「杵掛温泉」など、杵掛ばかりがいるのですが、かなり珍しい名字で読みにくいですがよろしくお願いたします。私は20歳のときに新卒で農協に就職しています。その後6年間広報担当をしていたときに稲倉の棚田に出会いました。その後、中間支援のNPO法人、最終的には理事長をやりました。実はずっと学生ときからやりたかった保育士という教育現場に着地したという、とても変なキャリアを持っています。私はその社会人経験があったからこそ、子供たちを見たときに、生きる力が少ない現代の子供たちに課題と衝撃を受けて、この「非認知能力」という、よくわからない力を育てる「アソビノ」を2年前に独自で作りました。私は幼稚園の先生という保育士資格と非認知能力育成トレーナーという2つの資格を持っている変な女だと思ってください。よろしくお願いたします。私の簡単な自己紹介ですが、詳しくは後段で行います。「アソビノ」って何なのっていうところですけど、私は社会人を経験してから教育現場に着地したからこそ、1年間でしか子供を見られない、でも人間って成長し続けます。何歳になっても、そこの違和感ですね。要は担任の先生が1年間しか責任を持たないので、目に見える評価みたいなものをすごく大事にします。例えば、箸が持てた、オムツが外れた、算数で50点取れたとか、そういうわかりやすい目に見える評価が、割と日本の教育です。わかりやすいので評価されがちなのですが、でも人間って目に見えない力がすごく大事だと思います。例えば、自然の中でも知恵を出してわんぱくに遊べる力。指示がないと遊べない子が実はとても増えています。そして、やったら怒られることがわかるから、絶対に挑戦しないですね。「先生、これやっていい」って聞いてからやります。だって怒られるからです。困ったときにヘルプの出し方がわからないからです。なぜかと言うと、現代は座っていれば全て成り立つからです。スマホで全て完結するから、段差がない安全な社会を作っているから、子供たちは何もない安全な場所で生きていられるのです。だから、受動的でも生きていける子供たちを私は目の当たりにしました。色々な教育方針でご飯を食べさせる先生がいましたが、ご飯を残してOKっていうわけですよ。農家の子でしたが、机に落ちたご飯があったら、「落ちたよ」と言って、「びっ」って捨てちゃう子がいました。それには結構衝撃で「父ちゃんは農家やっているよ」って思いながら、やっぱり生産現場を知らないからです。私は10年ぐらい前に「かいぶつのだねプロジェクト」といって、スポーツ選手と農家を掛け合わせたイベントをちょっと子供向けにやりましたけど、豚の丸焼き、もう顔全部豚ですよ。豚農家がいる、豚の丸焼きをやりました。私も前日に内臓を塩もみして準備をしました。「この豚生きているの？」っていう子がいました。要は0から1を知らないわけですよ。第一次産業が見えてないから、スーパーに売っているものしか知らないから、生きているのかなって思ったのでしょう。私達が生命について当たり前と思っていることがわからないという、生きる力が薄いという課題を解決したいということで、非認知能力という教室を立ち上げました。これを国では「生きる力」って言い換えて、結構伝わっています。「生きる力」です。学力とは違う力をつける教室を立ち上げました。私はまず人間の根っこにあるのは五感だと思います。人間として、

コーディネーター 杵掛 瑞穂 氏 アソビノ代表
話題提供者 稲倉の棚田保全委員会

見る、聞くとか、触覚、聴覚とか、いろんな五感を育てるには、私は自然体験が一番だと思っています。それを出来るのが稲倉の棚田です。上田市には全国からラグビーを始め色々な種目の学生や社会人のスポーツ選手が集まる菅平高原という素晴らしい場所があります。そこでもキャンプをやっている、火をつけないと飯盒炊飯でお米が食べられないみたいなことをやってみました。自然体験の一環として農業というカリキュラムがありますが、それを稲倉の棚田でやらせていただいています。なぜ自然体験かという、自然はコントロールができないからです。例えば、前回稲刈りをしたのですが、実は雨で1週間遅れました。その日にやりたいスケジュールが全部ずれました。こればかりはコントロールできないじゃないですか、私達は生かされているということです。当たり前のように子供たちもそうですが、「兄ちゃん虫がいる」という当たり前という自分たちがコントロールできない環境はすごく大事だと思って、この場所を起点にさせていただいています。そして私は農協職員時代、青木村に住んでいる村人だったにも関わらず非農家でした。軽トラもなければ稲を育てたこともなく、「代かき」を知りませんでした。広報担当だったので記事にしなくてはいけないのですが、「代かきって何ですか？」っていう普通だったらブチギレられるような質問をしました。それを当時の稲倉の棚田保全委員会の委員長が丁寧に教えてくれて、私は育てられました。そして稲が育つという、私達の命の原点をそこで学ばせていただきました。それは稲が育つ過程だけではなく、そこに関わる人達は人間性、まさに非認知能力を学びました。そして、農協時代は久保田さんが農協の理事をされていました。現在は保全委員長をされている久保田さんとのご縁もあり、うちの子供たちも関わらせていただいています。軽く自己紹介をしましたが、本日のテーマは「子供たちが創る棚田の未来」ということです。棚田だけではなく農業全体にかかわりますが、全ての課題は担い手だと思っています。それは他の産業でもそうだと思います。子供の教育ってめちゃくちゃ時間がかかります。例えば明日これをやったからすぐ育つというものではないと思います。皆さんが働かれている職場で「なんだよ、新人」って思ったことがあるのではないですか。けれども、人間が育つにはたいへん時間がかかる中で、今私達が20年後のことをしていかないと、20年後に育つはずの社会人が育たないです。それなので今の現在地、現実はどうなのかという話を、今回お二人にも協力していただきながら現在地を見つけ、どこに向かっていこうかという未来について話せたらと思っています。この「アイデア出しワークショップ」っていう、このワークショップという言葉ですが、最近やっと聞き慣れているかと思います。ちょっと聞き馴染みのない方もいらっしゃると思うので、ネットで検索した言葉でお伝えします。参加者の主体性を重視した体験型の講座になります。体験型の講座、要は座って聞いて90分経てばそれで終わりではない。体験型ですから自ら言葉を出すかもしれないし、考えるかもしれない。何かを書くかもしれないし、それが体験という表現だと思います。グループ学習、研究集会などを指す言葉として浸透しているということで、うちの教室は全て体験型です。お手元に「アソビノ」のチラシがありますが、体験でしか人は育たないと思っているからです。もちろん座って講義をして頭に入れるのもすごく大事です。私は認知能力も大事だと思っています。だけど、皆さん生きていて、不思議と

胸に落ちる瞬間ってないですか？私は親のありがたみを初めて知ったとき、実を言うと初めて給料をもらったときです。お母さんとお父さんへ本当に感謝していますけれども、やっぱり反抗期もあって、働く苦勞がわからなかったです。あのときの顔面は本当に少なかったです。たしか10数万でした。1年目の最初の1ヶ月、こんな頑張ったのに何かいろいろ引かれて、こんなに少ないんだと思いました。けれども、こんなにいただけると思ったときに お父さんとお母さんはこんな苦勞をして私を育ててくれたと思いました。こんな親不孝を知るのに20年かかっています。多分あのときの経験がなければ結びつかないです。だけど、頭では親に感謝しているけど、本当に胸が落ちる瞬間って、もしかしたら子供が生まれたときかもしれないし、親が亡くなったときかもしれないし、本当にそういうものだと思うてほしいです。だけど、そのときに胸に刻まれる体験とか経験がなければ、そこには絶対結びつかないと思っていて、子供たちには触る、食べるなども全部あらゆる経験を体験型の教室でやっています。これですね、自分で考えて自分で気づいて湧き出たものだからこそ行動するのです。人にやらされたことはあまり続かない。けれども、自分で大事だと思ったら絶対継続します。それなので、この場は私が指導できるような立場ではありませんが、自分達で生み出す分科会ということでワークショップ形式にさせていただきました。本日の流れです。全部で6点あります。1番、チームでの自己紹介ワークをこの後させていただきます。2番目、インプットですね。これは稲倉の棚田を事例にした学びを、この3人で提供させていただきます。3番目、アウトプット、考えを出す。これは皆さんでやっていただきます。4番目、本格的なワークショップです。そして5番目、アクションカード記入。これは時間の都合でできるかどうか不安ですけど、まとめという形になります。最後は今日のゴールです。目に見える成果と目に見えない成果の二つがあります。非認知能力は、目に見えない力なので、あえて発表の場を持ちませんが、目に見える成果というのは、後ろにあるグループごとの模造紙にまとめて発表していただくのがゴールです。ここは昼食会場になりますので、ランチに来た人たちに見てもらえます。とても良い成果になるのではないかとと思っています。そして、目に見えない成果です。ひとり1つ、自分の中の正解を行動目標として持ち帰ってください。小さくてもいいと思います。本当に小さいステップでいいので、何か得たことを持ち帰って実行していただくということが今日のゴールです。そして約束があります。このゴールへ到達するために必要な約束です。時間を必ず守ってください。いいですか？ 時間は有限です。本当に私は明日死んでもいいなと思って生きていますが、今回はどうしてもタイムスケジュールがあるので、時間を必ず守ってください。タイムキープはこちらでしますので安心してください。そして、2番目、否定はしないこと。これは評価とか判断をする場ではないので、全て答えがありません。本当に子供たちにも言うのですが、子供達って正解を探そうとします。「みいちゃん、これやっていいの？」○か×かみたいな、頭の中に○と×が、わりとあります。でも世の中って私は8割ぐらいがグレーゾーンだと思っていて、○と×ははっきりありますが、結構な割合でグレーゾーンがあると思います。意外と正解ではなく最適解と呼ばれるものがこのエリアにあります。このような場で言うてはいけないのですが、行政の仕組みには意外とグレーゾーンがあったりしませんか？ 皆さんが手続き交渉をして、意外と駄目だったっていったものが覆えたり、意外とこのグレーゾーンっていうものがあると思っています。それ

なので、○か×かというよりも、このグレーゾーンの中に最適解が私は眠っていると思います。正解があったら、世の中の農業政策とか政治はもっとうまくいっているはずだと思います。色々な問題がありますが、正解がないからこそ苦しいし、何かうまくいかないという課題が誰にもあります。稲倉の棚田にも勿論あるし、それを今回は○か×かの正解に振り分ける場ではなくて、最適解、今だったらこれができるのではないかを見つけ出す場ということで、時間と否定をしないということを守っていただきたいなと思います。それでは、本日の流れでチームでの自己紹介ワークをしたいと思います。「自己紹介ワーク」と言ったのですが、私が今からやりたいのは、「他己紹介」というものです。他己紹介を知っている方、手を挙げてください。お一人しかいない。ありがとうございます。「他己紹介」という言葉を聞いたことがないという方？ 多いですね。あえて自己ではなくて、「他己紹介」というものは、2人ずつ横同士がペアになって、自分ではなく相手がどこから来たか質問してみてください。相手の所属先でも何でもいいです。どんな立場というか、何県から来たでもいいです。2つ目は、所属先。そして3つ目は終了時に何を得ていたい。というこの3つの質問を掲げておきます。メモはOKなので、隣の人の1・2・3を聞き取ってください。いいですか。わからない方いらっしゃいますか？この机がちょうど2・2・2になっているので、今から2分間時間を取りますので、隣同士で聞き合ってください。 どうぞ。

【杵掛氏】
はい、終了です。ありがとうございます。では続いてインプットということで、インプット、学びをちょっと進めていきたいと思います。今日のワークショップは、色々話したいことがあります。「棚田」だけでは何といえますか、とてもふふふわするというか、ちょっとあれもいいこれもいいって、意外と何にもならないと思います。抽象的過ぎてもいいけないので、今回は稲倉の棚田を事例に話したいと思います。稲倉の棚田を事例にしたら、数字的なデータもありますし、自分なりに転換してほしいと思っていて、皆さん「岡目八目」って言葉ご存知ですかね？ 岡目八目、例えば野球とかを見ていて、「どうしてバッターにあれしないんだよ」みたいなときはありませんか？ 何かそういうときって、やっている人を俯瞰しているからこそ、全体が見えているのです。それを岡目八目って言いますよね。『囲碁』とかで「何であそこにやらないのだろう」って、この立場にいるから見えるんですよ。稲倉の棚田のことを皆さん、今日は岡目八目で俯瞰してみてください。だけどテーマは稲倉の棚田です。なぜかって言ったら、課題がそれぞれに違いすぎるんですよ。だって、風土も違えば文化も違うし 面積も違います。それをどうこう話してもしかたないので、今回は稲倉の棚田の実態をベースとして話してください。その代わり、皆さんは多分あだこうだ言える立場だと思います。なぜならば、客観的な立場にいるから。だけど、事例から逸れないで欲しいです。自分たちのアイデアを持ち込むのはいいけど、今日は稲倉の棚田の未来をどうしたらいいかっていう話をしてください。よろしいでしょうか？稲倉の棚田の概要については、上原さんに作っていただいた、この歴史の概要が綴じられているはずです。その1枚を二人で見てくださいたいのと、ほかにパンフレットもありますね。開いていただくと活動内容が載っているので、写真で見てもわかると思います。この稲倉の棚

田のパンフレット、そして数値的なところは、文章になっている方の1枚を見ていただきたいと思います。稲倉の棚田の歴史のところにもありますが、はっきりした歴史は分からないということが書かれています。そこで上原さんお願いします。

【稲倉の棚田の保全委員会 上原氏】
それでは私の方でわかる範囲で、皆さま方にご説明したいと思います。これは私が色々な資料から抜粋して作ったものですが、わからない部分もありますのでご容赦願いたいと思います。まず歴史的には、はっきりしたことが文献では出ていませんのでわかりません。ただ、元禄時代、1690年頃から開田されたと考えられているという部分です。しかし明日もし棚田の方へ行っていた方がおられれば、そこでまたご説明いたしますけれども、6から7世紀頃の横穴式古墳群もあります。これが棚田全体であぜのところに3から4個あります。石で作った「ほこら」みたいになったものがあります。それは6から7世紀頃だから、この頃からの人々の営みがあったのではないかというふうに考えられております。歴史的にはそんなところでございます。概要としましては、棚田百選に登録されている範囲が、標高640mから900m。この間に面積が30ヘクタールで、水田枚数が780枚です。ただ、現在耕作している面積につきましては、標高640mから750mの間で耕作しております。面積的には30ヘクタールのうち8.5ヘクタールです。作付面積としては3ヘクタールで、ここにも書いておきましたけれども、残りは畦畔。とても高い畦畔がありますので、その場所とあと遊休農地。遊休農地につきましては日陰でお米が作れないところと、水利条件が悪いところ、これについてはお米を作っておりません。ただし、草刈り等の管理を行っているので、遊休農地という形に分けてあります。あと、棚田保全委員としては全体で約100名。ただし、実働隊は20名ぐらいしかいないのが実状です。ただ100名というのは登録してある人数で、イベント等がある場合に大勢の人が必要になります。その方にお声がけして出席していただくという状況です。次に棚田オーナーにつきましては、平成18年より始めておりまして、令和5年度、昨年は棚田の米オーナーが95組、酒米もやっておりますので、酒米のオーナーが80組の計175組の受け入れをいたしました。今年につきましては、両方合わせて239組の受け入れと、年々増えてきております。ただ、あまり増えても保全委員の方が少ないので、色々なイベントをやったときに対応できないような状況も生まれてきます。これからどうするかは今後の課題という形になっております。棚田の年間行事につきましては、これから杓掛代表の方からまたご説明いたしますので、よろしく願いいたします。今後の課題としましては、皆様方のところも同じかもしれませんが、作業の担い手の確保と後継者への引き継ぎをどうするかというところが、これからの課題になってきております。やはり担い手というのは、会社をリタイヤした方が来ていただいておりますので、なかなか5年10年というところが難しいところかなというふうに思っております。ただ、若い方も土曜日、日曜日は棚田での農作業が好きだという方に来てもらっております。こういう方が増えていけばいいなというふうに私どもは考えております。またその辺のところ、皆さん方のご意見があったら伺いたいと思います。よろしく願いいたします。以上、簡単ではありますが説明とさせていただきます。

【杓掛氏】
ありがとうございました。また、質問は後で受けますので、概要でございました。今、上原さんがおっしゃられなかったのも、あえてお伝えしますと、2022年の農林水産祭のむらづくり部

門で、最高位の「天皇杯」を受賞されたということで、地道な活動が今認められつつあるということだと思います。保全活動としては稲倉の棚田保全委員会が起点になっていますが、実は「まちづくり協議会」とも連携していらっしゃいます。地域での生活拠点として、中心に置かれているところもあって、いろんな協議会を越えて繋がっています。単独でやるよりも自治体を含め多面的に地域を巻き込んでいます。そのようなイメージを持っていればいいのかと思います。連携している企業さんもあって、本日第3分科会で講師をされている岡崎酒造さん。酒米を作ってかなりブランディング化が進み評価されています。ほかにも地方銀行さんやアリオさんなど、色々な業種の企業とパートナーシップ連携を結んでいます。さらに研究分野では長野大学さんや信州大学さんも加わっているという構図も申し添えておきます。パンフレットにオーナーのことが書いてあったと思いますが、エリアオーナーとサポーターとファンという三つの仕組みが、稲倉の棚田にはあります。三つのプランがあって、協議会の実行委員会の中に入る以外にも、一般の人たちや都会に住む方々も、エリアオーナーとサポーターとファンという、この三つの段階があって、エリアオーナーっていうのは年間11万円で面積5反、500平方メートルですね、60キロのお米がもらえます。2番目の棚田サポーターというのは年会費3万8500円で一緒に農作業体験ができて、その育てたお米30キロがもらえます。棚田ファンというのは年会費1万1000円で900gのお米がもらえます。気軽にやりたい方とか、少し協力したいという方用に、この三つのプランを作っていると思います。それ以外にも棚田の下に豊殿小学校がありまして、ここでも田植えやかかし作りには保全委員会のメンバーが出向いて指導しています。また、子供たちが棚田に来て、棚田にいる生物のカードを作ったりしています。裏返すとその生態が載っているカードです。ほかには早乙女の衣装で御田植祭をしたり、開会式にご覧いただいた映像にもありましたキャンプをしたり、ほたる火祭りはもう10数年もやってらっしゃいます。ししおどし、かかし祭りとか、さっき言った酒米で造ったこれが信州亀齢というお酒です。今年からやり始めた「棚田モーニング」といって、高級御膳を棚田でモーニングとして味わうというイベント。こちらにも岡崎さんが入ってやられているそうです。では稲倉の棚田を紹介しましたが、何か聞いてみたいこととか、ここが分からなかったという質問はありますか？

【参加者】
保全委員が大勢いますけど、どのようにして登録をしていますか。そして、登録する人数が多いと色々な面で溢れてくる人数も多いと思います。それをセーブしないといけないと思いますが、その登録する人員の確保をどういうプランを立てているのか教えてください。うちも色々な事業に関してプランを立てていますが、なかなか皆さん忙しくてプールできないのが現状です。どうしたらそういうきちんとタイアップができるのかなと思っています。ちなみに、私のところは来年開催予定の別府です。皆さん来てください。今月の23日に幼稚園と小学校から250名ぐらいの子供たちが来て稲刈りをします。父兄をどうやって呼び込んだらいいのか。また、忙しいことを理由になかなか集まりませんが、どのようにコンタクトをとればよいかをお聞きしたいと思います。

【稲倉の棚田保全委員会 新村氏】
はい、私達は知人の紹介や色々な方を一旦紹介され、連れて来ていただくのですが、そこでLINEを通して保全活動の案内を行っております。「今日はこういった作業があります。何日から

何日まで是这样いった御田植祭でこれだけの人数が必要なので、ご参加ください」ということでLINEを使って要員の確保をしております。

【参加者】
ありがとうございます。LINEは、私もパンフレットで出しますが、なしのつぶてでなかなか来ないのが実態です。ありがとうございました。

【稲倉の棚田保全委員会 上原氏】
ほかにも年に一度、棚田に興味のある方は来ていただいて面接を行います。ただ、来てもらちょっと苦勞で駄目だという方も何人かおられますけれど、そんな形で募集しております。

【参加者】
稲倉の棚田は赤土ですよね？ お米が美味しいですよね。
【稲倉の棚田保全委員会 上原氏】
はい。とても美味しいです。私は自分の家が農家なもので、うちのお米しか食べたことないですが、とても美味しいと聞いています。

【杓掛氏】
小学生の方の巻き込みは大丈夫ですかね？
【参加者】
毎年決まっていますので、幼稚園と小学校、5年生と6年生と保育園と大体毎年こうやっていますので決まっています。来てくれた小学生にお米をあげています。5年生、6年生に30キロ。会長 棚田の米美味しいよと言われます。

【杓掛氏】
質問に対して解決したということでございます。今の質問ありがとうございます。とても良い質問をしてくださって、そもそもは集客の課題だったと思いますが、2点言ったので、要はやっているけど人が集まらないということを多分伝えてくださいました。子供も大人もってところで、多分ここに書いてあるように、登録人数は100人いるけど、実働隊は20人ですと上原さんがおっしゃっていたように、稲倉の棚田も同じ課題のはずです。今回この図を出したのもそうですけど、ある意味地域を巻き込んで強制的に参加している人はいるはずですよ。多分稲倉の棚田も行政とかJAが絡んでいるので、集客の維持はどことも同じ課題です。だから、今回のワークショップでこれについてアイデアを出してほしいです。今からワークショップを始めますが、上原さんと新村さんが入っていただけますのでそこで質問もできます。ご安心ください。非認知能力、ちょっとわかりにくいことなのでもう1回説明すると、人と関わる力とか、自信とか、自尊感情などを非認知能力って言います。例えば、私とこちらにいらっしゃるお父さんは、どちらの方が意欲ありますか？と今聞かれてもわからないですよ。お父さんは座って聞いているだけでも、私よりももしかしたら意欲があるかもしれないですね。それは測れるものではありません。この目に見えない能力を非認知能力といいます。認知症って言葉、皆さん多分わかりますよね。認知症というのは、イコール暗記力のことです。要は暗記できない、覚えていない。ご飯食を食べたことを忘れてしまうなど、認知の衰えのことを認知症と言いますが、要は暗記できる力とはまた別の心ですね。心のチカラです。「アソビノ」は講師陣が全員プロフェッショナルで、専門分野の知識や技能を有しているので、決してゼロではありませんが、認知能力と非認知能力の比率は大きく異なります。現在、日本の小学生は学習塾に通うなど、学力向上に多くの時間を費やしていて、非認知能力を育む時間は4年生の場合、年間で250時間程度しかないとされています。例えば、大谷翔平選手の

2010年に書いた夢ノートは有名ですが、このノートは9項目に分かれていて、その中の赤い部分、つまり人間性や思いやり、挨拶、ゴミ拾い、運といった項目は全て非認知能力です。大谷選手は技術的な面も非常に高いレベルですが、このように非認知能力も重要視していることが分かります。非認知能力は、花が咲くまで分からないように、目に見えないものです。土を耕すという行為も、非認知能力の一つです。後で詳しく説明しますが、時間があれば、非認知能力に関する裏付けとなる研究についてもお話しします。ノーベル賞を受賞した学者の研究によると、非認知能力は幼少期の10歳までがピークであり、この期間に育むことが重要です。東大への入学は親の年収にも直結すると言われています。私としては、家庭の所得や発達障害の有無はあまり関係ないと考えていて、今の子供たちこそ、非認知能力を育む必要があると考えています。なぜなら、世の中は不条理であり、その状況を最適化して行動できる力、日本の食料自給率が年々低下している現状、海外での戦争が現実化している中で、食料や資材を輸入できる知恵や交渉力、AIが進化していく中で求められる課題解決能力、挑戦心など先行き不透明な時代に対応できる柔軟性、自発的な能動的な思考力、行動力などを子供たちに身につけさせたいと考えています。稲倉の棚田で撮影した写真があります。これはコロナの時期に屋外でマスクをして田植えをしている様子です。怖いイモリかヤモリを捕まえて、怖がっている表情をしています。この子は命の重みを理解している瞬間だと思います。自己肯定感の低さについては、内閣府が発表しているデータがあります。日本の子供たちの自己肯定感、諸外国と比べて明らかに低いという結果が出ています。そのため、自殺率が高いのではないかと懸念されています。頭で考えることも重要ですが、心の見えない部分も大切です。「アソビノ」では、命の授業、サイエンス、食育、マネリテラシー、子供の株式会社設立など、様々なカリキュラムの中で、農業も学んでいます。子供たちの変化は数値的にも表れ始めており、有名企業や地元企業、地元大学と連携して活動を行っています。農業、特に棚田での活動を通して、子供たちの非認知能力を育てています。11月からは、東京校をオープンし、東京の子供たちに田舎で遊ぶ価値を感じてもらいたいと考えています。交流人口を増やすため、クラウドファンディングに挑戦しており、あと2万円ほどで200万円に到達します。非認知能力を育成する鍵は、自然の中にたくさんあると思っています。稲倉の棚田との相性も良く、親和性が高いです。しかし、課題もあります。「棚田は大切だよ」「稲倉は大切だよ」といった言葉だけでは、子供たちにとって無意味です。体験を通して、心に刻み込むことで価値が生まれます。教育は時間と労力を要する地道な作業です。しかし、子供たちの変化は確実にあります。例えば、田んぼの中に、「やだ」と言って、ずっと田んぼに入らない子もいました。普段から触ることに抵抗がある子で、触れることを拒否する子もいます。しかし、他の子供たちが全員田んぼに入っていくのを見て、楽しくなったようです。1年目は10分だけ田んぼに入ることができました。それで2年目に何が起きたかということ、新しい子が来たのですが、その子が困っているのを見て、「入れるよ」と言い、先に入ってその子と手をつないで田んぼに入っていました。これは、1年間の棚田体験だけでは生まれない、心の変化です。「アソビノ」の様々なカリキュラムを通して、リーダーシップを育む中で、子供たちの心の変化を目の当たりにしました。今では、その子

は私よりも積極的に稲倉の棚田と触れ合っています。虫にも触れるようになり、先ほどの写真のイモリかヤモリかわからないと言っていた写真についても、「これ何？」とよく聞いてきます。私は絶対に答えません。「知らない」と答えます。自分がそうであるように、子供たちの記憶に残らないものもあるからです。イモリやヤモリは、場所によって呼び方が違います。私は保育士をしていたので、子供たちの体温が気になるのですが、イモリやヤモリを触ると、お腹や足が火傷のような状態になることもあるでしょう。そういった知識を、あえて子供たちに教えないようにしています。「何だろうね？」と聞いても、「何だろうね？」と答えるだけです。そのまま放置すると、何も分からずに終わってしまう子もいるのですが、稲倉の棚田の保全委員会の方々は温かく、子供たちに知識を付け加えてくれます。「何かわからないから、これ調べてみよう」と、子供たちを誘導してくれます。言葉かけは非常に重要であり、稲倉の棚田は子供たちの学びの場となっていると感じています。「一緒に聞いてみよう」「何だろうこれ。みいちゃんもわからないよ」と言いながら、「でも、こうなっているね」と、一緒に気づきながら体験をしています。稲倉の棚田にも同じように課題はあります。先ほどの集客や巻き込み方の話もそうですし、やっぱり教育は本当に時間がかかりますけど、やらないと終わってしまう。体験だけでなく、どう伝えられるかというところで私が思っているのが、子供の巻き込み、実は裏にあるのは親なんですよ。やっぱり私も農協に行ったときに思ったのですが、子供の食を握っているのはかあちゃんです。これだけは間違いないです。全ての家庭の主導権も母親がもっています。お父さんは子供がやりたければのように、決裁の権限があるお父さんに確認はしますが、お母さんは日々子供の教育をどうにかしたとすごく考えています。何を食べさせたいか考えているのもお母さんです。ただし、世の中には私もそうですが、便利とか安いというものをキャッチしがちです。衣服を購入する場合でも、便利さや安価なものを求める傾向があるように、食育においても同様のことが言えるのではないのでしょうか。食育は非常に重要な教育です。地域のものを食べることで、そこに対価を支払うことの大切さを、子供たちに教えるのは、お母さんの教育が大きな役割を担っていると思います。体験には、お母さんやおうちの方と一緒に親子参加もございますので、子供を介して親御さんをどのように巻き込んでいくかというテーマも、先ほどの質問の中にあったのではないかと考えています。本日は、皆様と共通の課題をどのように向き合っていくか、答えというよりも最適解を見つけていただければと思います。どのように向き合っていくかを、皆様でアイデアを出し合ってください。答えは簡単に見つからないかもしれませんが、言語化はできると思います。キーワードなどを用いて、言語化していきたいと考えています。質疑応答は後で行うので、アウトプットに移りたいと思います。今から、4 分とりますので、自由に各グループで意見交換してください。どうぞ。

【参加者】
全員の意見を聞き取れなかったですが、こちらで出た話としては、やはり棚田の管理、現状の厳しさとか、これからの担い手をどう確保していくかという意見が出ました。また、子供たちが体験するときに、各学校機関が公立とか私立によって、対応の難しさが出てきたりする。また、行政の交付金による支援などの話が出ました。

【沓掛氏】
ありがとうございます。では、次のグループ。
【参加者】
こちらでは先程周知の話がありましたが、LINEなどで連絡を取り合っても、高齢の方々だと機械操作が難しいこともあるだとか、自治体と連携して周知もしているが、決まった媒体で周知するとある程度決まった人しか来ない。そこを超えた人たちをこれから周知していくためには、どうしたらいいかという意見が出ました。
【沓掛氏】
ありがとうございます。では、次のグループお願いします。
【参加者】
どこの棚田も作業の担い手の確保とか、後継者の問題は共通で、誰が今後そういう組織を引っ張っていくのかという意見が出ました。今回稲倉の棚田さんの実績を教えていただいて、オーナー制を多段階に分けているとか、棚田米作りの場ではあるが、それを中心に色々な活動を行うところは、先進的だなといった意見が出ました。
【沓掛氏】
ありがとうございます。これでいよいよ次世代に繋げていくためには、稲倉の棚田は何ができるかを、グループで話し合ってください。結果として、最終的にここの部分だったらうちでもできるということがあれば、持ち帰っていただきたいなと思っています。一昨年から生まれた稲倉の棚田と「アソビノ」の繋がりは、本当にまだまだ入口です。事例をもとに、参考にできるかどうかはわかりませんが、次のステップとして生かしていくためには、自分だったらどうするということこそまずは意見やアイデア出しをしたいと思います。完璧な事例じゃないと思います。だからこそ「アソビノ」も稲倉の棚田も可能性があるとっていて、自分のフィールドならどうするか、何ができるかを意見交換しながらブラッシュアップして自分ごとに転換してください。最終的にはこの模造紙を仕上げていただきます。では、アイデア出し競争を今からしたいと思います。アイデア出し競争です。そこに付箋とマジックがあるので、それを出していただいて、人・物・事の三つの側面、さっき言っていたLINEの扱い方の部分、それは人であったり物であったり事であって、いろんなテーマの課題があると思います。こんな課題があるでもいいです。とにかく今出た感想やアイデアを出してください。これは実現できるかできないかに関わらず、とにかく課題とか感じたことを言葉にして出してください。これは中身の質ではなく、あくまで数です。数が多いチームを勝ちにします。今日の約束は時間を必ず守ってください。否定はしないでください。アイデア出しは5分間やりたいと思います。

【沓掛氏】
ありがとうございます。続いては、今出た意見を人・物・事の三つのカテゴリーに振り分けてみたいと思います。これは模造紙を使って、必要なら書き込んでもらってもいいです。人だったり物だったり、かぶるところも多分あると思います。さっきのLINEの話も、LINEっていうツールはものですが、高齢の方には難しい人は人もいます。そういうかぶるものもあると思いますが、かぶっているものは真ん中に置いてもらってもいいし、その他のカテゴリーを作ってもらってもいいので、自由にカテゴライズしてみてください。そこからまた俯瞰して

みて、見えたものを肉付けしてもらってもいいです。これを7分ぐらい取りたいと思いますので、やってみてください。どうぞ。

【沓掛氏】
時間になりましたので、人・物・事の振り分けを終わりにします。ありがとうございます。続いて皆さんの発表が今回のゴールになりますので、何かここでまとめていってほしいです。例えば集客でもいいし、何か一つ課題のストーリーができるはずです。例えばLINEが課題だっているところを着目したグループは、課題解決するためには、これをこうしようとか、これをもっと良くするでもいいです。ほかのアイデアから出てくることもあるはずです。人・物・事の何か一つに焦点を当てて、その課題を解決するためには、どういう導きが必要だっているところを話し合ってほしいです。最終的には自分たちのチームは、こういう課題解決と、こうした手法、こういったアクションが必要だと思いました。というところまで発表してほしいです。答えを見出す会ではないので、それが正解ではなく何かが見えてくると思います。皆さんのアウトプットの仕方がグループごとに違うので、何かテーマを決めてください。それを8分ぐらいでまとめて発表にします。

【沓掛氏】
はい、ではそろそろよろしいでしょうか。それではグループごとの発表を聞きたいと思います。それではグループ1から順番に2・3・4と発表いただきたいと思いますのでよろしくお願いします。

【参加者（グループ1）】
我々のところは、子供たちについて多くの意見が出ました。物・事・人では、一連のイベントを考えました。まずモノでは、今SNSを若い人たちを中心に色々な人が見る機会が多いので、LINEを使ったり、あとはTikTokですね。ちょっと短編の動画を作って、そこでまず収益を得てからイベントを開催する。コトでは餅つき大会とか、焼き芋を作って楽しんでいただいて、その流れで最終的にイルミネーション。棚田でペットボトルにライトを入れ、そこに願い事を書いて夜まで1日かけて楽しんでもらう。来てくれた人や子供たちが主催者側のスタッフさんたちと交流しながら、棚田を楽しんでいただきたい。というまとめをさせていただきました。

【沓掛氏】
素晴らしい。グループ2代表の方をお願いします。
【参加者（グループ2）】
我々のグループは最終的具体的にはたどり着けませんでした。意見の多くは人と事に関する内容が多くて、最初に話があった担い手や後継者の問題のほか、現状の管理していく体制の問題です。中山間地域の棚田の保全は厳しい状況にあることを全員で共有し、わかり合うことができました。それを今後どうやって改善していくかいうところで、やはり地元の人だけではもう大変なので、色々な団体、企業や行政と連携していけるような仕組みを作って、金銭面や人手をカバーしていけるようにいく仕組みが重要だということを共有したところで時間となりました。

【参加者（グループ3）】
私たちのグループでは、人を集めるにはどうしたらよいかをテーマとして話し合いました。棚田へ足を運んでもらうには、

どうしたらよいかということですが、来ていただいても、例えばトイレがない、駐車場がないでは、せっかく県外から来ていただいても滞在しにくいと思います。まず、周辺環境の整備が重要という話になりました。また、可能であれば道の駅や温泉を作るなど、観光地化するイメージです。そんな具体策でまとまりました。以上です。

【参加者（グループ4）】
我々のグループでは、棚田に人を呼びたい。どうせやるなら苦勞なことを楽しみにできたらということで、当たり前のことで少し工夫することで、もしかしたらイベントになるのではないかと考え方です。グループの中で出た事例のひとつが、蝶を復活させる取り組みがありました。ほかにも山口県長門市の本郷棚田さんでは、草刈を大会イベントにして、綺麗に刈かれた人には綺麗にできたで賞とか草刈正雄賞とか、そうした賞を作っていると話を伺いました。答えは出ないですが、安全性などを考えると、なかなか答えは出ないですが、まずはそういう活動をやってみようというのが、こちらのグループのまとめです。以上です。

【沓掛氏】
素晴らしいですね。おそらく1と4のグループはソフト面の話し合いだったと思います。2と3のグループはハード面でした。両方とも大事なことだと思います。ハード面で言うと、ここの会長の久保田さんは県の職員をしていた方で、国の補助金を上手に活用してトイレなどもその一例です。先程協議会の図も出しましたが、やはり強制力も大事です。ハード面の仕組み作るというのは、2・3グループはその通りだなと思います。かといって血肉が通わないとうまく循環しないと思います。これだけやり続けるのはハートフルな人たちがいないといけないので、ソフト面のこのアイデアもとてもいいと思いました。多分両方が大事で、すごく綺麗に分かれたテーマだったというのが私の総括です。本当に素晴らしいかったです。もう時間が来たので終わりにしますが、気づきを行動に移してほしいというこのアクションカードを1人1枚用意しています。今日は書く時間がないですが、今日の午後と明日のフィールドワークで、ぜひアクションとして書き込んでいただきたいと思います。まとめとしては私の中でもソフトハード両方とも大事。私は子供たちに「お米には七つの神様がいます」と言っています。その中の1人は農家さん。絶対に「食」だけは本当に大事にしてよと無力な私ですが、授業で伝えています。だから体験をさせたいし、「米だけは無駄にはしてはいけない。食べることが自分の命だから」と子供たちに伝え続けたいと改めて思います。ということで、もしお二人何かありましたらお願いします。

【稲倉の棚田保全委員会 上原氏】
今日は大変ご苦勞様でした。こんなに真剣に皆さんがやってくれるとは思いませんでした。私どもの稲倉の棚田の事例を皆さんに聞いていただいて、この中から、たとえ一つでも持ち帰っていただければいいなと思います。もっと聞きたいことがあれば、私どもの方にご連絡いただければ、詳しい内容等もお伝えできるかと思いますので、よろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。

【沓掛氏】
本当に本日はありがとうございました。

【全国棚田サミットin上田】

子どもたちが創る棚田のミライ
～アイデア出しワークショップ～

 代表 沓掛瑞穂

自己紹介

長野県青木村出身。
新卒で信州うえだ農協に入組後、
NPO法人理事長を経て、保育士になる。
2年前に子どもの非認知能力を
育てるアソビノを立ち上げる。
保育士資格・幼稚園教諭二種免許、
非認知能力養成トレーナー保有。あそびはまなび。



 代表 沓掛瑞穂

社会人を経験してから教育現場に着地したからこそ、見えたもの

- ・1年でしか子どもを見取らない
- ・目で見えるわかりやすい指標でしか評価しない

現代の子どもたちの

- ・自然の中でも指示がないと遊べない（0から生み出すことの弱さ）
 - ・やったら怒られることがわかるから挑戦しない
 - ・困ったときにはヘルプの出し方がわからずただ止まって待つ
 - ・ご飯は残すのが当たり前、机に落ちた食べこぼしは床に捨てる
 - ・スマホ「ビッ」とするとなんでも買えると思っている
 - ・生産現場を知らない（丸焼きにされた豚が生きていると思っている）
- etc・・・

という生きる力が薄い（＝経験が少ない）という課題を解決したい。

勉強を教えない塾



非認知能力（＝学力ではない力）
を育むことに特化した教室

非認知能力とは？

「認知」をわかりやすく一言で言うと
暗記力のこと。（認知症）



いわゆる学校のテストなどでは測れない
目に見えない能力のこと

- ・IQに対しEQ（心の知能指数）と言われたり、
生きる力、人間力、社会的スキルと言われたりする。
- ・大企業の就職採用試験では、一般的な筆記試験だけでなく、マシュマロタワーなどの非認知能力をみる試験も積極的に取り入れられている。

非認知能力とは？

例えば、

- コミュニケーション力（人とやりとりする力）
- 思いやり・共感性（他者の立場や思いにたてる力）
- 忍耐力（がまんする力）
- 自信・自尊感情（自分をプラスに捉える力）
- 意欲（前向きにがんばろうとする力）



家庭の所得が高い・低い、発達障がいがある・ない、などはあまり関係ない。
すべての子どもたちに、今だからこそ養える底力を。

正解を探そうとする子どもたちに、世の中は不条理であり、その状況の最適解を見出し、行動できる力を。
日本の食糧自給率は年々下がり、戦争が起こっている世界で、将来食糧や資材を輸入できる知恵や交渉力を。
現在の仕事の半分以上がAIに代わるといわれている中、イノベーションに導けるような課題に気づき、チームで解決する力、試行錯誤を繰り返す挑戦心を。
コロナウィルスが象徴するように、ブーカの時代が来ると言われている中、その変化に対応できる柔軟性・自発的能動的な思考・行動力を。



アソビノ ビジョン

すべての子どもが
すべての命を大切にできる
社会をつくる



- アソビノ
- ・認知能力と違い、非認知能力は暗記させたり、教えられるものではない。
 - ・この教室で用意するのは環境（ヒト・モノ・コト）。
 - ・たくさんの失敗体験や成功体験をし、経験から自ら学んでいくことで非認知能力は自然と育っていく。
 - ・この教室は、少しでも多くの失敗や成功の体験ができる場所として存在。

【連携実績のあるおもな企業様・組織一覧】



講師はすべてその分野のプロ

農業



東京校での子どもたちの
遊んで学ぶフィールドは
自然豊かな信州でも。

●非認知能力を育成
する“カギ”は、自然
の中にたくさんある

●稲倉棚田との親和性

ただ大切だよと言い続けるだけでは無意味。体験して実際に触れることでの価値

●稲倉棚田での子どもたちの実際の変化

- アソビノ**
- ・感覚過敏なEちゃん
 - ・虫に触れるように
 - ・答えを出さない言葉かけ

●課題

- ・効果がわかるのに時間がかかる
- ・体験だけでなくどう伝えられるか？

今日はそんな共通の課題を、“どう向き合っていくか？”みんなでアイデア出しをします！
答えはないけど言語化はできる

- ◆五感を育てる＝自然体験
- ◆便利でなく、コントロールできない環境
- ◆農協時代に育ててもらった場所
- ◆農協時代の久保田さん出会い



本日のテーマ：

子どもたちが創る棚田のミライ
～アイデア出しワークショップ～

→大切なことは、ただ教えてもらったことは身につかない、行動に結びつかない。自分で考え、気づき、湧き出たものだからこそ、実行する。ワークショップにすることで、教えてもらう分科会ではなく、自分で生み出す分科会。

本日の流れ

- 1、チームでの自己紹介ワーク
- 2、インプット（学び）
- 3、アウトプット（考えを出す）
- 4、ワークショップ
- 5、アクションカード記入
- 6、まとめ

今日のゴール

- ◆目に見える成果
＝模造紙に貼る
- ◆目に見えない成果
＝ひとつ行動目標を持ち帰る

今日の約束

- ◆時間を必ず守ること
- ◆否定しないこと
(評価・判断する場でない、答えはない)

今日のワークショップは、稲倉棚田を事例に話します。

稲倉棚田は、江戸時代に開田されたものと言われていますが、湖畔に数箇所ある6～7世紀頃の横穴式古墳が太古からこの地に人々の営みがあったことをしめしており、その歴史の中で棚田が築かれたと考えられます。

1999年の「日本の棚田百選」認定を契機に地元有志が集い日々の保全活動を開始しました。
地域住民だけでは困難な状況から2006年に棚田オーナー制度・学校課外学習体験を開始。
今では農業遺産の多面的活用による都市農村交流と観光農業の育成に取り組んでいます。

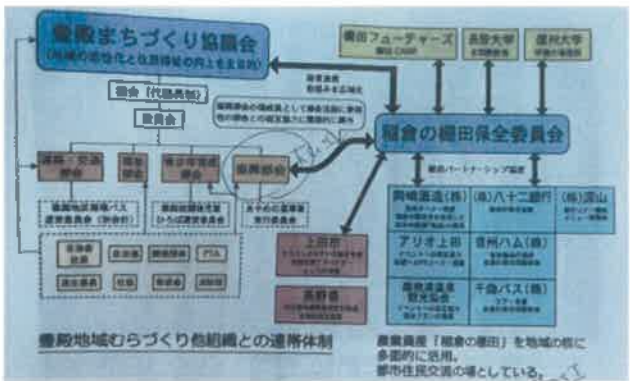
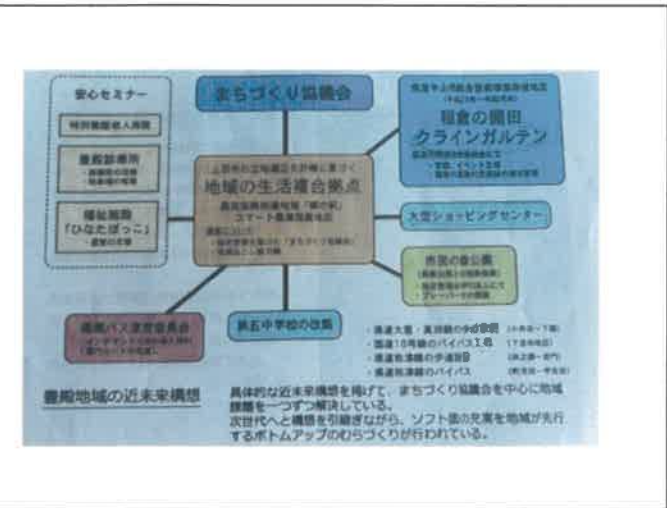
先進的な活動が認められて2022年の農林水産祭「むらづくり部門」で、最高位の「天皇杯」を受賞しています。

標高：640～900m
面積：30ヘクタール
水田枚数：780枚

耕作している範囲
標高：750m
面積：8.5ヘクタール
作付面積：3ヘクタール
水田枚数：180枚

- ◆畔面は土被（どは）と石垣が混在する
- ◆烏帽子岳から流れる湧水を棚田に引き込んでいる
- ◆美ヶ原高原、夢科山、八ヶ岳、北アルプス連峰が望める
- ◆耕作放棄された地主の田んぼを保全委員会が借り受けて管理している。
- ◆栽培期間中は無農薬のため、田んぼの中に生える草取りが大変で収量も少ない

平均収量 東濃地域 630kg / 反に対し、稲倉棚田 350kg / 反



保全委員会2006年～
(地域+JA+行政で構成)

募集(新聞、広報)
定着が課題
有償ボラ(日当)手持ち弁当

パートナーシップ協定(アリオ、八十二銀行、地元企業)

酒米オーナー 122名
エリアオーナー 2団体
サポーター 75団体
ファン 40

合計239組



感じたことを自由に各グループでシェアし合う

テーマ：
「次世代につなげていくためには、稲倉棚田はなにができるか？」

→あくまで設定は稲倉棚田の事例。条件や環境などのベクトルを合わせた上でグループごと考える(そうでないと、広がりすぎて議論がまとまらなくなる)。結果、「この部分だったらうちでもできる」ということを持ち帰ってもらう。

一昨年から生まれた稲倉棚田とアソビノのつながり。次世代育成という観点では、まだまだ入り口。アソビノの事例をもとに、次のステップとしてこれを活かしていくには？自分だったらどうする？まずはいろんな意見からアイデア出し。

完璧な事例ではないからこそ、まだ
いろんな可能性がある！

「うちの棚田（地域）はここがすごい」「自分のフィールドだったらどうするか？なにができるか？」を意見交換しながらブラッシュアップし、最終的に自分ごとに転換していく。

→「ヒト」「モノ」「コト」の3つの側面から、まずはとにかくアイデアを出しまくる

※実現できる・できないに関わらずとにかく数を出す。

※制約「合言葉はいいね！」

※競争なので、数が多いチームの勝ち！

→出た意見を「ヒト」「モノ」「コト」の3つのカテゴリにふるい分けてみる
→そこから見たものを肉付けしてもOK

●アクションカード （自分との約束）

<アクションカード>

氏名：_____

今日は、_____という

（気づき・発見・アイデア・思い・考え）があったので、

自分のフィールドに持ち帰って

_____を

やります！

- ①個別でアクションカード記入（2分）
- ②2人1組ペアで宣言し合い、自分との約束とする。（1分）

●まとめ 終わりの言葉



発 表 者

白米千枚田愛耕会

堂下 真紀子 氏

皆さん初めまして、石川県輪島市白米千枚田愛耕会、広報の堂下真紀子と申します。能登は今年の初めに地震そして先月には豪雨災害がありました。災害はどこにでも起こり得ることから、皆さんに少しでも私達の経験をお話して、何か参考になればと思い、今日はお時間をいただきましたのでよろしくお願いします。まず千枚田について簡単に説明します。白米千枚田は日本海に面した急斜面にあります。田んぼの面積は2ヘクタールに満たないそんな中に、小さな田んぼが1004枚ギュッと密集している棚田です。機械が入らず米作りはほぼ手作業、昔ながらの耕作方法を現代に伝える稀有な棚田と言えます。エリアごとに耕作者はいますが、市が一括管理しています。棚田オーナー制度を取り入れており、今は250組以上のオーナーさんがいます。私達白米千枚田愛耕会は、オーナー制度の棚田533枚の耕作管理を行っています。地震があつてからは耕作者が田んぼに関われないという話もあつて、ほぼ全ての田んぼの草刈りを行って管理をしています。メンバーの主力は12人ほどで高齢化による担い手不足が深刻ですが、地震が起きてからはさらに担い手不足問題が深刻になっています。1月1日、能登半島地震が発生しました。最大震度7を記録する大きな地震で、棚田の約8割に亀裂が入りました。深いところは1m以上にもおよびます。さらに海の方の棚田では五、六枚が一斉に折り重なって潰れ、地滑りで海の方に棚田が押しつぶされているという現状です。用水や取水口にも損壊がありました。不要な地下水の流出もあり、この写真は冬ですけど、棚田が水でいっぱいになっています。私達がどのように今取り組んでいるかというお話をしたいと思います。最初の頃は輪島市も生活再建が優先ということで、千枚田の方には今年なかなか取り組めないというお話もあったので、愛耕会独自でクラウドファンディングを立ち上げました。修復の費用を募って1800万円以上の支援金が集まりました。そうこうしているうちに石川県が復旧に乗り出すという話になり、打ち合わせを重ねていきました。国の災害復旧事業というのをういて、千枚田を修復することに決まります。市が地元の建設会社に修復を全面委託します。そうなるちょっと愛耕会が修復にかかわれなくなるので、何とか自分たちも米作りを続けてきた田んぼなので、修復に関わらせてほしいと相談し、業者と連携を取る形で今は修復をしています。この二、三ヶ月はずっと行政とやり取りをしているような期間で、生活も日々ままならない中で、短期間でい



発表での様子



白米千枚田愛耕会の皆さん



被害の様子

んなことを決めなければいけないというちょっと大変な状態でした。修復を進めるにあたって必要なのが宿営所の整備でした。というのも地震が起きてから、私達が暮らす南志見地区というところは、半島という土地柄、孤立してライフラインが全部絶たれてしまったため、1月10日には100キロ離れた金沢へ地域ごとの集団避難をすることになりました。その避難先から棚田修復に行かないといけなくなったときに、クラウドファンディングの資金を活用して、休業中の道の駅千枚田ポケットパークを宿営所として泊まれる場所にしました。シャワーコンテナやダンボールベッドで食事も取れるような環境を整えました。今現在も愛耕会の会員の半分は、金沢のみなし仮設住宅などにいるので、今でも金沢から通っています。春になり修復が始まります。大規模崩落箇所などは重機により業者が担当して、亀裂などを人力で修復しなければならぬ場所は愛耕会でという担当分けをしました。修復する中で、千枚田らしい修復方法も取り入れています。例えば段差のついた1枚の田んぼはあぜを真ん中に作って、1枚から2枚にするとか、崩れてしまった箇所は新たに1枚の田んぼを作って修復するという形

をとっています。災害復旧事業というのは原形復旧が基本ですけども、小さい田んぼばかりの千枚田は昔から崩れたら崩れたなりの形状に合わせて修復ということをしてきたという土地柄なので、こういう修復方法も柔軟に取り入れさせていただいています。亀裂などの修復はこのような進めてきましたけれども、さらに水を張って判明した見えない被害というものがあります。今年1004枚のうちの120枚の田んぼで米作りを何とか行いましたが、そのときに水を張って見たらいろんな被害状況が出てきました。例えば田んぼの傾きの不均平や細かい亀裂による水漏れ、地下の水みちが変化したことによる沼田化という被害です。これは震災当初災害査定を受けた後にわかった被害で、こちらは査定から漏れた被害ということになります。そのため私達は後々出てきた被害についても、もれなく災害認定してもらうために自分たちで調査を行い、この表のように認定済み以外のところでも亀裂とか、沼田化や高低差の被害を自分たちで調べて県に報告し、今は水害もあつて遅れていますが、その部分も査定に入れてもらう予定です。こういった見えない被害の修復方法というのをどのようにしているかといいますと、米作りはしない田んぼも1回は水を入れます。最初の粗起こしのできるだけ深く粗起こしした後に、水を入れて代かきでドロドロに土と水を攪拌して、目に見えない亀裂の箇所が目づまりを起こさせる形で亀裂を塞いでいきます。最後に畦塗りまでして、きちんと水がたまるかどうかを確認して修復完了という手順をとっています。これは田植えをした120枚の田んぼだけでなく、1004枚すべての田んぼで同じように工程を踏んで修復しようということで今は取り組んでいます。そうした修復を進める中で、今度は先月の21日に能登豪雨が発生します。地震とは違う被害状況で写真にもあるような山崩れや地滑りによる田んぼがごっそり抜け落ちてしまうようなところが、この航空写真でも7ヶ所の大きな崩落が見受けられます。左下の写真は今年水づけして修復完了した100枚のところが、さらにまた崩れてしまったということで、正直追い打ちをかけられたようなつらい状況にあります。さらに本当に深刻な被害というのが用水の被害でして、地震のときも、頭首工に続く道は倒木や土砂でふさがれて、春の米作りまでに間に合うように業者が何とか直してくれたんですけども、今回の水害ではさらに頭首工のある場所が全て流されてしまって、どこに頭首工があったかもわからない状況になってしまいました。この写真で言うと、豪雨前と豪雨後では元々きちんと整備されていた場所が全て流されて川になってしまっています。ですから、来年の作付けに修復が間に合うかどうかというの、まだ何とも言えない状況です。災害を経て感じたことを最後にお伝えします。復旧は行政とどれだけ深く関われるかにかかっている。これは国の支援制度を使うにあたって、今まで輪島市とやり取りしていたところに、国や県、業者など関係者がとてもた

くさん増えたことによって、自分たちが身近に感じていた千枚田が、自分たちの何か手を離れてしまって、どんどんいろんなものが決まっていくな、そういったちょっと怖さも感じました。自分たちのふるさとの宝を守るため手綱を離さないためにも、日頃から行政と積極的に関わっていくということが大事だと思います。ありがたいことに、私達を担当していただいた国や県の担当者はすごく心ある方々で、親身に相談にも乗っていただき大変助かりました。2つ目は有識者との繋がりです。今回、災害という未知の体験で混乱が始まったときに、信州大学の内川先生という方に出会ったことで、本当に助かりました。震災による棚田の復興に深く関わってこられた方で、過去の事例などを聞くことができて、とても参考になりました。棚田地域の震災復興という本をいただいたんですけども、阪神淡路大震災や中越地震そして長野県北部地震でも同じような見えない被害をどのように修復していったか。また、各行政とどんなやり取りをしたかということも書かれていてとても参考になりました。日本は災害が増えています、その分経験値のある地域が増えるということでもあるので、いろんな地域と連携をとれたらいいなと思いました。最後にちょっとこれは個人的な意見もありますが、道路や水道などのライフラインは早急に直すというのはもちろんですけども、千枚田のように観光的な要素がある場所になると、制度ありきの復旧にはいろんな壁がありました。例えば復旧には契約した業者しか入れない。米作りをしている私達が関われないっていうそういう制度のしがらみというものも最初はありましたけれども、これは業者の下請けという形で私達も修復に入ることができましたし、例えば全国から手伝いたいというボランティアさん、復旧に関わりたいというボランティアさんもいた中で、その契約した業者しかちょっと復旧に関われないということがあったんですけども、私達は復興のプロセス自体に多くの人が関わってもらって、千枚田への愛着を持つ人が増えればいいなと思って一部工事区画から外してもらって愛耕会特区という形で、今はいろんなボランティアさんが入れる区画を設けています。能登は水害も追い打ちをかけるようにあったので、本当に能登では心が折れたっていう話をよく聞きますし、まだまだ大変な状況ですが、いずれ能登が復興していくときには千枚田も何とか1004枚の田んぼ全てに米作りができるようにみんなで一生懸命頑張っていきたいと思います。今回の棚田サミット主催の長野県の各団体さんからもたくさんの支援金をいただきましてありがとうございました。道は険しいですが、希望を捨てずに頑張っていきたいと思います。今日はお時間をいただきありがとうございました。

事 例 発 表

発 表 者 稲倉の棚田保全委員会

稲倉の棚田保全委員会
委員長

久保田 良和



稲倉の棚田保全委員会
地域おこし協力隊

柿澤 保



稲倉の棚田保全委員会
地域おこし協力隊

玉崎 修平



稲倉の棚田保全委員会
元 地域おこし協力隊

大山 慧一郎



【久保田】
皆様、どうもこんにちは。大変朝からお疲れだと思いますが、棚田の保全も大変疲れますがサミットもやはり疲れますね。1時間、時間を頂いていますので、事例報告ということで棚田の保全委員会からお話をさせていただきますが、よろしく願いを申し上げます。私は棚田保全委員会の委員長の久保田良和といいますが、よろしくお願いします。最初に3分ぐらいずつで自己紹介をさせていただいて、それから始めたいと思います。私は今76歳になりまして、退職するまでは県の職員でありました。千葉県と長野県で 農業土木の技術系の職員でありました。その関係の方はすぐわかると思うんですが、昔は土地改良事業、今は農業農村整備事業と国が呼んでいます。そういうものの計画の立案、実施というようなことをやってきました。それで、平成19年、2007年になりますが、私は豊殿地域の小さい自治会の、自治会長をやりました。そのときに豊殿地域にデビューするような形になるわけですが、そこで様々な豊殿の諸々の課題・問題、あるいは悩み事等を初めてそこで県を辞めてから知るといような状況になりました。豊殿地域というのは、農村地帯でありまして、水田農業、あるいは果物。果物はリンゴとブドウです。畑はキュウリと最近はいんげんブドウということで、本当に農村地帯であります。そうしますと、そのハード、ソフトのいろんな課題が自治会から上がってくるんですが、そういうのがよくわかるんですね。それらが自分の仕事としてきたことで、解決できる道がたくさんあるということに気が付きました。平成19年、2007年から棚田と関わるようになりました。そんなことで、今日に至って4代目の委員長ということになっております。私は3代目の時から強く関わり出していますが、当時地域おこし協力隊、総務省の事業がありますが、2009年に設立されます。ちょうど私、その頃前後で自治会長をやっていたので、この制度は絶対活用すべきだと、なんていうか温めてきておりました。その後ですね、何年か先に今日ご出席いただいている、今日は3人なのですが、実は初代から4人を毎年3年に1人ずつ、上田市にお願いして、地域おこし協力隊を招聘してまいりました。初代はちょっと今体調を崩して来られまので、今日は2代、3代、4代をこの後ご紹介しますが事例報告をさせていただきます。地域おこし協力隊の導入に当たりまして、私が一番考えましたのは地域おこし協力隊が何を起こしてくれるか。ここが一番大事だと思いました。それには、一番目が受け入れる側のミッションです。何をしていたきたい。これが最初にあります。二番目が来られる方の資質、モチベーションです。三番目が行政の関わり方、この3つがですね、三位一体にならないと良い結果になりません。皆さんご存知のように、マスコミ等ではいろんな移住ですとか、定住、地域おこし協力隊の話が出ますが、ほんのど世の中で半割1で

います。でも私どもはおかげさまで素晴らしいメンバーに恵まれて、今日まで継続的に、もちろん行政の力も借りながらですね、やってこられたということは非常に大きなインパクトがあります。昔からよそ者、若者、尖ったものを、いい意味での馬鹿者って言います。豊殿地域というのは分科会でも出ましたが、非常に保守的です。そこにどうしても風、新しい風を入れたいっていう事を大きく考えておりましたので、結果的には非常に良かったなというふうに思っています。それでは、私の同志であります、こちら側から紹介しますので、自己紹介で行きますが、よろしくお願いします。

【大山】
はじめまして、皆さん、大山慧一郎と申します。豊殿地域の地域おこし協力隊としては2代目になりまして、そこに記載がある通り、元地域おこし協力隊ということで、私自身は2017年に神奈川県から長野県の上田市に移住しまして、2017年から2020年までですね、地域おこし協力隊として稲倉の棚田保全活動に協力させていただきました。私自身、実は棚田の保全や農業といったところには全く未経験だったんです。もとは長野県に住んでみたいっていうところが選んできたきっかけでして、その中でたまたま訪れた上田市の気候だったり、都市と自然環境のバランス感覚だったり、また東京への出やすさ、そういった点で子育てをするのであれば、こういった地域に住むのがいいかなと思って、上田にまず興味を持ちました。その中で、縁もゆかりもない土地でしたので、私自身が地域を知って、また地域の人に私のことを知ってもらえる、そんな仕事がないかなというところで仕事探しをしていたところ、たまたま地域おこし協力隊の制度を見つけ、また、稲倉の棚田でちょうど酒米のオーナーの制度が始まったニュース等も見、なかなか面白そうなことをやっているなと思い、ちょうどそのタイミングで地域おこし協力隊の募集がありましたので、応募してみたというところなんです。実際、棚田に触れてお米作りをしてみても楽しかったんですね。純粋に。協力隊を2020年まで続けましたが、その後も、豊殿地域に住まいを構えまして、引き続き週末や早朝の草刈り等が中心になって、以前ほど関わりは密なものではないんですが、豊殿地域の住民として今も棚田の保全活動に関わっております。普段は今は東京の会社に勤めておりまして、リモートワークなので、自宅で仕事をしながら早朝や週末に棚田の保全活動に関わっているというところになります。どうぞよろしくお願いいたします。

【玉崎】
お二人前に出られましたがちょっと緊張するので、この場でお話をさせていただきます。3代目の地域おこし協力隊やっています玉崎と申します。私が着任したのが2020年の10月からな

ので、ちょうどコロナが蔓延していて難しい時期でした。ただですね、そういった部分で総務省から特例が出まして、1年延期ということで、実は今年4年目で、来年の3月までで最後ということで活動させてもらっております。私自身が地域おこし協力隊でこちらに赴任したのは、ちょっと他のメンバーとは特殊な事情がありまして、実は2008年からずっと稲倉の棚田のオーナーで、こちらにずっと通っていたという経緯があります。東京の友達を連れてきては、田植え・稲刈りして、とれたお米をもらっては、東京の自宅で新米パーティをして、みんなで新米を楽しんでたという事が経緯にありまして、それがきっかけで、都内でNPO法人棚田ネットワークに所属しまして、活動をずっとさせてもらっていたというような経緯があります。他の棚田地域とか皆様のご意見とかを伺いながら、棚田というものがより好きになって、ずっと通って稲倉にもう少し貢献したいなという思いもありまして、2017年に「棚田キャンプ」というのをやらせてもらえないかという事で企画書を、当時1代目の地域おこし協力隊がこちらに赴任したばかりでしたが、持ち込んで、久保田委員長もいらっしゃったと思うんですが、ぜひやってみましょうということで初開催、2017年春に開催をして、1オーナーとしてずっと稲倉に関わってきたというような経緯がございます。2代目の大山隊員からこれで最後なんだよというお話をしている時に、3代目を募集しているんだけど、どうだい？とお声がけをいただきまして、ちょうど東京が嫌になったというわけでもないのですが、上田への移住も考えていたこともありまして、移住をきっかけに協力隊として、ぜひやらせていただきますということで、3代目を就任しました。ミッションは棚田の保全事業や販売誘客促進、それとSNSなど棚田のグランドデザインといったことでやってきましたけれど、3代目は店を潰すと言われていたのですが、どうにか持ち直してというか、より伸び代を大きくして、うまく次の4代目に引き継いでいけるのかなというように今後も、また協力隊後も、まだ何も決まっちゃいないんですけど、棚田に何か関わっていただければいいなという想いでやっております。ありがとうございます。

【柿澤】
皆さんしっかりしたご挨拶で、ちょっとハードル高くなりましたけれども、4代目の地域おこし協力隊、柿澤 保と申します。去年の10月ですね、ちょうど1年着任後経ちまして、着任時、棚田サミットがあるというのは聞いてはいたんですが、まさかこんな大々的なイベントかというのは想像もつかず、1年、もう周りを見て、まあなんだろう、自分がどう動けばいいかっていう慌ただしく過ぎた1年でした。着任前は埼玉県深谷市というところに住んでおりまして、去年の3月まで5年間は立科町にクライנגルデンがありまして、そこと埼玉県深谷市、2拠点生活を5年間ほど送っていました。5年間、本当毎週ほぼ100%長野立科に行って、クライングルデンというのは、ちっちゃい庭がついたちっちゃい建物という、ドイツ語の小さい庭っていう意味なんですけれど、そこを5年間借りて、2拠点生活で野菜作りを行っていて、そこでの生活が非常に楽しくて、仕事と休日のオンオフの切り替えがそこですごく出来ていたという、その5年間の間に上田も当然、何度も訪れていまして、私が着任する前は9月に会社辞めたんですけども、10月から着任して、それまでは全く農業とは関係ない職業で、深谷市に本社がある赤城乳業という、商品名でいうと、ガリガリ君を作っていますアイスメーカーに勤務しておりました。そこ、今はすごく業績も良く、私が辞める時も当然ちょっと引き留めはあつ

たんですけども一応円満退社ということで送り出していただいて、今も交流が会社とはありまして、おじさん達の間では、おじさん達のヒーローだよと。私、定年前に引退したんですけども、もう憧れるよということで見送ってくれました。その後上田に住み始めて、私のミッションが棚田の保全・PR活動・上田のクライנגルデンのPR普及活動・誘客促進・移住の相談窓口それがミッションとなっていて、棚田一本ではなくて、いくつかありますが、今のところ私のデスクが稲倉の棚田の交流館にありますので、嫌でも棚田一本槍みたいな、そんな状況で日々活動しております。今後、稲倉の棚田をこの後どうやって繋いでいくかというのは、私も正直模索段階ですが、うまく繋いで、この先も協力隊仮にいらなくなったとしても、保全メンバー力を合わせて未来に繋いでいってほしいなという想いはありますので、今後どうなるか、まだわからないですけども、稲倉の棚田は未来からの預かり物、全部が預かり物かなっていう、そういう気持ちでいつもいますので、保全活動をこれからも頑張って、未来に繋いでいこうかなと思っています。よろしくお願いいたします。

【久保田】
はい、ありがとうございます。 それでは事例発表ということで、時間の関係もございますので、それぞれ地域おこし協力隊よりお話をさせていただきます。一つ私から、稲倉棚田の豊殿地区における位置付けについて、私は公務員だったものですから、この位置付けに非常に拘ってまして、豊殿地域というのは16の自治会がございまして、約1,500戸5,000人が住んでいるエリアになります。その中で、まちづくり協議会という、28年6月にできたものですが、地域の活性化と住民の福祉向上目的ということで、豊殿地域は上田市の中でもこういうことが非常に進んでいるエリアになります。それで、4つの部会がここに記載されております。その中に振興部会というのがありますが、この部会員というのは、1つの部会が15名ほどで自薦他薦です。どういう人がなれるかという豊殿の自治会員、あるいは自治連関係団体、PTA、民生児童委員、社協、育成会、消防団と、よく皆さんお聞きするそれぞれの団体から、大体15名ぐらいです。それで棚田はですね、振興部会1つの中にあります。私もここに3人のメンバーも、振興部会員になっております。その振興部会の中に、棚田の保全という言葉が出てきます。これは豊殿地域として、未来永劫にやっていかなければいけないという、そういう位置づけがあります。そして、これからお話をパートナーシップ協定は、おかげさまで上田市内の民間の企業様の7社と結ばせていただいております。双方がウィンウィンになるような関係を構築して、それが棚田の保全に役立つという位置づけになっております。そして、当然ながら上田市行政・長野県・信州大学・長野大学。棚田フューチャーズというのは、棚田のキャンプの関係をやるために、保全委員会から出した組織ですね。 こういうものが動いて地域活動をしていると、その中に稲倉棚田がありますよという事をちょっと頭の隅に置いていただければ、お話しがわかりやすくなると思いますので、よろしくお願いします。それでは、3つの事例についてお話をさせていただきますが、1点目がパートナーシップ協定、2点目が長野大学との連携、そして岡崎酒造様との関わり方みたいなお話を、それぞれ地域おこし協力隊よりお願いしたいと思います。最初に柿澤さんお願いします。

【柿澤】はい。ちょっと図が右下になりますが、パートナーシップ協定ということで、現在7社の企業様、団体様と提携を結んでおります。この始まりは、県の信州棚田ネットワークのお力添えで始まったもので、民間の企業や団体さんと共同して、稲倉の棚田の保全活動を進めることを可能といたしました。必ずしも金銭的な援助ではなく、各社サポート体制、それぞれ協議させていただいて、提携させていただいております。いろいろサポートいただいている内容を踏襲して明文化することで、持続的な関係性構築と稲倉の棚田への関わりを広く公開して、お互いに良好な関係を保持しています。現在、この7社の企業様、団体様とお付き合いがありますが、中でも岡崎酒造さんとは深く関わっていて、今後も強い関係性保持していきだろうなと思います。八十二銀行さんは棚田の保全活動を、企業を挙げて参加していただいたりしております。きのこむら深山さんは、今日お弁当召し上がった方もいると思いますが、きのこ屋さんです。レストランがありまして、観光客も受け入れておりまして、棚田でのイベント事のお弁当注文をお願いしております。アリオ上田さんでは、イベント時の場所提供が主ですが、今日も店内には稲倉の棚田のサミットのコーナー展示場所をお借りしております。信州ハムさん。今日もお土産にたぶん入っているかと思いますが、ハム、ソーセージ、ベーコンとか、棚田キャンプのイベント時にハムのご提供をいただいております。鹿教湯温泉観光協会さん。イベント時のお湯の提供ですね。泥んこ遊びとかその後の足湯に活用するお湯をいただいたりとか、あとは宿泊が必要な方、イベント時に前泊したり、泊まって観光したいという方は、観光業界通して宿泊の方をご紹介します。千曲バスさんは棚田をポイントに観光バスの観光ポイントとして使っていただいている他、イベント時、このサミットでもご協力いただいております。こんな皆様方のおかげをもちまして、稲倉の棚田保全活動にも相乗効果あるかと思いますが、今後とも7社の方、それプラス今も名乗りを上げそうな方々もいらっしゃいますので、これからも良い関係を広く築いていければなと思っております。【久保田】はい、次お願いします。【玉崎】こちらの図の緑の部分をご説明させていただきたいと思います。棚田フューチャーズとなっていますが、これは実際自分が主催でやっているような状況で、先ほどちょっとご紹介の時にもお話ししましたが、元々東京の人間が集まって棚田でキャンプをするというようなイベントを企画しておりました。その中で私の友人を集めて、棚田フューチャーズと称して、イベントを毎年田植えの前と稲刈りの後という形で開催してきているというところでの保全委員会との繋がりになっています。この秋は棚田サミットがありましたので、初めて自己都合での中止になり、来春に仕切り直してやるうとは思っております。長野大学ですが、第1分科会でもお話をさせていただいたのですが、2020年に中学生の子から、いろいろ棚田について質問を受けるという機会が、長野県の棚田としてありまして、1人の中学生の子に「棚田にはどんな生物がいるんですか？」という質問をいただきましたが、その時に居たメンバー、誰も答えられなかったという現実がありまして、それは良くないという事で、どこか大学機関で生物の事に詳しい先生にアクセスをして、棚田の生物というものを調べてもらおうという事で、いろいろ探しておりました。最初は日本大学の方とかにもご相談していたのです

が、ちょうどコロナ期で、なかなかこちらに足を運ぶ機会を作れないという事もありまして、長野大学の松下先生という方が田植え、稲刈り体験に来られたものですから、ちょっとお声がけをさせていただいたところ、ちょうど新潟から満尾先生という方が、元々新潟の棚田をやられていた方が長野大学に来ているよってお話をいただきまして、それで今回第2分科会でもご登壇いただいた、長野大学の満尾先生に、棚田の状況を学術的に把握いただくというような事でご協力を頂いたという流れです。その前にも長野大学とは、いろいろと他の面でもご協力いただいたりしていましたが、満尾先生が入ることによって、より密に体制ができていかなというような状況になっています。信州大学ですが、信州大学の方ですね、実はこれもいろんな繋がりの中でお話をいただいております、例えば棚田キャンプのときにも、信州大学の学生が来て、お手伝いをしてもらったことをきっかけに、いろいろ繋がったりとかですね、あともちろん今回第1分科会の内川准教授を含めての棚田の調査だったり、いろいろと学生を連れてきていただければ、協力いただいたりとか、数値的なものをまとめていただいたりというところで、繋がりができているような状況です。先ほど委員長からこういった体裁をまず作るというようなお話をいただいたのですが、本当にその通りで、この図を改めて見ると、何か凄くいろんな組織と関わっている団体なんだなあとと思いますが、実際動いている方としては、その場その場でいろんな繋がりができたような感じなのかなというような現状です。【久保田】はい、ありがとうございます。 それでは、大山さん、お願いします。【大山】はい。では私の方から、岡崎酒造さんとの取り組みというところで、第3分科会と重複してしまう部分もあるかもしれませんが、岡崎酒造さんですね、酒米のオーナー制度というのを今取り組んでいまして、これ元々、2017年から取り組んでいるところで、当初は20組限定ということで始めました。オーナーさんの皆さんには田植えと稲刈り、春と秋の作業に参加していただいて、春頃のお酒ができるタイミングに、直汲み会という形で、オーナーの皆さん自身で瓶詰めしてボトルにラベルを貼る。そういう会をしていたのが1年目になります。今年の組数ですが、とても酒米オーナー人気でして毎年増枠というか、応募が殺到しているような状態で、今年だと122組の方々にオーナーになってもらっています。岡崎酒造さんの方では、棚田にコミットしてくれるっていうふうに、謙一さん自身も言っていていて、一心同体というか、棚田保全に岡崎さんも社を挙げて取り組むので、保全委員会も頑張ってくれというふうに言われていて、酒米のお米の出来というか、不作だった年も結構ありましたが、去年は無事豊作でした。今後、稲倉の棚田保全委員会として、やはり棚田は、お米作りの場でお米作りを中心に成り立っているものだと思いますので、やはりいいお米を作り続けたいなっていう思いがあります。その中で、酒米という一般的な米作りとはちょっと違う毛色にはなると思いますが、そこにも、県の普及センターの方々等に協力いただいて、いい酒米を作っていこうというところで、ここ数年頑張っているというところなんです。当初始まったときは、直汲み会という形で、20組限定だったので、直接蔵の中に入って体験いただくとかもやっていましたが、オーナーの数も増えていって、少しずつ変わって、今は交流会っていう形で、オーナーの皆さんとの意見交換や、交流を深めるという形で、オーナー制度を継続してお

ります。先ほども言った通り、岡崎さんの方にはとても棚田の保全に協力いただいている、酒米の買い取り価格が、一般のおそらく2倍ぐらいの価格で今買い取っていただいているというのもあるって、いいお米を作れば、我々としてもいいお米作ったから、高く買ってくださいと、堂々と言えるように、単純に岡崎さんのご厚意で高く買ってもらってというだけではなくて、我々自身も良い物を生産するから、この価格で買い取って、欲しいと言えるようなお米作りを今一生懸命頑張っているところになります。【久保田】はい、ありがとうございます。今、たまたま我々がやっている3例についてお話をさせていただきました。まずこの表ですが、表で見ますと、綺麗になっていてしっかりしているように見えますが、必ずしも一枚岩ではありませんので、そういうことだけはご理解いただきたいと思います。地域によっていろんな考え方ございます。ただ、これが一つのベースになっていることは確かです。その位置付けというのは非常に大事だというふうに思っております。そういう話と、それと私は思うに、保全活動にはですね、正解っていうのはありません。それぞれの地域がそれぞれにあった歴史、文化、あるいはそれを引っ張っていく人の考え方など、トータルでやっていくしかないですね。どうしても棚田の保全っていうのは、社会環境、周りのこの動いている社会のスピード、そういうものにも合わせなきゃいけないし、いろんな要素を考えながら、それぞれの地域に合ったやり方を見出すしかないというふうに思っています。たまたま稲倉の棚田は、いろんな関係で相乗効果があってですね、今のところですが、少しずつ知っていただく棚田にはなってきたはおります。ただし、それが全てこの先ですね、このままいくってというふうには考えておりません。 いずれにしましても、いろんな方の力を借りながら、回転していかないと事業は成り立ちませんので、保全活動というのは、今日来られている皆さんも、直接的間接的にバックアップしていただいでですね、ぜひ棚田が、先ほどの地域振興法の継続ではありませんが、棚田としてぜひ繋がっていく、次世代に残せるということが大事だというふうに思っています。私どもの棚田は「カカワレル棚田」ということでやっておりますが、4、5年前まではですね、オーナーの皆さんはお客様というふうに捉えていました。今は参加型に変えていますので、できるだけ参加していただくということを柱にしております。 ですので、オーナー制度でよくオーナーさんになると、田んぼが1枚誰々さんのオーナーの田んぼというふうにも指定がされる所もあると思いますが、昔は私どもそれでやっていました。ただ、4、5年前からですね、それだとこちらの負担がちよっと過重すぎちゃって、なかなか思うような展開にならないので、今はですね、関わっていただくには、オーナーさん同士が交流してもらおうというようなコンセプトで、できるだけ受付順に来た方を、ある田んぼにランダムに、そこで交流をしながら時間を楽しんでいただく、そしてそこからまた次のステップに行っていただくというような、そんなことを主眼としてやっております。「ずくを出して」っていうのは、先ほど開会式でもありました。一生懸命やる、あるいは頑張るみたいなことなので、そういうふうには是非ね、理解していただいて「ずく」ですから。「くず」じゃないですから、ずく出せでぜひお願いしたいと思います。今、いろんな話をさせていただいていますが、もし質問等がありましたら、言っていただければ、できる範囲でお答えしたいと思いますが、いかがでしょうか？ よろしいですかね。

そうしたら棚田の話をもう少しさせていただきます。私に関わりましたのは、今から15年ぐらい前になります。一番はですね、先ほど申しましたが、いろんな立場があってですね、人にはそれぞれ立場っていうのがついて回りますので、その立場がたまたま棚田を保全していく団体の、頭にいたものですから、私がやるような形になりました。棚田の保全というの、皆さん、よくご存知のように、誰がやってもほとんどうまくいかないっていうのが通例であると思います。大変だっていうことです。 それだけやるからには覚悟を持ってやらないとなかなか前に進んでいかないというふうに思っています。一つ、一番大事なものは、予算あるいは人の面っていうのもあるのですが、私は一番大事なものは、人との関わり方ですね。 行政との関わり、私、自分のメンバー、棚田オーナーさん、あるいは棚田の保全委員との関わり、それが一番難しいですね。いろんな人がおります。私どもの棚田は、皆さんどういう位置づけ組織になっているかわかりませんが、全く任意の団体です。 豊殿まちづくり協議会の中の稲倉の棚田保全委員会という一つの組織になります。ですので、保全活動は豊殿地域または棚田の理解のある方々、今、常時40名ぐらいですかね、正確に言うと、そのうち1年を通して出てきていただけるが20名ぐらいです。それで、たまに出てくる人が10名、本当にたまに出てくる人が10名ぐらい、そんなような団体ですかね。 それで会社ではありませんので、今日は5人、明日は15人、明後日は3人。 そういう、要するに働いてくれる保全委員の皆さんが来るのは、そういう感じですよ。イメージしてもらおうとわかりますよね。 今日は何をやろうと思っけていても、3人では進みません。でも、それを良いとして受け入れてきています。ですので、気を長く持たないとなかなか難しいですよ。15人が10日来れば、間違いなく終わりますよね、早く。でも、それができない、いろんな事情、それは来ていただく人の事情ですから。 若い保全委員さんは、当然お子さんもおられるし、幼稚園、保育園、学校等がありますので、自分のできる時間帯に来ていただく。あるいは体の調子の悪い方は、少しね、午後来るとか、そういうのも全部あります。それを時間いくらと決めて、費用弁償という形で払わせていただいております。おかげさまで今、いろんな過程を踏んできてまして、総収入で3000万ぐらいまで来まして。私が受けたときが約300万ですから、10年ちょっと前に300万ぐらいだったと思いますので、それだけいろんな人との関わりを持って伸びてきました。 その中に大きく伸びたのが、岡崎酒造さんとの関わりです。 その収入で大体3分の1ぐらい。あとは学校関係の教育関係、体験学習ですよ。あるいは国の補助金。中山間支払制度、あるいは多面的機能、そういうものも当然入れますし、先ほどお話ししたように、私は県の職員でしたので、農業土木関係のいろんな補助金というのは、ある程度、一般の知らない人よりは、知っていますので、そういうものをフルに今まで使ってきております。 ですから、かなりの金額を投下してもらったことは確かです。 そういうものがベースになって、だんだんだんだんそれが広がってきております。 ですから基本的にはルールの上で必要なものは、申請していただくという考え方をしています。そんなことで回ってきています。これからどうするかという話が出てくるわけですが、今私どもが一番ですね、頭の痛いのが、要するに任意の団体なんですね。 これを何とか法人化なり、していかなければいけないということで、一応8年の頭に一般社団法人にでき

たら良いかななんていうことを考えております。法人になったからってやることは一緒ですから、何がどう変わらないっていうことにはなりますが、ただ対外的に見ますと、やはり信用という点で異なります。特にコロナのときなんかそうだったのですが、私ども任意の団体ですから国が出しているいろんな支援策ございましたよね。そういうものが一切引かからないので、クラウドファンディングをしましたが、そういう位置づけも、変わってくる。ただ、そういう組織にしていくと、今度、お給料という形できちんと払う、休む、そういうことは当然出てきますので、そういうで棚田が成り立っていかってという、そういう心配はありますね。ですから、そういうことも含めて、いずれにしても棚田だけでは駄目なので、民間の力を借りながら、併せて行政の力を借りてやらないと、多分棚田っていうのは、これ、どうしてもたないじゃないですかね。ご存知のようにもう、どの職種も人がいないですから、ましてや棚田で働く人ということになると、退職されて、給料払えませんが、あくまでも来た費用弁償でしか今までお支払いしませんので、それですね、ひどい団体なもんですから、予算があるときはお支払いします。無い時は我慢してもらうっていうのは、それが条件になっていますので。でも、年度の中ではきちんとお支払いしています。そういうこともありまして、なかなか難しい団体、悩ましい団体、どこでもこれは同じだと思います。言葉とするといろいろかっこいいことを並べますが、非常に棚田の保全というのは難しいということは間違いないと思います。ですから、それぞれ先頭になってトップランナーになる皆さんは、覚悟を持って、やるということが一番大事だと思います。なかなか覚悟してもね、難しいとは思いますが、他の方補足してください。それでは、何かご質問ある方いらっしゃいましたら挙手願います。

【参加者】
私らは、先ほど何度も言われたように、全然お金がありません。棚田のパートナーシップ協定の方々ですけれども、岡崎酒造さんとか、アリオ上田さんとか、年間とか、どのぐらいの助成をいただけるのかなど。単純に、私が考えた中で、素晴らしい棚田をしていますので、これぐらいのお金が必要なのか、など、どれぐらいお金が必要のかなど、私の方の規模から考えたら、本当にうちの方は規模が小さいですが、それでも人手が足りない、お金がないということなので、どういうふうに今言ったように、岡崎酒造さんとか、ああいうバックアップをしていたらけるといいのかなど考えております。以上でございます。

【久保田】
7社の皆さんからパートナーシップを得ていますが、お金の支援はしていただいています。直接的にはね、ただ、間接的には、岡崎酒造さんとのオーナーとの関わり、あるいは他の団体の皆さんが作業に来ていただける、そういう支援をいただいています。直接的なお金っていうものは一切いただけていません。

【参加者】
では、どうしてこういう素晴らしいのができるのかなという気はします。

【久保田】
一つは、オーナー制度というのが往になっていまして、オーナー制度、岡崎酒造さんを中心とした酒米オーナー。それとお米を、酒米を私どもは「ひとごち」という種類の長野県のブランドを作って、それを岡崎さんに納めます。そうすると、当然私どもは売るわけですから、岡崎さんからその見合った、見合

ったっていうのが、また何とも言い方にちょっと悩ましいですが、通常のお米の倍ぐらいで買っていただいています。世の中の通常の1俵いくらっていう、今年は多分かなり上がると思いますが、それでもかなり高いところにあります。それが収入。それと、酒米オーナーはお1人当たり今6万円です。それが122名いますので、約720万ぐらいですよ。簡単に言うと。そうすると、1,000万ぐらいになりますね。だから、3分の1ぐらいはその部分の収入ということになります。

【参加者】
私も棚田をやっていますが、微々たる田んぼなので、手伝った皆さん方にお金やお米、やっぱりあげたいと思うので、店に売ってお米とか、全然無いので、そういうことはとても苦しい状況でございます。

【久保田】
はい、そうだと思います。私ども今30ヘクタール、1999年農水省に指定されています。今は私どもがやっているのは8ヘクタールです。農地法面・畦畔・土手が半分の約4ヘクタールで、田んぼは4ヘクタール。4ヘクタールずつですね。それをコシヒカリと酒米で、年間約10トン位かな。酒米は岡崎さんへ、コシヒカリについては、オーナーの皆さんに30キロずつお渡しし、残りは自分たちで販売いたします。それが大きな収入にもなります。

【参加者】
はい、ありがとうございます。小さいながら頑張っていけますので、よろしく願いいたします。

【参加者】
今日はありがとうございます。分科会でもちょっと、質問させてもらったことですが、やっぱり、田んぼっていうのは米を作らないかんという中で、実際自分自身の集落もそうですけど、やっぱり高齢化というか、後継者不足っていう課題は、どうしても避けられない。今後酒米であるとか、普通のコシヒカリであっても、その作る人がやっぱり育つというか、後継者が居る・居ないというのは、凄く大事な事かなと思う。オーナーが全部作っても、やっぱり日々の耕作作業は、きっとあると思うのですけれども、皆さんとこ、稲倉さんところは、どんな感じで、後継者や移住者も含めてそういう地元の後継者は、どういうふうになっているか教えていただけますか。

【玉崎】
玉崎がお答えいたします。先ほどご紹介した稲倉の棚田保全委員のメンバーですけれど実はですね、昔から稲倉の棚田ですと営農されていた方は、実質0人の状況です。どういう形でやっているかっていうと、地元の間人が40%というの、棚田でやってきたメンバーではなくて、棚田の麓の集落の方で農業をやられている方とかが上に上がってきていただき、一緒にやっています。その他の60%は上田市内だったり、移住者だったり、隣の東御市・坂城町っていうところからお手伝いに来ていただいているというのが現状です。なので、いつも言うのですが、素人集団の集まりっていう形で、試行錯誤しながら営農が続けているというような状態です。なので、実際今までだったら口頭でとか、親から子供に引き継がれてという形で知識継承していた部分を、私の方で少しデータ化してみる、皆さんに見てもらってすぐにわかる図面化したりみたいなことで繋げていこうということで、今努力をしております。

【参加者】
ありがとうございます。

【久保田】
どこでも同じだと思うのですが、なかなか現実問題は厳しくて、いないというのは事実であります。ただ、私がお願いするのは、棚田の保全っていうのは、ちょっと来ていただく人の考え方、棚田を残していく意義というものを少し知っていただくということで、最初にそういう説明をさせていただきます。それで、単なるアルバイト感覚なら来てもらわなくていいですよっていうお話はさせてもらっています。そうしますと、棚田っていうのは特殊なエリアですので、なかなか、細かいことから始まって、いろいろ作業が大変なので、もちろん人は欲しいのですが、ある程度棚田を残していく、棚田の重要性、棚田の多面的機能とか、そういうものを説明させてもらいながら、それをご理解いただいた人に来ていただきたいっていうのが、私の柱になっています。それは最初のときにちゃんと説明をして、ですから、アルバイト感覚では無いとなると、来ない人もいっぱい多分いると思います。でも、それはよしとして、ただこれからそれが通用するかというのは、ちょっと私もわかりませんが、そんなふうにいるところです。

【参加者】
すいません。酒米について、ちょっとお聞きしたいのですけれども、先ほど委員長がオーナーさんから6万円とおっしゃっていましたが、内容的にどういうふうな、どのぐらいの面積で、どのぐらいお酒ができて、そういう細かいところは、もし教えていただけたら、今後の参考にしたいと思います。一応、うちの方も2年前に酒米をやりましたが、去年は高温障害で米がとれず、今年はお米が高くなったものですから、それができなかったという経緯がありますけども、今後ちょっといろんな面で取り入れていきたいなと思ひまして、申し訳ありませんが、教えていただきたいと思います。

【岡崎】
岡崎酒造の岡崎と申します。よろしく願いいたします。だいぶ広範囲で、来年はお米の値段上げろみたいな話とかあって、ちょっとドキドキしていますけれども、オーナーさん、たぶん保全委員会という立場からすると、手伝ってくれるみたいな、感謝ぐらいでよく来てくれたみたいなスタンスだと思いますけれども、民間企業とすると、そこはしっかりとビジネスに繋げたというスタンスで進めています。6万6000円で田植えができて稲刈りができて、最後お酒が12本貰えるだけです。よく払えるなっていうのはあるかもしれないですが、お酒飲まれる方、田植えをした、育った稲が自分で刈った、それがお酒になったら飲みたくなる、伝えたくなる、あげたくなるっていう付加価値ができてきます。それはちゃんと対価としていただくことで成り立つというのが、ちょっと第3分科会はいぶその話だったんですけれども、保全から次の継続のためには、ちゃんと収益を得るところに民間企業が棚田とパートナーになることの大事さだと思っています。棚田の保全委員会が一次産業ですよ。農業、耕作すると。それを加工する、加工する方がまた価値が出せるんです。ただ、お米の勝負でお米を高く売ってなかなか難しいですよ。それよりもお米を加工してお酒の価値の方が価格に転嫁しやすいです。なので、先ほどから言っていたように、お米を高く買うことができます。この次のステップも実はあってですね、次は棚田を観光に使えるのではないかとということで、今、大事なパートナーが、隣の隣、佐久市でクラビトステイという事業をされている田澤さんという方と今一緒に組んでですね、観光のスペシャリストですけれども、その方と組んで、この夏に棚田モーニングという

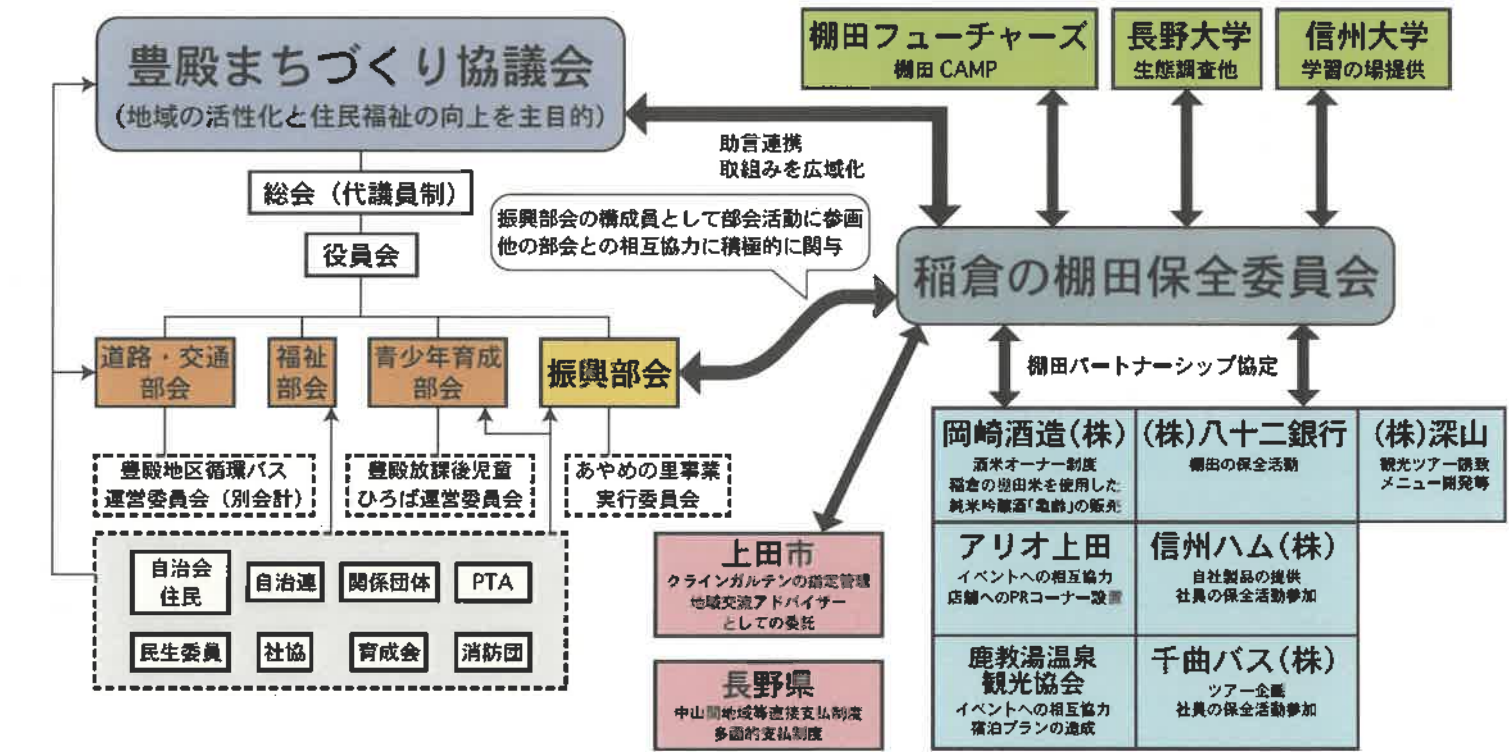
棚田で朝食を食べようということをやりました。朝7時集合して、30分ぐらい散歩をして、棚田を見ながら朝食を食べて、岡崎酒造の酒蔵見学をして、お酒1本持ち帰るで、1万5000円です。保全委員会の皆さんは、「来るか、そんなの」って言いますよね。だけど100名、結構あつという間に埋まりました。海外からも来られました。そういうことが、その専門家の方と組むことで、いつも当たり前前思っている棚田がすごい価値があるのだと、付加価値を上げられるというところに、今、そういう意味で僕らはやっていますが、このやる人を受け入れてくれる棚田があるという。やらせてくれるところ、今循環が少しずつ、まだね、完璧ではないですけども、動き、歯車が今噛み合ってきたかなというふうに思っています。よくワインで例に出されますが、ワインブドウ畑を見ながら、そのワイナリーのレストランでワインを飲めば、もう感動して、それが5,000円だろうが1万円だろうが買いたくなるという感情に訴える戦略というか、プロモーションというか、ブランディングをやられていますけれども、酒蔵って比較的蔵を見せるとか、タンク見せて終わりたいなところがありますが、しっかり田んぼ、この原材料のお米はここで作られているお酒なんだということが、とても魅力を上げれるものだと思います。それですね、ただの田んぼだと、ちょっと感情に訴えるのには難しい。そこでビジュアルですよ。景観として素晴らしい棚田が、そのお酒と印象が一緒になったら、お酒の魅力も上がる。これは結局何が言いたいかというと、企業が得して、企業の価値が上がるというスタンスで、企業が棚田に関わるっていう、この循環が大事なかなというふうに思っています。

【参加者】
今の質問の続きですけれども、今の社長が12本をオーナーさんの場合には12本ということですけども、普通の棚田オーナー制度ですと、100平米で3万円なんです。それで、酒の場合には12本ということで、約3,000円ぐらいで売られていますかね？そうすると、12本というと3万6,000円ぐらいで、それで6万円、消費税入れて6万6,000円なんですけれども、それでオーナーさんからいただくという感じですかね。うちの方は正直言ってオーナー制度はお米だけで酒米云々の取り組みはやってないんですよ。今後そういう、そういう意味で参考になればなと思って質問させていただきました。ありがとうございます。

【柿澤】
ちなみに稲倉の棚田さんの酒米で、岡崎酒造さんから発売する信州亀齢は720ミリ4号瓶で3,300円です。それが12本いただけるということになっていますので、それだけでも十分元は取れないけれど、元を取るのには近いかなと思われま。日本酒ファンは多分そこに惹かれて、今年の2月に募集開始して100組限定でしたが、1日で埋まりまして、そこで岡崎さんにご相談して、20組ほど増やしていただいて、120組になりました。それも1週間足らずで全部埋まったという大人気で、実際酒米のオーナーさんの居住地っていうのは全国いろんなところにいらっしやって、酒米でなくてコシヒカリの普通のお米のオーナーさんだと、関東圏がほとんどですけれども、酒米に関しては、九州からの西日本、青森までもうバラバラで、そこから体験ですね、稲刈りとか、あと田植えもそうですけれども、車で自走で来られる方もいらっしやる。日本酒の持つ魅力に惹かれてる、ちょっと凄くコアな方々がいらっしやいますので、今年は120組酒米オーナー

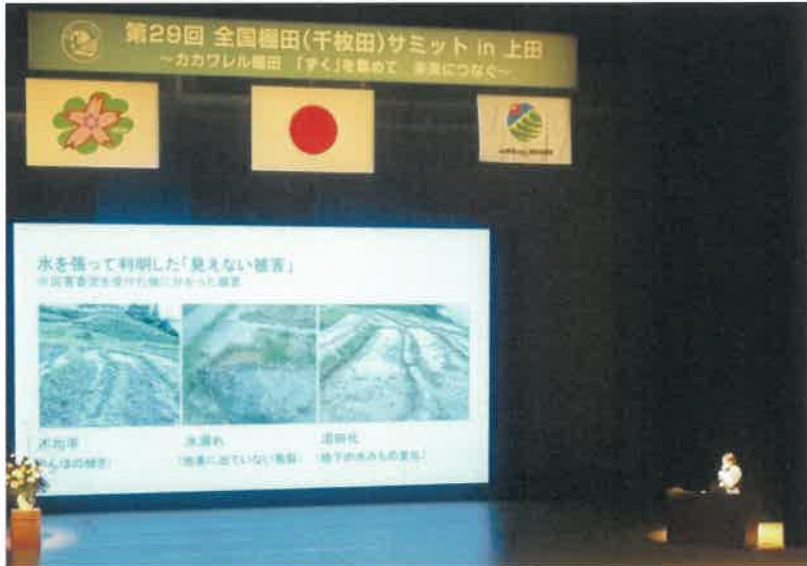
さんいらっしゃいますが、一応150組ぐらいに増やしたいなと思っておりまして、ぜひご検討ください。ありがとうございます。

【久保田】
ありがとうございました。夕方交流会がございますので、ぜひその中でお話をさせていただければと思っています。今のお話しは、価値の話だと思っています。それぞれがどういうふうに価値を考えるかっていうところに繋がると思うんですが、今日お話をさせていただきましたが、結論の出ない話で申し訳ありません。結論はそれぞれ自分で出していただいでですね、持ち帰っていただいて、良いと思うことは真似していただく、また皆さんから情報いただければ、私は良いと思えばすぐ真似しますので、ぜひご了解をいただいでですね、この事例発表会はこれで閉じたいと思いますが大変失礼しました。ありがとうございます。



※発表資料

スナップ



【分科会 振り返り】

第1分科会 棚田活用の取り組み方とねらい
～棚田保全に必要なこととは～

コーディネーター 内川 義行 氏
信州大学学術研究院（農学系）准教授



こういった基盤作りというのが、先ほど久保田委員長もお話をされていましたが、実は土台になっていることで、今回はそういうところに着目するお話をいただいたところです。

加えて農水省の方からは多面的機能ということで稲倉を対象に、多面的な機能を維持するにあたり、どれくらいお金がかかっているか調べていただいた話や、あるいは今ちょっと折衝中ということですが、来年度の事業として、こういう棚田地域でも、いろんな先ほど言ったような小さな整備ができる基盤を、きちんと予算が作りやすいようにする、という方法も今お考えだという話をご紹介いただいたりしました。

そういったことを踏まえて最後に、会場からのディスカッションということで第1会場は非常に多くの方がお越しになって150名ぐらいの方が来ていただきましたが、活発な異論ご議論をいただきました。各地のやはり困っているご様子っていうのをいただきました。そういう中でなかなか答えは出ないですけども、みんなで頑張っただけでやっていきましょうよというような、気持ちを一つにできたのではないかなというふうに思います。第1分科会については以上となります。

【分科会 振り返り】

第2分科会 棚田と教育機関との連携
～入り口としての教育機関とその広がり～

コーディネーター 満尾 世志人 氏
長野大学環境ツーリズム学部 教授



第2分科会は、教育機関と棚田っていうところをテーマにしまして、僕から話題提供できるようなことはあんまりないなというふうに思っていたのですが、やはり教育機関から見たときの棚田というのは、こういうものだという魅力みたいなものを掘り出せたらいいな、というふうに考えたところからスタートいたしました。

本日は大学側から話題提供をさせていただくことと、あと先ほど小学校の皆さんがいろいろと披露いただきましたけども、稲倉の棚田で一緒に取り組んでこられている豊殿小学校から千原先生にお越しいただいて、小学校から見たときの棚田というものをご報告いただきました。

私は生物を対象に研究をしていていわゆる生物多様性、生き物が豊かだっていうことをテーマに研究を普段行っております。田んぼは、元々生き物が非常に豊かで、我が国の生物多様性保全上も非常に重要な環境になっていますが、特に棚田という環境は、伝統的なスタイル様式を持っていることが多いので、その中でも非常に抜きん出て高い、生物が豊富な状態だということから始めました。私の研究室ではそういった生物多様性について扱っていますので、研究フィールドとして入らせていただこうと考えて、ご縁をいただき棚田の調査に入らせていただきました。

ただ、本日報告させていただいた中で申し上げましたが、僕の学生もやはり生き物が好きで来ています。生き物を守りたいですと入って来るのですが、その生き物とそこにある環境はよく見ているなというふうには思うんですけども、その向こうに何があるのかというところにはなかなか目がいかない。私も学生と一緒に入ってみて、稲倉の棚田であれば保全委員会の方がいろいろと頑張っておられているとまた関連する方々もいる。また、そこから広がって豊殿小学校の皆さんも入って来て、様々な活動をされている環境があります。その向こう側にそれを守るいろいろな人の広がりがあるというところに、学生と一緒に入って入ってきて気付くといいますが、目が行くということに初めて思い至った次第です。

今日、学生さんにも発表していただきましたけれども、生き物目線が入ってきましたが、学生の興味や関心がその向こうにある棚田の保全に取り組まれている人々の方にも意識が向くようになっていって、そちらに向けた研究というか活動も行うようになってきました。それなので改めて棚田というのは文化的な価値があり、それを核

とした様々な人が集まって何とか維持しようとしている環境であり、また一方ではその食糧生産の場だとか、生物多様性の保全だとか、まさにその多面的機能というものですけども、これが最も表れていて実感できる場所なのではないかと感じていました。

もう一つは、豊殿小学校さんからもご報告いただきました中にありましたが、小学生が活動した後の感想として、棚田がすごく綺麗だと、こんな綺麗なところがあるんだというような感想がありました。比較的近くで生活している子であっても稲倉の棚田まで来ると、そういった感想を持つというところに、棚田のパワーが出ているなと実感しました。また、僕の個人的な感想になりますが、僕も小学生のときに東京ですけども、田んぼで田植え体験を授業の中でやっていて、すごく記憶に残っています。山の田んぼに行くと泥に入ったりやたらとヘビがいた記憶が残っていますけど、でもその場所の風景・インパクトというのは全く残っていないくて、棚田が持っている本当に根源的なパワー、話題提供の中では名付けえぬ価値、というふうに呼ばれていましたけれども、そういったものが本当に備わっているところだなというのをコーディネーターの立場ですけど、改めて発見することができたと感じています。

また会場からの意見等もいただきまして、共有できたことですが、私としては教育機関と連携できるいろいろなところに広がるというテーマを本当に安易に考えていました。会場からいただいた意見の中では、やはり受け入れる体制がなかなか取りにくいんだということもいただいて、もう少し教育機関として主体的に入っていけないと、連携や広がりというところが地域的な広がりも持っていけないと、今後の発展に繋がらないという気づきを得たところです。

全くまとまりませんが、第2分科会の報告は以上になります。

【分科会 振り返り】

第3分科会 企業も棚田も得するかかわり
～稼ぐ棚田を考える～

コーディネーター 岡崎 謙一 氏
岡崎酒造株式会社 代表取締役



いったことはしっかり保全委員会の方たちと一緒に進めていかなければいけないと思っています。

最後になりますが、先ほどの分科会でもお伝えしましたが、民間がそこで稼ぐって言う人が現れたときに、ちょっと躊躇しますよね。この人に荒らされて終わっちゃったらとか、ということを感じるとはありますが、その辺がやっぱり信頼関係だと思います。たまたま私達岡崎酒造は元々家族でオーナーになって、その後酒米作りがあって、酒米オーナーという仕組みがあって、オーナーさんをいっぱい連れてくると言うシステムがあったから、次のステップって言うことが今順調に進んでいるのだと思います。

だから、いきなり来た人にいきなり任せるのがいいとは思いますが、久保田さんが5年前、6年前に委員長になるときに、この棚田は本当に続くんですかって僕はちょっと半信半疑で聞きました。正直皆さん愚痴ばかり言っていたのでこのままじゃ無理だよ、もう高齢化しているし、人もいないしって言う声をいっぱい聞いたので久保田さんが委員長になって、やめたとかになるんじゃないですかみたいな話をしたら、久保田さん70歳で俺は5年間、必ずやり遂げると。お金がなくなったら俺は自己資金を出すとかあちゃんにも言ってあるという覚悟を聞きました。そこで、民間岡崎酒造は、5年間しっかりやろうと、本気でやりますって言うところで動き出しているサイクルでもあります。

すごい良いご縁だった部分は結果としてありますが、最初の一步はそういう感じでまずやるという覚悟があって、たまたまご縁ですけれども、やるという人についていきたいという人が増えていく。多分1人1人しかもう増えていかないですよ。いきなり大きな民間企業がやってくれるのは、逆にいいのかなと思うぐらい大きな資本が動き出すことに怖さもありますよね。それよりも一つ一つの人間関係が積み重なって、10年後20年後こうなったらいいよねって言う動きを取ることが大事なのではないかと思っています。10年後には3000万円のオーナー収入を得られる稲倉の棚田を目指して頑張っていきたいと思います。報告は以上になります。

【分科会 振り返り】

第4分科会 子どもたちが創る棚田のミライ
～アイデア出しワークショップ～

コーディネーター 沓掛 瑞穂 氏
アソビノ 代表



私は非認知能力を育てる教室をやっております沓掛と申します。

非認知能力という言葉をあまり聞いたことないと思いますが、よく認知症って言うと思いますが、認知ではないという、あらずという言葉で非認知能力なのです。これはどういう力かという、例えば人と関わる力とか意欲とか自己肯定感とか、こういう力を私は自分自身の経験で子供たちに必要だと思ってこの教室をやっております。どんなことをやっているかという、プログラミングをやったり、スポーツをやったり、食育をやったり、アートやったりとか本当にいろんなことをしています。

農業というカリキュラムもあって、その中の一つでこの稲倉の棚田に関わらせていただいています。

今日お話をさせていただいたところでは、担い手という話が出ましたが、子供たちは担い手の直近というよりも、その次の次世代という感覚が、おそらく皆さんおありではないかと思っています。

近々の課題は担い手だと思いますが、本当に子供ってどうなるかわからないですし、本当に答えが出ない。けれども20年後にこの地域が本当に残っているためには、子供たちに今から本当の原体験を作っていくことって大事だと感じていて、特に先ほど豊殿小学校の子供たちの合唱にあったように、あの子たちが五感を使って何か泥をぐにやぐにやしていたとか、ああいった感覚が大人になったときに、魂というか身の中に入っているって言うものを作っています。

第4分科会では4グループに分かれたメンバーの方たちが棚田の未来について人・物・事の三つの視点から意見を書き出し、ポストイットでワークショップ形式で取り組みました。

これも体験型で自分自身でインプットするだけではなく、考えて気づいて自分で見える化をしていく、文字で書いてディスカッションしていくっていう場を作りました。面白いことにソフト面の課題が出たのが2チーム。残りの2チームがハード面の課題が出てきました。ソフト面だとSNSとか集客のほか草刈りをイベント化して楽しむのに対し、ハード面では補助金の有効活用とか組織作りが必要だとか、よりリアルなところですね。

このソフトとハードが両輪で出たのがかなり面白かったなという印象です。私の分科会ではあくまでもこの場で久保田委員長もおっしゃっていましたが、本

に答えはないんです。答えはないし、成功例を自分たちの地域に持ってきたとしても、本当に風土と文化と何かが違うから、それが成功するとは限らない。

けれども、最適解というものはあるのではないかと。これは子供たちも言っているんですけど、正解探しじゃなくて最適解っていうものは見いだせるんじゃないかなというところで、素晴らしい会だったなと私自身が楽しませていただきました。あとは交流会でお話できたかと思います。以上です。

【分科会 振り返り】

- ミニ分科会 **A：地元愛を育む場所としての棚田へ**
 ～地元の人に知ってもらうには？～
- B：関わる人の多様化と可能性の拡大**
 ～作業協力者を増やすには？～
- C：10年後の棚田のあるべき姿**
 ～「変わったね」と「変わらないね」には何が必要？～

進行サポート 大山 慧一郎 氏

稲倉の棚田 保全委員会 元地域おこし協力隊



【次期開催地あいさつ】

大分県別府市長

長野 恭紘 様



皆さんこんにちは。大変お疲れだと思いますが、最後ですので、ちょっとお時間をいただきたいと思います。次期全国棚田サミットの開催地にご指名をいただきました別府市長の長野でございます。我ながら良い名字だと思っております。いつもいつもですね、長野市長、長野市長と言われるんで、私は長野県の人とは何かすごく親戚のような感覚でいつも勝手に思っておりました。今日皆さんとお会いできて光栄でございます。ありがとうございます。

さて、来年は第30回です。第30回の記念すべきこのメモリアルな大会をですね、別府市で開催することができ本当に光栄なことだと思います。今日はその気合を見せなきゃいけないってことで、別府市には5つの素晴らしい棚田がございます。皆さん喋る方ばかりなので、私がまとめて言いますが、鎌倉時代から続く内成の棚田、それから東山・大所それから堂面それから天間、この5つの素晴らしい棚田があるんですね。今日は30名近い棚田関係者、行政関係者、学生の皆さんですね、押しかけました。

私こうやって元気に見えますし、多分皆さん方も元気に見えるかもしれませんが、先ほどからもちょっと話出てましたが、8月の台風10号で五つの棚田それぞれに、もう甚大な被害が発生しました。

正直申し上げて皆さん方の中にはですね、棚田の関係者の中には、もうそういう気持ちになれないというような気持ちの方もおられたかもしれません。

しかし、こうして歯を食いしばって同志の皆さん方に会いに来てそして今、来年よし頑張るぞ！そして、この30回の棚田サミットを契機にしてですね、復旧復興へのキックオフを足がかりにしたいとそういう想いで我々は一つになっているんじゃないかなというふうに思ってます。

先ほど能登半島の皆さん方の発表もありましたが、私どももしっかりとこの棚田の持つ素晴らしい面、多面的な機能というのをですね次世代に紡いでいく。別府市政は実は今年100周年なんですね。100周年という気持ちもありますし次の200年に向けての足がかり101年目というそれもそれで素晴らしい記念すべき年でございます。ぜひですね、11月の1日2日、皆様方を心からお待ちを

申し上げたいというふうに思っております。

結びになりますが、この29回の全国棚田サミットご当地上田市の土屋市長さんをはじめ、本当に行政関係者の皆さん棚田関係者の皆さん実行委員会の皆さん方の素晴らしい運営に本当に感動いたしました。

これには負けていられないという気持ちでおりますので、来年ですね皆さん。別府と言えは温泉。温泉だけではありません。素晴らしい食もあります。朝から晩までいちいち楽しい別府市にですね、ぜひ皆さん方の足を運んでいただければと心待ちにしております。

最後の最後になりますが、本日お集まりいただきました棚田関係者をはじめ本当に今日会場にいらっしゃる全ての皆さん方のご健勝ご多幸ご活躍を心から祈念申し上げて私ども次の開催地別府市のご挨拶をさせていただきます。お待ち申し上げます。ありがとうございます。

【御礼のあいさつ】

長野県上田市副市長

小相澤 隆幸



ご紹介いただきました上田市の副市長を務めております小相澤隆幸と申します。

別府の長野市長が非常に元気の良いご挨拶をいただきましたので、私も元気よくいかなきゃいけないと思いました。今日は全国各地から第 29 回の棚田サミットの開催地上田に、遠くからお越しいただきまして、ありがとうございます。そしてだいま式典では最初に豊田小学校の 180 名ぐらいの全児童の皆さんが歌っていただいた「信濃の国」っていうのは、長野県で生まれ育った子供にしてみれば、ほぼ全員知ってます。カラオケもあります。そのぐらいの歌なんです。それともう一つ、棚田ラブソディという歌。いい歌だなと思ひまして、沓掛瑞穂さんと同様に私も泣いちゃいました。やっぱ小さいうちから歌とか体験とかってあると、きっと将来に帰ってきてくれるんだと担い手になるなというふうに思ひました。ぜひ帰ってきてくれよと思ひました。

棚田に対しては、私も 4 年担当係長・課長やってましたので想いが強いんですが、あの豊田小学校の皆さんの感謝の手紙ってのが、たまに来るんですよ。その中の一つでよく覚えているのが、「僕は棚田で遊ばせてもらっています。ありがとうございます。僕は大きくなったら田んぼをやりたいのでよろしく願ひします」書いてあるんです。もうね泣けてきちゃいました私。今日は先ほど七つの分科会の発表もありました。新しい気づきもあったかと思ひますけど私つくづく感じました。やっぱり「人」なのかなと。繋ぐ人、エンジンとなる人、ちょっとパズルおかしいんじゃないぐらいの想いが強い人の集合体が化学変化を起こすんだと思ひました。先ほど久保田さんが出てきて、千葉県職員、長野県職員、土地改良の仕事をやってきたと説明がありました。久保田さんの役割は棚田を守り継いでいくためにあったんだと私は思ひました。それで繋ぐ・未来に渡していくことが、久保田さんの役割だったんだと思ひます。常日頃、久保田さんにはいろんな場面において、迷ったときに私個人的にもどっち進んだらいいですか、どうやったらいいですか、ということを相談させていただいて、本当に信頼できるブルドーザーのような方です。

そう言った皆さんの集合体が今日ここにお集まりいただいているかと思ひます。どうか仲間が全国にこれだ

けいるんだという勇気を持ち帰っていただき、そういった想いを未来の子供たちに受け渡していったほしいです。それをまたその先々へと送っていくためには、苦労もあるかもしれませんが、苦しいけどニコニコしながらやるのが大事ななというふうに思ひてます。これだけ力説してお前は百姓やってるのかと言われればですけども、私も百姓はやってます。米を約一町歩ほどやってますが、日本の農業を支えるのは、大規模農家だけでなく、小規模兼業農家だという想ひもござひますので、皆さんと一緒に頑張っていきたいと思ひます。

そして明日ですけれども棚田のほかに、メルシヤンの梔子ワイナリーという 30 ヘクタールのアジアで No. 1 のヴィンヤードワイナリーがござひます。そのほかには、ため池が 100 選などがござひます。そこを見ていただいたり、岡崎さんのいる柳町を見ていただいたり、それから千曲市の姨捨の棚田を見ていただくというようなコースがござひます。稲倉の棚田、昼間の景色ものすごくいいんですけど、夜も抜群なんです。夜の景色、天気がいいと非常に夜景が綺麗なんです。神戸とか、函館には負けますけども、そのぐらい綺麗なところ。またいつか機会を作ってぜひお越しいただきたいと思ひます。そしてまたこの後、懇親会がござひますけれども、ぜひ上田のお酒と岡崎さんのお酒もあるでしょう。なかなか手に入らない商品です。それからビールですとかね、いろんなことを楽しんでいただきながら、有意義なひと時を過ごしていただいて、素晴らしい仲間をまた新たに作っていただけたらなと思ひます。

本当にここまで来るためにですね、ご尽力いただいたご協力をいただいた皆様に感謝を申し上げます。また遠いところからそれぞれ皆さんご来賓の皆様来ていただいております。本当に皆さんに感謝申し上げまして、この式典の閉会の言葉とさせていただきます。

長くなりましたが、また明日、ぜひ有意義なひと時を過ごしていただきたいと思います。

本日は本当にありがとうございました。

スナップ

